

第二節 東京帽子會社

東京帽子株式會社ハ明治二十五年十二月元日本製帽會社株主ノ創立スル所ニシテ其資本金ハ參萬六千圓ナリ同社ハ日本製帽會社ヨリ其財産并ニ權利義務共一切有リノ儘ニ買受ケタルモノニシテ工場ハ元ノ場所ニ在リ先生ハ取締役會長ニシテ益田克徳藤本文策ハ取締役タリ

同社ハ創立以來孜孜事業ニ精勵シタルヲ以テ頓ニ工場ノ英氣ヲ引立社業日ヲ追テ隆盛ニ趣キ忽チ資本ノ不足ヲ感スルニ至レリ依テ明治二十六年十二月臨時株主總會ヲ開キ更ニ參萬六千圓ノ新株ヲ募集スルコトニ議決シ爾來專ラ製造ノ改良ト販路ノ擴張トヲ務メ漸次製品ノ聲價ヲ高メ今ヤ内地製ノ帽子中品質信用兩ツナカラ其主位ヲ占ムルノ好況ニ達シタリ故ヲ以テ同社ハ創立以來年々相當ノ利益ヲ收メ毎季ノ積立金ハ積テ數萬ノ多キニ及ヒ會社ノ基礎益鞏固ナルニ至レリ之レ全ク先生ノ經營其宜シキヲ得タルノ結果ナルヲ以テ同社ハ其ノ功勞ヲ表彰センカ爲メ明治三十年二月ノ株主總會ニ於テ全會一致ヲ以テ先生ニ感謝狀ヲ

贈ルノ件ヲ議決シ株主總代ヨリ先生ニ左ノ感謝狀ヲ贈レリ

東京帽子株式會社取締役會長澁澤榮一君貴下當社創立ノ初メニ當リ盤根錯節百事多難而シテ其間ニ處シテ僅カニ一縷ノ命脈ヲ維持シ辛ク創始ノ基ヲ定メ社業漸ヲ追フテ隆昌ニ向ヒ遂ニ今日ノ盛運ヲ見ルニ至リタルモノ實ニ貴下カ規畫經營其宜シキヲ得タルノ功勞ニ因ラスンハアラス株主等既往ノ事績ヲ顧ミテ感謝ノ情甚タ切ナリ茲ニ一同ニ代リ謹ンテ別紙目錄ノ金員ヲ贈呈シ以テ慰勞ノ意ヲ表ス儀ハ菲薄ナリト雖モ實ニ株主等誠意ノ存スル所ナリ幸ニ受納アラシコトヲ冀フ

東京帽子株式會社株主總代

明治三十年三月五日

馬越 恭平

右 答 書

喜谷 市郎右衛門

東京帽子株式會社株主總代馬越恭平君喜谷市郎右衛門君貴下茲ニ手簡ヲ惠マレ本社創立ノ初營業ノ至難ナルニ當リ能ク之ヲ保持シテ以テ今日ノ隆昌ヲ致

シタルモノ之ヲ榮一ノ功績ニ歸シ慰勞トシテ別紙目錄ノ如ク贈與セラル榮一
敢テ當ラスト雖モ株主諸君カ本社ノ事業ヲ愛重シ其奏功ヲ贊獎スルニ至テハ
榮一固ヨリ以テ其感ヲ同フシ諸君ノ誠意ヲ領セサル可ラス乃チ謹テ祝儀ヲ納
メ此ニ蕪札ヲ呈シ之ヲ謝ス

明治三十年三月

東京帽子株式會社取締役

澁澤 榮一

(本章記事ハ土肥修策氏ノ報告ニ據ル)

第三十九章 製麻業

第一節 北海道製麻會社

北海道製麻株式會社ハ青淵先生澁澤喜作、小室信夫、田中源太郎、濱岡光哲、永山盛繁
等ノ發起ニ係リ明治二十年五月創立ス其目的ハ當時未タ曾テ本邦ニ栽培セサリ
シ所ノ亞麻ヲ移植セシメ大麻ヲ併セテ之ヲ原料ニ充テ紡絲織布ノ業ヲ營ミ專ラ
陸海軍ノ需要ニ供シ兼テ民間ニ麻絲麻布ヲ供給シ該品ノ舶載ヲ防遏セントスル
ニ在リ工場ノ構造、麻ノ製法等ハ主トシテ模範ヲ佛國ニ取り資本金ヲ八拾萬圓ト
定メ後百六拾萬圓ニ増加ス二十四年一月業務ヲ開始セリ
同社ハ現今資本金舊株八拾萬圓新株八拾萬圓(内四拾八萬)社債拾萬圓(内壹萬圓)ニ
シテ社長ハ澁澤喜作、取締役ハ小室信夫、田中源太郎、濱岡光哲、永山盛繁、宇野保太郎、
監査役ハ青淵先生、本野小平、山中利右衛門ナリ
同社工場器械等左ノ如シ

一 工場敷地、壹萬八千六百七拾壹坪六勺

- 一 工場建物、煉瓦平家建五千坪三合三勺
- 一 汽關馬力、火車平均實馬力三百六拾馬力（コルリス五百馬力（汽織五基））
- 一 紡錘數、六千三百錘機械三拾臺外附屬器若干
- 一 織機數、百拾壹基（外附屬器若干）
- 一 汽機運轉時數、一晝夜二十二時間
- 一 電燈器械一式、燈數五百箇（十六燭）
- 一 石炭消費高、一箇年五千噸
- 一 事務員、二十四人
- 一 技工及工場員、五十七人
- 一 職工、男四百五十二人 女八百三十一人（職工ハ大率内地ノ募集ニ係リ 寄宿舎ヲ設ケ之ヲ起臥セシム）

第一 製品

同社ノ製品ハ糸布ノ二類ニシテ糸類ハ帷子用細糸、生平用糸、蚊帳用糸、疊縁用糸、疊表及花縫經糸、用糸、漁網用捻糸、帆縫靴縫其他各種縫糸、元結用糸等ニシテ東京ヲ始メ九州、北陸、江州地方及本道各漁場等ニ洽ク販賣シ織物類ハ軍艦商船用帆布雨覆

グツク、生晒各種リンネル、其他ノ厚織麻布トシ専ラ陸海軍及遞信省ノ用ヲ始メ一般海船ノ帆地、鐵道貨車覆敷物、雨覆用、服地用トシテ其販路頗ル廣シトス蓋シ紡糸ハ第一番ヨリ第百番ニ至リ番號ヲ以テ細大ヲ區別シ其品種頗ル多キヲ以テ假リニ之ヲ大別シテ太、中太、中、中細、細ノ五類トシ織布モ亦數種ナルヲ以テ之ヲ帆布、グツク、服地、雜布ノ四類ニ大別ス茲ニ明治二十七年以後ノ製造高ヲ掲クレハ左ノ如シト云フ

品 種	紡 糸 ノ 部			
	廿七年(自四月至十二月)	廿八年(自一月至十二月)	廿九年(上同)	三十年(上同)
太 糸	二〇〇、四一・五〇 斤	五二三、八八九・二五	九四一、〇〇〇・五〇	一、〇四六、二〇二・〇〇 斤
中 太 糸	二六、五五四・五〇	一六一、九〇〇・七五	三四九、六九〇・五〇	五一三、九七一・二五
中 糸	一九一、三六〇・五〇	三二七、六七五・五〇	四二九、二〇九・七五	三三五、二九一・〇〇
中 細 糸	七、五七九・七五	二九、七九一・〇〇	一一〇、五二一・五〇	六七、一七六・二五
細 糸	一五、二三五・七五	六〇、四〇九・七五	二七、〇〇八・七五	一七、四五四・五〇

		織物ノ部			
		計			
品種	計	廿七年(自四月至十二月)	廿八年(自一月至十二月)	廿九年(同上)	三十年(同上)
帆布類	一四八、六六一・〇〇	三九九、三四八・〇〇	四九六、五一一・〇〇	七一四、〇九〇・〇〇	
グツク類	二九、六三九・〇〇	七三、六四一・〇〇	一八六、七一六・〇〇	三五七、〇一一・五〇	
服地類	七三、八二一・五〇	九八、五三〇・〇〇	七五、九八〇・〇〇	一八、四九三・五〇	
雜布類	一六、二四三・五〇	六、四五三・五〇	一八、八九〇・〇〇	六、七三九・〇〇	
計	二六八、三六一・〇〇	五七七、九六七・〇〇	七七八、一四一・〇〇	一、〇九六、三三四・〇〇	

抑同社製品ハ純粹ノ亞麻、大麻ヲ以テ紡織セシモノナレハ諸糸布トモ其質強韌ニシテ品位良好就中帆布、貨車覆雨覆等ニ用ユル「ズツク」類ノ如キ最モ良品ニシテ最モ保チ方ノ善キハ舶來品即チ「ジユート」製「ズツク」ノ遠ク及ハサル所ナリ左レハ一度該製品ヲ使用セシモノハ彼我ノ價格ニ於テ多少ノ差アルモ其

耐久ノ點ニ於テ大ニ我ノ彼ニ勝ルアルヲ以テ次第ニ我カ製品ヲ選用スルニ至リ其需用ハ年毎ニ増加ノ一方ニ向ヘリ又近來新ニ需用ヲ加ヘタルハ糸類ニ於テ漁網用細太ノ捻糸織物類ニ在テハ帆布其他ノ厚織物寢具地及服地ノ類ニシテ更ニ著シキ増加ヲ來セリ而シテ同社製品モ亦漸ク精巧品ヲ要スル時期ナレハ之ニ伴フテ益精巧ナルモノヲ製出スルノ方針ヲ取レリ目下一箇月平均製糸凡ソ二十萬斤織物十萬碼ヲ出スノ算畫ナリ

第二 原料耕作及供給

原料供給ノ如キ歐洲ニ在テハ亞麻耕作者若クハ仲買人ニ於テ生莖ノ浸水乾燥剝製ヲ施シ之ヲ纖維トシテ「リソネル」工場ハ只之ヲ紡織スルニ過キサレハ本邦ニ在テハ所謂新事業ニシテ亞麻ノ如キハ當初農家其何物タルヲ解セザリシ程ナレハ先ツ之カ栽培ヨリ教ヘサルヲ得サリキ左レハ纖維ノ製造ノ如キ耕作者ニ望ム能ハス是同社副業トシテ製線事業ヲ起シ附屬工場ヲ設立セシ所以ナリ抑北海道ニ亞麻ヲ栽培スルニ至リタルハ廿二年白耳義人コンスタンヲ聘シテ教師トナシ農家ニ勸奨移植セシメタルニ起因ス當時同社ハ道廳ト共ニ力ヲ獎勵ニ

盡シ購入ヲ豫約シ資本ヲ貸與スル等ノ方法ヲ設ルト同時ニ自ラ試作シテ栽培耕
耘ノ模範ヲ示シ百方勸奨セシヨリ農家漸ク其好作物タルヲ知リ年毎ニ耕作者増
加シ遂ニ今日ノ盛況ヲ呈スルニ至レリ今連年ノ作付反別ヲ表示スレハ左ノ如シ

年次	亞麻	大麻	合計
二十三年	二二八 _町	二六八 _町	四九六 _町
二十四年	二三五	五四	二八五
二十五年	三五七	一一六	四九一
二十六年	四二九	五〇二	九三一
二十七年	一一三七	六一一	一、七四八
二十八年	一、八六一	一、一八四	三、〇四五
二十九年	四、七〇九	一、三四二	六、〇五一
三十年	三、九七六	一、二〇〇	五、一七六

(本表反別ハ同社ニ於テ豫約セシモノ、ミニ係ル)

右數字ノ示ス如ク作付反別ノ増加斯ク長足ノ進歩ヲナセシ所以ノモノハ獎勵ノ
効與リテ力アリト雖モ抑モ亦農家カ其利益ヲ感得セシニ由ラスンハアラス實ニ
一昨廿九年ノ如キ亞麻ハ全道耕作ノ殆ント百分五ヲ占メ該道特有農産物一二
ニ位スルニ至レリ然レモ利ノ在ル所弊亦之ニ伴フハ數ノ免カレサル所農家徒ラ
ニ其利益ヲ追フテ遂ニ濫作ノ弊ヲ生シ作付反別ノ多キヲ貪リ品質ノ粗惡ヲ致ス
ノ傾ヲ生シタレハ昨三十年ノ如キ同社豫メ之ヲ警戒シ豫約當時申込反別一萬餘
町歩ニ及ハントスルノ勢ヲ制シテ大ニ其反別ヲ減少シ濫作粗造ノ弊ヲ防クコト
ヲ力メタルニ其効空シカラス果シテ前年ニ比シ良品ヲ見ルヲ得タリ蓋シ同社ハ
去ル廿六年マテ官ノ補給ヲ受ケシモ其補給ハ殆ト全ク耕作者保護ノ犧牲ニ供シ
種子肥料等ヲ廉賣シ凶作虫害等ノ歳ニ在テハ其品質ノ不良ナルニモ拘ハラズ高
價格ニ購入セシナト只管農家ヲシテ倦マサラシメンコトヲ力メ經營慘憺只獎勵ヲ
是レ事トシ以テ此ノ發達ヲ催進シタルモノトス之レ原料耕作ニ關スル概況ナリ
明治二十三年同社ハ初メテ同道亞麻ノ購入ニ着手セシモ當初四五年間ハ其額僅
少ナレハ年々歐洲産ノ亞麻内地ノ大麻支那麻及ジユート等ヲ購入シ以テ其不給

ヲ補ヒ來リシカ廿八年ニ及ヒ始メテ該道産ノ亞麻大麻ノミヲ以テ製造スルヲ得
 タリ然レトモ尙未タ同社工場全運轉ノ資料ニ充ツルニ足ラサリキ一昨廿九年ニ
 至リ耕作豫約反別六千餘町歩ノ多キニ達シ爾來五箇所ノ附屬製線所ニ於テ全力
 ヲ以テ剝製スルノ原料ハ業ニ既ニ十分ニシテ其纖維ハ本工場ノ全運轉ノ需要ニ
 供用シテ尙ホ餘リアルニ至レリ
 今二十三年以來ノ原料購入表ヲ掲クレハ左ノ如シ

年次	亞麻	大麻	合計
二十三年	一、四一六、八七二 <small>斤</small>	七八八、四〇三 <small>斤</small>	二、二〇五、二七五 <small>斤</small>
二十四年	四九二、八一二	四三八、六三四	九三一、四四六
二十五年	九四四、〇九九	九四八、〇五九	一、八九二、一五八
二十六年	二、〇二四、一二六	二、〇三九、九三八	四、〇六四、〇六四
二十七年	四、五一九、七八九	六、〇六四、一九七	一〇、五八三、九八六
二十八年	九、一二八、五〇二	八、二九七、七四九	一七、四二六、二五一

二十九年	二〇、四三九、七二四	一〇、五二八、二一九	三一、〇二一、九二九
三十年	一九、四一七、五八五	六、九九九、〇九二	二六、四一六、六七七

上來述フルカ如ク原料供給ノ斯ク速ニ發達シタルハ自ラ其因ナカルヘカラス蓋
 シ亞麻ハ他ノ耕作物ニ比シ第一耕耘簡易ナルノ利アリ第二成熟速ニシテ賣得金
 ヲ收ムル早キノ利アリ第三副産物トシテ一反平均四斗以上ノ種子ヲ穫ルノ利ア
 リ之ニ加フルニ一反歩ニ於ケル生莖ノ收得モ亦農産物中第一ニ在リ故ニ其利益
 タル他作物ノ遠ク及ハサル所ナリ左レハ既ニ今日ニ在テハ敢テ獎勵ヲ俟タス保
 護ヲ要セスシテ農家各自進ンテ之ヲ耕作スルノ氣運ニ向ヒシナレハ爾後同社ノ
 事業如何ニ擴張スルモ原料ノ不給ヲ感スル如キ慮ナカルヘシ

第三 製線所

同社附屬製線所ハ現在五箇所ニシテ雁來(札幌)琴似(同上)當別(石狩)新十津川(樺戸)栗山(空知)
 是ナリ皆全運轉ヲ以テ日々間斷ナク業務ヲ執レリ蓋シ製線所ノ業務タル兩
 麻莖ノ購入浸水乾燥剝皮等ニシテ即原莖ヲ纖維ニ製シ上ルニ在リ而シテ製線ハ

總テ器械力ニ依ルモノトス各所ニ所長ヲ置キ之ヲ管理セシメ技工ヲシテ業務ヲ監督セシム其使用スル所ノ職工及浸水人夫ハ總テ九百八十六人ナリトス

各製線所一覽表

所名	敷地坪數	建物坪數	器械臺數	職工數	浸水人夫數
雁來	六一、五五八・〇〇	一、三〇九・〇〇	六六	八九	八〇
琴似	八四、三八六・〇〇	二、一九二・三三	七五	一〇九	一三〇
當別	一三三、四四九・二〇	二、〇一六・二〇	三五	七一	一六三
新十津川	八三、七三三・六八	一、八二六・二五	五四	八七	一五八
栗山	一〇八、四五二・六一	一、四四〇・〇〇	六四	八六	六二
計	四七一、五七九・四九	八、七八三・七〇	二九四	四四二	五九三

第四 同社ト道廳トノ關係

同社ハ創設ノ際道廳ニ請フテ官給技師ノ貸與、官有地所建物特別拂下ケ等ノ允許

ヲ得且株金募集ノ翌月ヨリ營業開始ニ至ル迄拂込株金額ニ對シ一箇年五朱ノ利下付、營業開始後六箇年間ハ純益ノ配當五朱ニ達セサルトキハ五朱迄ノ補給ヲ仰キタリ

利益保證年限中ハ北海道耕作者ヨリ購入スル亞麻、大麻ノ價格ハ毎年道廳ノ認可ヲ經ルコト并定款改正、資本増減等總テ認可ヲ要スルノ義務ヲ負ヘリ
道廳ハ同社建築用材料拂下官設鐵道運賃割引等ニ付テモ特典ヲ與ヘ保護ヲ加ヘタリ

(以上第一節ハ北海道製麻株式會社々長澁澤喜作氏ノ取調ニ據ル)

第二節 下野製麻會社

下野製麻株式會社ハ元下野麻紡織會社ト稱シ下野國鹿沼町ニ在リ明治二十年十月ノ交鈴木要三、横尾勝右衛門、石塚信義等ノ發起ニ係リ青淵先生、大倉喜八郎等ノ贊助ニヨリテ設立セリ其資本金ハ貳拾萬圓ニシテ渡瀬川ノ水力ヲ利用シ洋式器械ニヨリテ同國產ノ麻苧ヲ紡織販賣スルヲ以テ目的トセリ明治二十六年七月組

織ヲ改メテ下野製麻株式會社ト名ケ資本金額ヲ三拾萬圓ニ増加シ更ニ器械ヲ増置ス越ヘテ二十八年七月復タ六拾萬圓ニ増資シ日光町所野ニ分工場ヲ設ケ大谷川ノ水力ヲ利用シテ原動機ヲ運轉セリ
 明治三十年七月同社ハ日光町分工場ノ規模擴張ノ爲メ更ニ四拾萬圓ヲ増資シ資本總額ヲ百萬圓トナセリ同社現今一箇年ノ製造高ハ糸類百八十萬斤帆布ズツク類五十五萬碼内外ナリ

第四十章 製藍及インジゴ輸入業

統計年鑑ニヨルニ明治二十八年ニ於ル全國藍ノ作付反別ハ四萬九千餘町步葉藍ノ收穫高千七百餘萬貫ニシテ一大國產ナリ然ルニ染料トシテノ需用ハ益増加シ年々海外ヨリ多額ノ輸入ヲ仰クニ至レリ左ニ明治元年以降輸入表ヲ揭示ス

年次	乾		藍	
	斤	圓	斤	圓
明治元年	六、六七〇	同	一、七四二	二一、六五九
同 二年	一一、六〇〇	同	四、七五七	三二、六二八
同 三年	二一、六八〇	同	八、五四六	三三、四二〇
同 四年	四一、四四一	同	二〇、八五八	二六、一三八
同 五年	五七、二六八	同	二八、七二四	一一、五九八
同 六年	一三、四一四	同	三、一八四	七、七七九
同 七年	四、一四八	同	九六八	九、七一〇
同 八年	三二、八五八	同	六、六八九	二二、八八八
同 九年		同	一、七四二	二一、六五九
同 十年		同	四、七五七	三二、六二八
同 十一年		同	八、五四六	三三、四二〇
同 十二年		同	二〇、八五八	二六、一三八
同 十三年		同	二八、七二四	一一、五九八
同 十四年		同	三、一八四	七、七七九
同 十五年		同	九六八	九、七一〇
同 十六年		同	六、六八九	二二、八八八
				四、三五三
				七、〇九四
				七、三六五
				九、〇九八
				二、九〇二
				九、二七一
				一二、六三八
				三四、六七八

第四十章 製藍及インジゴ輸入業

同十七年	一、五三七 ^斤	一、三八〇 ^円 六四	同	二十四年	二、三九、六〇四 ^斤	一、八六、八五七 ^円 三〇
同十八年	五、一三二	六、三四二五二	同	二十五年	四、八三、四五八	三、八六、一九三〇九
同十九年	六、七、一〇二	八、五、五一七七	同	二十六年	四、一、三〇六	四、四四、二〇八二三
同二十年	八、三、四三九	五、六、六五三七七	同	二十七年	二、四八、九三八	三、二九、八六一四一
同二十一年	二、八四、七五一	一、五五、七二一一六	同	二十八年	四、四四、一一八	五、八一、三六九五九
同二十二年	三、九七、一六〇	二、五〇、四七〇八六	同	二十九年	九、五四、二〇五	一、〇六七、三五七三五
同二十三年	二、六五、三六〇	二、〇一、〇七〇九五	同	三十年	一、一九四、一三四	一、五三八、〇二一八〇

青淵先生ノ家世々藍ノ耕作製造及販賣ヲ業トス先生未タ志ヲ立テ家ヲ出サル前ニハ之ニ従事セリ先生ノ從兄尾高惇忠新五郎頗ル農業ニ熱心シ最モ藍ノ改良ニ苦心シ自ラ藍香ト稱ス先生ト共ニ本邦藍業ノ發達ニ就テ計畫スル所多シ先生及惇忠等常ニ「インジゴ」ノ輸入終ニ本邦産ノ藍ヲ壓倒スルニ至ランコトヲ憂フ是ヨリ先キ薩摩ノ人五代友厚本邦ニ於テ「インジゴ」ヲ製出センコトヲ企圖シ大ニ資本ヲ集メ朝陽館ト稱シ盛ニ事業ヲ始メ大失敗ヲ來ス其他「インジゴ」ノ業ヲ試ムルモノ盡ク皆ナ失敗ス此ニ於テ世人一般ニ「インジゴ」業ハ氣候土質等ノ關係ヨリ到底

我邦ニ不適當ナリト殆ト確信スルニ至レリ
惇忠等亦「インジゴ」ノ製方ニ従事シ屢失敗ス然レトモ毫モ屈セス廣ク全国各地ニ就テ藍ノ耕作方法種子ノ撰ヒ方等ヲ攻究怠ラス其結果製藍會社ノ設立ヲ見ルニ至レリ

製藍會社

製藍會社ノ起源ヲ按スルニ五代友厚ノ朝陽館失敗スルヤ竹内萬二郎ト云ヘルモノ其遺法ヲ傳ヘ業ヲ東京淺草ニ開始ス小笠原島山藍ノ最モ製藍ニ適スルヲ考ヘ同島ノ開墾ニ着手ス然レトモ中道ニシテ失敗ス竹内ノ書記ニ今川肅ト云ヘルモノアリ小笠原島藍作ノ將來見込ニ付詳細ニ調査シ其復興ヲ先生及惇忠等ニ計ル先生依テ同志ト協議シ製藍會社ヲ設立ス

製藍會社ノ資本ハ拾萬圓ニシテ營業年限ヲ三十箇年トシ明治二十一年三月二十九日東京府廳ハ設立ノ認可ヲ與ヘタリ同社ノ目的ハ日本藍製造ノ改良ヲ圖ルカ爲メニ小笠原島産藍ノ蕃殖ヲ其第一着手トシ併セテ其製藍ヲ販賣スルニアリ明治二十年十一月今川肅カ小笠原島ヲ巡回シテ取調タル目録見書ノ要領左ノ如シ

小笠原群島中山藍栽植ニ適スルノ地ハ父母兩島弟島北ノ島婿島嫁島煤島等トス而シテ現在ノ栽植地ハ父母兩島ニシテ父島ニ五町七反歩母島ニ一反歩餘アリ今之レヲ擴張シテ盛大ニ蕃殖セントスルニハ先ツ父島ヨリ始ムルヲ以テ便宜トス依テ此ニ父島丈ノ豫算ヲ掲ク

此ノ父島ニ於テ開墾スヘキ面積ハ凡三百町歩ニシテ之レヲ開拓スルニ苗木ニ限リアルヲ以テ一時ニ開墾スル能ハス故ニ愚考スルニ地形ニ據リテ之レヲ六區ニ分割シ每區平均五十町歩トシ第一區ヨリ漸次ニ開クヘシ而シテ其仕様ハ最初ニ勇壯熱心ノ男子百名ヲ撰募シテ終始開拓ニ從事シ諸島ニ跋渉シ成業ノ後ハ永遠此ノ事業ニ隨從シ其開墾地世話役トシテ獎勵監守ノ任ニ當ルコトヲ堅約シ而シテ此ノ墾ニ限リ本事業組合ノ利益ヲ配當シ又ハ開墾地ヲ分與スル等宜ク其勞ニ酬ユルノ方法ヲ設クヘシ

如斯シテ此ノ開墾者ハ一箇月一人ニテ三百坪ヲ開墾スルモノトシ即チ一區五十町歩ノ成墾期ヲ滿五箇月ト定ムヘシ(此ノ割合ハ余カ實地ニ付島民ノ開墾ニ經驗アル者ニ査シタル確實ナル割合ナリ)而シテ其開墾ヲ了リタル地ハ一町五

反歩ニ付一人ノ割合ヲ以テ八丈島及ヒ内地ノ男女ヲ移シ家屋食料ヲ給與シ培養製造ノ小作ニ從事セシム可シ

以上ノ外此ノ事業ヲ統轄スル爲メ事務長一名掛員四名ヲ置キ諸事ヲ管理セシムヘシ

サスレハ父島三百町歩開墾期限ハ三十箇月間ト豫定スヘシ今之レヲ六區ニ別ツテ以テ計算上之レヲ六期ニ分チ一期ヲ五箇月間トシ收支計算ヲ立ルニ父島三百町歩ノ開墾ニ要スル經費總額ハ金六萬五千四百三拾七圓五拾錢ニシテ此ノ間ニ於テ青黛三十三萬七千五百斤ヲ得ルノ豫算ナリサスレハ青黛一斤ノ實價金拾九錢三厘八毛八八ト成ルナリ

又成業ノ後ハ既ニ移ス所ノ小作人二百四人ヲ使役シ一年間斷ナク毎月六十町歩分ノ生葉二十七萬貫此ノ含水青黛二萬七千貫即チ二萬七千斤ヲ收穫スルノ割合ナリサスレハ一年十二箇月間此ノ三百町歩ノ藍畑ヨリ收穫スル生葉ハ總計三百二十四萬貫此ノ青黛三十二萬四千斤ヲ得ルノ豫算ナリトス而シテ此ノ成墾地三百町歩ノ一年間諸掛費用ハ何程ナルヤト云フニ概ネ左ノ如シ

一金貳萬三千八百四拾四圓也

總 經 費 高

内 譯

金四千八百九拾六圓也

小作人二百四人一箇年食料

金貳千四百四拾八圓也

同上一箇年雜給

金三千圓也

諸器械農具修繕費

金貳千四百圓也

製造及小作人小屋修繕費

金八千百圓也

石灰三十二萬四千貫目代但七百二十町步分

金三千圓也

事務所給料雜費

サスレハ一年金貳萬三千八百四拾四圓ヲ費シテ青黛三十二萬四千斤ヲ得ルモ
ノナレハ此ノ經費ヲ收穫高ニ割當スルニ青黛一斤ノ實價金七錢三厘五毛九三
ナリ

如斯豫算ナルカ故ニ此ノ山藍蕃殖ノ事業ハ須臾モ打捨置クヘカラス然レモ實
際ニ於テハ天災又ハ地力ノ厚薄風向日射乾濕ノ如何及ヒ四季降雨ノ多少等ニ
據リテ其收穫ノ割合此ノ豫算ノ如クナラサルハ素ヨリ豫期スル所ナリト雖モ

島中ヲ縱横ニ跋渉シ其地勢地質及ヒ樹木等ノ有様ヲ視ルニ島勢ハ東西ニ短ク
シテ南北ニ長ク其面積二千五百町步餘ナリト云父島ヲ云フ以下同斷全島滅後
火山ニシテ崖峭丘岡相率イテ群ヲ爲シ峻險各差アリ途ニ堆載シテ數尺ノ高山
ヲ爲ス其稍著大ナル者ヲ三日月山大根山旭山鐺山振分山棚挽山初子山夜明山
飯盛山野牛山等トス此ノ内最モ峻秀ナル高嶺ハ夜明山ニシテ海面ヲ抽クコト
實ニ一千三百尺ナリ又川ノ稍大ナルモノハ北袋澤ニ在ルハッ瀬川トス其幅員
凡ソ十間餘アリテ水深ク之ニ亞クモノ南袋澤川トス其幅員前者ノ半ニ過キス
此ノ他溪水滾流シテ小溝ヲ爲スモノ少カラス而シテ高岳ニ登リ一望スレハ地
勢恰モ怒濤ノ參互錯激シテ出沒定メナキカ如シ故ニ將來開墾スヘキ地ハ斜面
ナラサルハナク而シテ其斜度ノ緩急一ナラス

地質ハ上層植物化土ヲ以テ堆包サル、モ元來古期火山石灰ヲ以テ全島ヲ組成
シタリ又此ノ土ニ生育スル樹木ハ針葉樹ハ絶テ無クシテ全地濶葉樹ヲ以テ蓋
ハレヘコ龍鱗木椶櫚(タク)ビンローノ類殊ニ多ク中ニ就テ真正喬木ト稱スヘキ
モノハ「シマグハ」キチビ「レツドアイロンウード」ホイソンウード「アレキサンドル

ウッド「ブラツキアイロンウッド」シートリマーナ「マウテンハアヲ」シーダア「
トモダシ」テラウッド「アツブルウッド」ドモドノキ等ニシテ大小各、雜生シ其他種々
ノ喬灌木密生シテ殆ト寸地ヲ殘サス(尤モ海岸傍近ノ地ハ否ラス)數年間落葉腐
木堆積シテ養土ニ化シ滿地ノ蘚苔ハ巧ミニ水濕ヲ涵養シ加之ニ氣候ハ一年間
ノ極冷六十度ヲ降ラス極熱九十度内外ニシテ平均六十七八度ニ居ルコト多シ
ト云フ

殊ニ又此ノ藍草ノ本土ニ栽植シテ利益多キハ他ノ甘蔗綿等ノ如ク風害虫害鹿
害ノ憂ヒ更ニ無ク其製造ニハ火力ヲ用ヒス故ニ薪炭ヲ消耗スルノ恐レナク又
本草ハ殊ニ日光ヲ必要トスルモ甚タ水濕ヲ好ムカ故ニ之レヲ開墾栽植スルニ
當リテハ點々樹林ヲ存在シ豫テ水濕ヲ給スル覺悟ナカル可ラス故ニ此ノ山地
開墾ハ學理ニ背戻シテ彼ノ全山ヲ裸禿トスル等ノ大害ヲ後來ニ遺スノ杞憂ナ
シ然レモ將來盛ニ栽植スルニ至ラハ地力ヲ消耗スルノ恐レアリ宜シク今日ヨ
リ之レカ肥培ノ要ヲ講究セサル可ラス

製藍會社ハ事業着手後數多ノ困難ニ遭遇シタリ青淵先生ハ例ノ熱心ト耐忍トヲ

以テ種々維持ニ盡力シタルモ到底前途ノ見込立サルヲ以テ明治二十五年八月二
日ノ總會ニ於テ解散ヲ決議セリ會社ノ創立以來費ス所二萬五千餘圓土地ノ開墾
四十八町歩餘ナリ解散ノ理由書左ノ如シ

本社ノ事業地ナル小笠原島ハ一昨年七八月旱魃ノ災ニ罹リ昨秋數回ノ暴風雨
ニ遭遇シ藍作ニ非常ノ損害ヲ蒙リタルカ故ニ爾來一方ニ於テハ其恢復ヲ計リ
一方ニ於テハ更ニ將來ノ見込ヲ調査セシニ元來該島ノ耕作地ハ斜面ニシテ肥
料施用ニ便ナラサルヲ以テ其藍作ハ自然ノ生育ニ放任スルノ外ナク加之毎年
二三月ノ交西風アリテ其發生ヲ阻碍シ七八九月ノ旱魃ニ際シ其莖葉共ニ枯死
スルノ有様ナレハ到底充分ノ收穫ヲ望ムヘカラサルナリ實ニ如此ニシテ培養
ノ道ナク前途到底望ナシ是本社解散ノ案ヲ提出シテ其議決ヲ請フ所以ナリ

製藍會社ハ失敗ニ歸シタルモ先生及尾高惇忠等ノ藍業ニ就テノ熱心ハ毫モ減少
セス明治二十五年惇忠ハ加藤某ト共ニ研究ニ研究ヲ加ヘタル末終ニ「インジゴ」製
造方ニ就テ一大發見ヲ爲セリ朝陽館ノ失敗以來多數製藍業者ノ失望ハ茲ニ始テ
回復ノ端ヲ開キタリ從來農商務省ノ技師ヲ始メトシ一般ニ製藍業者ハ本邦ノ生

葉藍ハ到底「インジゴ」ノ製造ニ適セスト信シタルモノ茲ニ至リ其誤謬タルコトヲ發見セリ

尾高惇忠ハ從來「インジゴ」製方ノ失敗ハ水ノ温度ノ加減ニ注意ヲ怠リタルニ心付タリ印度ハ熱帶地方ナルヲ以テ其汲置キノ水ノ温度ハ必ラス我邦ニ於ル汲置キノ水ノ温度トハ非常ニ懸隔アルヘキ點ニ注目シタリ加藤某ハ一日生葉藍ヲ水ニ入レ之ヲ湯ニシタルニ温度ノ或點ニ達スルヤ藍分盛ニ分離シ其温度ヲ過クルヤ分離ノ止ルコトヲ目撃シ之ヲ惇忠ニ報告シ共ニ研究ノ末ニテ「インジゴ」製方ニハ或ル一定ノ温度ノ湯ヲ必要トスルノ秘訣ヲ發見セリ此ノ發見ハ農商務省特許局ノ認可スル所トナリ特許ヲ附與セリ其後益改良ヲ加ヘ完全ノ「インジゴ」製出スルニ至レリ惇忠ハ速ニ此ノ製方ヲ全國ニ普及シ藍作人カ藍玉ノ製造ニ費ヤセル無益ノ勞力ト困難トヲ排除センコトヲ企圖シ各地ヲ旅行シテ新製方ノ利ノアル所ヲ説キ示セリ

然ルニ茲ニ又一ツノ困難ハ我邦ノ染物屋ハ多年藍玉ノ使用ニ慣レ「インジゴ」ノ使用ヲ知ラス從テ着色上成績宜シカラス其「インジゴ」ノ利ヲ稍解スル者モ到底藍玉

ト混シテ使用スルニアラサレハ用ヲ爲サストセリ就中群馬縣ノ機業家ノ如キハ組合規約中ニ「インジゴ」ヲ使用スルヲ禁スルノ一條ヲ設クルニ至レリ惇忠大ニ之ヲ嘆キ東西ニ奔走シテ染物方ノ改良ヲ説キタルニ群馬縣ノ染物屋大澤某ヲ始メ其他二三ノ有志者奮テ應スルモノアリ種々研究ヲ積テ後チ「インジゴ」ヲ輕便ニ使用スルノ方法ヲ發見シ前途製藍業發達ノ目的ヲ大ニ達スルヲ得タリ

印度藍靛輸入

青淵先生及尾高惇忠等ハ本邦製藍業ノ改良發達ニ熱心スルニモ拘ハラズ外國ヨリ藍靛ノ輸入年々益増加シテ止マサルヲ以テ茲ニ大ニ疑ヲ起シ必竟外國産ノ輸入増加スルハ產地價格ノ低廉ナルニアリ其低廉ナルハ如何ナル原因ニ基クカ之ヲ明細ニ調査スルニアラサレハ輸入ハ果シテ防禦シ得ヘキヤ將又本邦産藍ハ到底競争ニ打勝ツコト能ハサルヤ其目的ヲ決スルコト能ハス依テ茲ニ外國產地景況調査ノ議ヲ決セリ

本邦輸入ノ「インジゴ」ハ多ク印度ヨリ來ル其他マニラ、スマトラ、ジャバ等モ產地ナリ先生ハ先ツ主トシテ印度藍ノ景況ヲ調査スルニ決セリ而シテ之ヲ調査スルニ

ハ適任ノ人ヲ派遣セサルヘカラス惇忠ノ知人ニ青木直治ト云フモノアリ嘗テ職工學校ニ於テ化學ヲ修メ東京本所區柳島ニ染物工場ヲ開業ス先生直治ニ説キ之ニ通辯トシテ有賀文八ト云フ者ヲ附シ明治廿七年十月二十八日東京ヲ發シ印度ニ赴カシメタリ直治ノ一行ハ十一月二十五日孟買ニ着シ「インジゴ」ノ集散其他商業上ノ慣習等ヲ取調ヘ内地ニ入込ラ「ボール」パンジャップ等ヲ經過シテ「カルカッタ」ニ出タリ此ノ地ハ藍ノ最大市場ナリ翌年二月再ヒ孟買ニ出テ「マドラス」ニ向ヒ「ボンジセリ」チ、コリンヲ通過シ「コロンボ」ニ渡リ三月二十三日歸國セリ直治ノ報告ニヨリ印度藍ノ景况頗ル明瞭セリ此ノ行直治ハ試ニ印度藍八萬五千圓ヲ買入之ヲ本邦ニ輸入シテ販賣セリ

明治二十八年十月先生ハ直治ニ資金ヲ貸付シ青木商會ヲ起ス印度藍ノ輸入販賣業ヲ營マシメタリ青木商會ハ同月十六日本所柳島横川町ニ開店シ後チ日本橋區堀江町ニ移轉セリ二十九年六月三十日繪具商新井良助此ノ商會ニ加入ス是ヨリ先キ二十八年十月有賀文八ハ青木直治ニ代リ再ヒ印度ニ渡リ藍錠凡八萬圓ヲ買入輸入セリ然ルニ此ノ度ハ藍ノ鑑定等ニ熟練ヲ缺キタルヲ以テ計算上利ヲ見ル

コト能ハス直治ハ内地ノ事業多忙ニシテ年々渡航ノ暇ナク他ニ適任者ヲ得ルコト難カリシヲ以テ青木商會ハ二十九年十二月十日限り解散セリ
青淵先生カ印度藍ノ調査並輸入ノ試験ニ就テ費ヤセシ所前後七千餘圓ニ達セリ
先生ノ藍業ニ對スル目的ハ未タ充分達セスト雖モ其經驗ヨリ生スル所ノ利益ハ實ニ尠少ナラス後來必ス大ニ此ノ業ヲ繼テ起ル者アラシ

第四十一章 水産業

第一節 緒言

我邦ハ天然ニ頗ル水産ニ富メルニ拘ハラズ遺利甚タ多ク改良發達ノ餘地尙ホ廣シ政府ハ水産局ヲ置キ水産博覽會ヲ開キ水産調査所水産講習所ヲ設ケ頗ル水産業ノ獎勵ヲ力メ又大日本水産會アリ有志ノ士集リ斯業開發ノ攻究ニ怠ラス青淵先生ハ同會ヨリ有功章ノ贈與ヲ受ク

大日本水産會有功章贈與證狀

有章功(徽章圖略ス)

從四位 澁澤榮一

水産上有功ナルヲ認メ茲ニ大日本水産會有功章ヲ贈與シ以テ其功績ヲ表彰ス

明治二十六年十月七日

大日本水産會頭

大勳位 彰仁親王

明治二十六年六月先生ハ同會ノ十一回大集會ニ於テ同會員ノ請ニヨリ左ノ演說
アナセリ

諸君、今日ノ大集會ニ當リマシテ私ニモ水産ニ關スル意見ヲ述ヘヨト幹事長カ
ラノ御委託テコサイマシタ、右ニ就キ此ノ席ヲ濱シマシテ甚タ不束ナ愚見ヲ此
ノ處ニ陳述致シテ清聴ヲ煩サウト考ヘマス、元來私ハ水産ト云フ事業ニハ甚タ
縁ノ遠イ商賣ニ從事シテ居リマスル爲ニ、是レ迄關係シタコトモ甚タ少ナイ故
ニ實驗ト云フコトモアリマセヌ、又一方ニ學問上研究致シタト云フコトモコサ
イマセヌカラシテ、實ハ此ノ席へ出テ從來御熱心ニシテ種々ノ調査アル諸君ノ
御面前テ右様不束ナ陳述ヲ致スト云フノハ獨リ恐縮ト申スノミナラス、自身モ
甚タ迷惑、聽ク御方々モ御迷惑、少シ御迷惑ノ競争ト云フ姿カアルケレトモ此ノ
席ヲ濱シマスル以上ハ此ノ處ニ一言ヲ申述ヘサルヲ得マセヌ、水産事業ハ國利
民福ヲ保護スルモノテアル、又水産事業ハ廣大無邊ノモノテアル、殆ト天工ノ無
盡藏テアル、又水産事業ハ日本ニ於テハ殊ニ注意ヲ厚クセネハナラス、日本ノ地
ノ利ハ水産事業ニハ最モ適應シテ居ル等ノ事柄ハ最早ヤ是レ迄ニ諸君モ御申

遊シテコサイマスカラ、不經驗ナル私カ亦蛇足ヲ添ヘテ御耳ヲ煩ス必要ハナカ
ラウト考ヘマス、依テ他ノ意見ヲ申述ヘヤウト考ヘマス、扱自分カ千思萬考シタ
コトモ熱練ノ諸君カラハ陳腐ノ事柄ニテ自分ニハ是レソ立派ナ考按テ新發明
ノモノト思フタコトモ或ハ遼東ノ豕タルコトヲ免レヌト私ハ考ヘマスケレト
モ、只自分カ水産ノ獎勵ニ付テ斯クナレカシ斯克望メカシト云フコトヲ一應申
述ヘマス迄テアリマス熱、思フテ見マスルト日本ノ水産事業カ今日ニ沿革シテ
居ル所ハ、矢張農業若クハ工藝ト同一揆ニ出テ居ルヤウニ見エル、同シ道行ヲシ
テ居ルヤウニ考ヘマス、尤モ農業モ工藝モ五七年此ノ方ハ少シク景況ノ異ツタ
所カアリマスカ、多クハ個々別々ノ自活のノ仕事テアル、例ヘハ人力車夫カ一日
ニ二十錢ヲ見當テニ働クカ如ク、自身一家ノ生活ヲ保ツノミノ主義テ働イテ居
ルト云フモノテアリマス、是レカ今日日本ノ農工業ニ屬スル實況ト言ヒタイ、否
言ヒタクハナイカ言ハナケレハナラス、水産業モ亦此ノ如キ有様テハナイカト
思ハレル、此ノ姿テノミ行キマスレハ水産業ノ真正ノ發達ハ到底六ヶ敷クハナ
イカト思ハレマス、但シ自活のノ働キトテモ、惡イト云フ譯テハナイ、夫レモ必要

テアリマセウケレトモ別ニ此ノ事業ニ就テ資本ト勞力ト相合シテ之ニ加フルニ學問ヲ以テ營利的ノ大組織カナケレハ眞ニ獎勵發達シテ行クコトハ六ヶ敷カラウ、試ニ他ノ比例ヲ以テ之ヲ論シマスルト、彼ノ紡績事業テアリマス、私モ此ノ紡績業ニハ大ニ關係シマシテ二三ノ會社ノ創立ニモ營業ニモ種々考按ヲ盡シテ見タコトカ、コサイマス、丁度似寄ツタ比例テ、今ノ一家自活的ノ働ト資本ト勞力ト學問トヲ合併シテ規模ノ大キナ働キトノ違ヒヲ證明スルニハ適當ノ話テアラウト考ヘテ、茲ニ申述ヘマス、日本ノ紡績絲ノ古ノ仕來ハトウ云フモノテアルカト申スト綿ハ畑テ出來ル、其畑テ出來テ取上ケタ綿ヲハ弓ノ弦ノ如キモノテピンノ打ツ、是レハ綿打チノ職工ノスル仕事テアリマス、其綿ヲ打ツ前ニ綿繰器械カアリテ此ノ器械テ綿ヲ繰リテ其實ヲ抜キサウシテ今申シタ弓ノ弦テピンノ打ツ、斯ク打チ揚タ綿ヲ篠卷ト稱ヘ此ノ篠卷ヲ以テ綿糸ヲ紡出スルト云フノカ手順テアル、先ツ耕作カラ今ノ綿ノ仕上ケハ暫ク擱テ其紡出スルノハ或ハ婆サントカ娘トカ一人前ノ仕事ハ漸ク一日十五匁位シカ出來ナイ、僅カ其日ノ食料ニ足ルカ足ラヌ位テアリマス、ケレトモ農間ノ仕事テアリマスカラ先

ツ夫レヲ一種ノ副業トシテヤリマス、又需用スル者モ夫レヲ買ツテ間ニ合ハセテ居ツタ、之カ從前日本ノ木綿ヲ織出ス手續テアリマシタ、ソウシテ其紡出シタ綿糸ハ大阪地方テハ淡州カセト唱ヘテ隨分有名ナル商品トナツタ、又東京最寄テハ高槻草加邊ニテ多ク産出シテ一ノ商品ト稱サレマシタ、然ルニ紡績器械カ日本ニ行ハレテ來テカラハ殆ト比較ノ立テ難イ事業トナツテ、手紡ニテ百年掛ツタ綿糸ハ器械テ一年ニ出來ルト云フ有様トナツタカラ假令農間ノ副業タリトモ其副業ヲ以テ經營スル丈ケノ利益ヲモ得ラレス、故ニ一方ノ紡績器械ノ糸ノミ商品ニ歸シテ仕舞ツタ、僅カ四五年ノ間ニ左様ニナツタ、是等ハ特ニ有ル例テアツテ事々物々左様ニ比較ノ違フモノテハナイカ、此ノ水産事業ノ事モ或ハ夫レニ似寄ツタ有様カアルニ相違ナカラウト思ヒマス、此カ斯ウテアル此ノ物カ斯ウテアルト云フコトハ不熟練ナル私ニハ明言シ難イ譯テアリマスカ、若シサウ云フ事柄カアリマスナラハ私ノ企望ハ將來相當ノ資本ト勞力ト及ヒ技術ト相適合シテ一ノ營利會社ノ如キモノヲ確實ニ組織スルハ頗ル必要ノコト、考ヘマス、故ニ本會ニ於テハ向後最モ此ノ點ニ注意セラレテ獎勵ニナリタイト

思ヒマス、詰リ事物ノ進歩ハ實益ト云フモノカ一番強イ勢力ヲ持ツト云フ原則ハ誰カ何ト言ツテモ逆フコトハ出來マセヌ、果シテ然ラハトウシテモ實際ノ利益ト云フモノハ此ノ業ノ發達ヲ促スニ付テ最要至緊ノ務テアルト斷定致スヨリ外コサイマセヌ、調査モ必要テアラウ研究モ要用テアラウ、併シ只調査研究ノミテ今申ス事業ノ組立カ大イニ進ミマセナンタナラハ何事モ成功ハ覺東ナイ、拮据經營日暮レテ事モ亦已ムト云フヤウナ悲イ有様ヲ見ヌトハ申サレマセヌ、願クハ本會ニ於テハ十分ニ事實ヲ調査シテ資本勞力技術ノ三要素テ合セタル營利的ノ組織ヲ獎勵スルコトヲ心懸ケタイト存シマス、古人ノ文章ニ「智者ハ事ヲ始メ能者速フ一人ニシテ成ルニアラサルナリ」ト云フ格言カアリマス世ノ中ノ事業ハ決シテ一人ノ力ノミテ行ケルモノテハナイ、必ス之ヲ導ク人カアツテ其導キニ依テ其事ヲ遂ケル人カアル、前者唱へ後者之ヲ繼クカラ遂ニ其全キヲ得ルモノテコサイマス、私ハ茲ニ企望シマス、此ノ水産會ハ前ニ言フ所ノ智者トナツテ更ニ他ニ能者ヲ待テ相共ニ此ノ水産業ノ發達ヲ圖リ、他日其大成ヲ遂クルヲ得タイト思ヒマス、聊カ平生ノ卑見ヲ申述ヘマシタノテコサイマス(大喝采)

第二節 澁澤家洲崎養魚場

澁澤家洲崎養魚場ハ東京深川洲崎ニ在リ青淵先生ノ門下關直之是レヲ管理ス此ノ養魚場元櫻田親義ノ有ニ屬ス櫻田養魚場ノ利アルヲ考ヘ此ノ業ヲ起ス然ルニ創始ノ際經驗ニ乏シク得失償ハス既ニシテ櫻田公用ヲ以テ海外ニ在リ死去ス先生友情ニ依リ此ノ養魚場ヲ讓受タリ其後先生ハ樹木ヲ植ヘ石ヲ運ヒ池中ノ島ニ亭ヲ造リ遊覽ニ適セシメ傍ラ養魚ノ業ヲ營マシム此ノ地東京灣ニ面シ風景甚タ佳先生時ニ客ヲ招キ或ハ家族ト共ニ遊フ而シテ養魚ノ術モ經驗ヲ積テ頗ル進メリ

明治二十一年東京府根津ノ遊廓ヲ洲崎ニ移ス養魚場ノ前面ヲ埋立テ妓樓櫛比シ日夜絃歌囂シク殺風景言フヘカス且四隣地價非常ニ騰貴ス先生即チ地所ヲ賣却シ養魚場ヲ撤セント欲ス賣却過半ニ及テ止ム依テ殘存ノ部分(現存ノ坪數ニ於テ七千坪餘)ニ於テ尙ホ養魚ノ業ヲ繼續セシム先生地所ノ賣却ニヨリテ得タル利益ノ幾分ヲ櫻田ノ遺族ニ贈ル大ニ先生ノ厚義ニ感スト云フ

養魚場ハ現今一箇年鰻千五百貫、鰯大小一萬尾、鯉千八百貫、鰻ヲ産ス其味美ニシテ日本橋魚河岸ニ於テ聲價アリ宮内省ノ食膳ニモ上ルト云フ

第三節 洲崎養魚會社

洲崎養魚株式會社ノ養魚池築造ノコトハ最初澁澤家洲崎養魚場ノ管理人關直之ノ考按ニ出タリ直之養魚ニ熱心ニシテ頗ル其術ニ精ハシ常ニ洲崎海岸ニ沿フタル廣キ淺洲ノ甚タ養魚ニ適スルニ拘ハラステニ富源ヲ委棄シアルヲ慨ス切ニ青淵先生ニ請フテ資金集募ノ方法ヲ求ム先生則チ株式會社組織ノ方法ヲ授ク直之宿年ノ志達シタリト大ニ喜ヒ明治二十九年八月頃ヨリ東京深川地方養魚業者服部吉野堀口柳原等ト協議ヲ創メ其末一面ニハ地所借受及資金支出ノ義ニ付華族前田侯爵家ニ賛成ヲ求メ一面ニハ又澁澤家ニ向テ此ノ業ニ協賛センコトヲ乞ヒ終ニ雙方ノ承諾ヲ得二十九年十二月ニ至リ前田澁澤兩家及深川地方發起者中ヨリ創立委員ヲ定メ諸般ノ協議ヲナシ會社創立ノ準備ニ着手シ數回交渉ヲ重サネ三十年六月ニ至リ愈一ノ株式會社ヲ設立スルコト、ナレリ

同社ノ資本金ハ六萬圓ニシテ其三分ノ一ツ、ヲ前田澁澤兩家ニテ負擔シ殘餘ノ三分ノ一ハ深川發起人中ニテ引受ルモノトス

養魚池敷地ハ約六萬坪ニシテ該敷地ハ之ヲ前田家ヨリ向フ五十箇年借受ノコト、定メリ又前面護岸堤塘三百五十間ノ築造工事ハ之ヲ人造石業服部長七ニ命シ三十年三月工事ヲ了リ尋テ内部池ノ掘立整理工事ニ從事シ明治三十一年九月落成ヲ告ケタリ

養魚池ノ面積ハ凡ソ四萬八千坪餘ニシテ一箇年鰻一萬、鰯六七萬尾、鯉五六千貫、鰻ヲ養生シ得ヘシト云フ

第四節 青木漁獵組

青木漁獵組ハ明治二十七年ノ頃青木孝ト云ヘル者我邦海産業ニ慨スル所アリ青淵先生ノ援助ヲ得テ組織シタルモノナリ同組ハ北海道ニ在リ專ラ海獸獵ニ從事シ傍ラ外國密獵船ノ侵入ヲ防クヲ以テ目的トセルモノナリ

青木孝ハ水産業熱心家ナリ其先年米國ニ遊フヤ凡ソ十年間彼ノ國人民ノ海事思

想ニ富ミ海上ノ事業ニ從事セル模様ヲ親シク觀察シ心竊カニ其偉業ヲ羨望ス適
機會ヲ得テ身ヲ一漁船ニ投シテ北氷洋ニ航シ鯨獵ノ實際ヲ目撃シ一年有半ヲ經
テ歸航シタルコトアリ後専ラ心ヲ遠洋漁業ニ用ヒタリ明治二十六年歸朝スルヤ
本邦海産事業ノ如何ヲ察シ從來我邦ニ於ル海區ヲ判シ或ハ長崎ニ或ハ神戸ニ其
他五島小笠原島等ニ關シテ取調フル所アリタリ後又北海道ニ赴キ英領ビクトリ
ヤ所屬ノ漁船「オーション」フリース號ニ乘リ込ミ専ラ臘臍ヲ獵スルノ術ヲ研磨
シ次テ千島ニ上陸シ居ル一月餘ニシテ該獸捕獲ノ方法等ヲ調査シ歸リタリ茲ニ
於テ策ヲ按シ法ヲ設ケ之ヲ青淵先生ニ計ル先生資ヲ投シ青木ヲシテ其素志ヲ達
セシムルヲ得タリ今同組ト青淵先生トノ關係ニ付キ青木ノ述ル所ヲ見ルニ曰ク
予カ北海道ニ於ケル探見ノ結果ハ予ヲシテ一身ヲ此ノ業ニ投センコトヲ促シ
テ止マス歸京後種々ニ策ヲ立テ法ヲ按シタレトモ一寒書生ノ固ヨリ能ク起業
シ得ヘキニ非ス青淵先生ハ當代商業社會ノ泰斗ナリ曾テ一タヒ聲咳ニ接シ知
遇ヲ辱フセシヲ以テ若カス案ヲ具シテ教ヲ乞ハンニハト決心シ則チ逐一探見
ノ狀況ヲ具シテ先生ノ贊助ヲ求メタリ蓋シ青淵先生ハ我カ島帝國ノ實質ヲ改

善シ外國貿易ノ實ヲ擧ゲンコトヲ希望セラレ間接直接ニ我カ商業ノ發達及ヒ
擴張ヲ目的トシテ苟モ此ノ目的ニ適合スル所ノ事業ナランニハ事ノ大小人ノ
親疎ヲ以テ取捨セラル、コトナシ是ヲ以テ後進ノ商工業者ヲ獎勵誘導セラレ
爲メニ今日成立ヲ遂ケテ我カ商業界ニ雄飛スル處ノ者極メテ多キ事ハ滿天下
ノ知ル所ナリ予カ青木漁獵組ヲ組織スルヲ得タルモノ亦全ク青淵先生ノ援助
ニ依リテ成立シタル者ナリ

予カ始テ先生ニ此ノ事業ノ一日モ棄テ置クヘカラサルヲ具陳セシハ實ニ明治
二十七年九月ニシテ愈起業ニ着手シ資金ノ投與ヲ得タルハ明治二十八年二月
ナリ爾來四五年ノ間事毎ニ指揮ヲ仰キ業毎ニ贊助ヲ受ケ以テ今日ニ至ルト雖
モ予尙ホ若年ニシテ經驗ニ乏シク時ニ謬見ヲ懷キテ過失ニ陷ラントスルコト
ナキニアラサルモ先生ハ曾テ叱責ヲ加ヘ賜フコトナク諄々乎トシテ利害ノア
ル所ヲ指示シ着々焉トシテ進路ノ方針ヲ授ケラレ創業以來多少ノ利不利アル
ヲ免レスト雖モ幸ニ組合各位ノ信用ヲ失ハス今日ニ至ルヲ得タルハ全然先生
ノ賜モノナリト謂フヘシ

當初購求シタル獵船ヲ懷遠丸ト稱シ榎木子爵等ノ斡旋盡力ニ依リテ南洋貿易ヲ以テ目的トセル恒信社ヨリ讓與ヲ受ケタリ諸種ノ準備整ヒシカハ同年二月二十五日始メテ臘膈臍獵ノ爲メニ出帆シタリ此ノ歲不幸ニシテ海上常ニ不穩ニシテ獵業ニ適セス所謂荒天續キニシテ外來ノ獵船數百モ亦概ネ不漁ヲ嘆息シテ空シク手ヲ束ネテアラスカ近海ニ回航シタルモノ極メテ多キ有様ナリキ特ニ本組合ノ如キハ水夫銃手ノミハ熱練ヲ缺カスト雖モ獵具一式本邦仕入レナルヲ以テ一モ完全ヲ得タルモノナシ故ニ其不便言フ計リナキ状態ナリシカハ其成功最モ期シ難キ所ナリシナリ去レハ本年度收穫ノ臘膈臍ハ僅々二百十八頭ナリ其賣上代金參千七百六圓一頭ノ代價平均拾七圓ナリキ此ノ收穫ハ豫期ニ反シテ少ナシト雖モ之ヲ投入ノ創業資本ノ金額ニ對スル收入トシテハ比較的不利益ナリトハ言フヘカラサルカ如シ翌年即チ明治二十九年年度ニモ前年ト同シク懷遠丸ヲ出帆シテ臘膈臍獵ニ從事セリ本年度收穫ノ生皮五百四十八枚前年度ニ比スレハ倍數以上ニ上ル相當ノ收入ト云ハサルヘケンヤ

明治二十八、二十九兩年ノ間ノ獵業ノ結果ニ依リテ按スルニ此ノ業タル規模小ナレハ小ナル丈ケ利益乏シク從ヒテ前途ノ望モ甚タ面白カラサルヲ覺フ則チ更ラニ先生ニ計リシニ猶資ヲ投シテ規模ヲ大ニスヘシトノ許可ヲ得タレハ他組合諸員ノ翼贊ヲ受ケ茲ニ青木漁業組ノ擴張ヲ見ルニ至レリ則チ明治三十年年度ニ於テ獵船二艘ヲ増加シテ三艘トシ臘虎獵ヲモ企テ起スニ及ヘリ此ノ時購求シタル獵船ハ一ヲ八千代丸ト稱シ臘膈臍獵ニ用ヒ一ハ常盤丸ト名ツケ臘虎獵ニ用ヒタリ諸般ノ準備既ニ整頓セシカハ三艘トモ殆ント同時ニ出帆獵業ニ從業シタリ本年度ニ於テ收穫シタル臘膈臍及ヒ臘虎ハ凡ソ左ノ如シ

一臘膈臍	千四百四頭	貳萬參千八百六拾八圓
一臘虎	十一頭	九千五拾六圓

三十年度ノ收穫ハ前記ノ如クニシテ成績頗ル宜シク利益モ亦從テ大ナリ是實ニ青淵先生ノ贊助獎勵誘導ノ然ラシムル處斯業ノ爲メ感謝ノ至リト云フヘシ云々

第五節 千葉縣漁產會社

千葉縣九十九里濱一帶ノ地ハ古來有名ナル漁產地ニシテ收穫數百萬圓ニ上ル而シテ幕府時代ニ當リテハ東京深川ニ特許肥料問屋アリテ其一手販賣ヲ司トリ同時ニ漁師ニ給スルニ必要ノ資本ヲ以テシ相共ニ其業ノ發達ヲ來シタルモノナリ然ルニ維新以後舊制ヲ破壞シタルヲ以テ漁產ノ賣却其途ヲ失ヒ終ニ重要物產タルノ觀ナキニ至レリ

明治八九年ノ交時ノ千葉縣令柴原和大ニ之ヲ憂ヒ漁民ニ資ヲ供シテ收穫ノ一手販賣ヲ引受クルノ目的ヲ以テ漁產會社ノ設立ヲ急務トナシ同縣出身ノ西村勝三ニ計ル西村ハ之ヲ青淵先生ニ詢ル先生柴原及西村ト會見シ篤ト其目論見ヲ聽キタル上其計ニ贊同ス西村即チ一會社ヲ設立シ其經營ニ力メシモ漁民狡猾ニシテ一手販賣ノ目的ヲ達スルコト能ハス畢ニ數萬圓ノ前貸金ヲ失ヒテ此ノ會社ヲ解散スルニ至レリ

第六節 日本水產會社

日本水產會社ハ明治二十一年奥三郎兵衛渡邊治右衛門大倉喜八郎等ノ創立スル所ニ係ル其資本ハ二十萬圓ニシテ株式組織ナリ本店ヲ房州館山ニ置キ其營業ハ鯨屬及雜魚ヲ捕獲シ海草ヲ採收シテ各種ノ製造ヲ爲シ又魚油肥料ヲ精製シ及他人ノ依託ヲ受ケテ海外輸出水產物ヲ販賣スルニアリ青淵先生ハ友人ノ依託ニヨリ株主ノ一人ナリ同社ハ事業ノ經營其宜シキヲ得ス明治二十四年解散セリ

第四十二章 煉瓦製造業

第一節 品川白煉瓦製造所

品川白煉瓦製造所ハ東京品川ニアリ我國ニ於ケル耐火煉瓦業ノ開祖ニシテ西村勝三ノ營ム所ナリ青淵先生之ニ直接關係スル所ナシト雖モ遡テ二十餘年前西村カ經營ノ端緒ヲ開クニ當リテハ先生ノ贊助ニヨルモノ尠ナシトセス

明治九年ノ交先生ハ瓦斯局長ニシテ西村ハ其副長タルノ時ニ當リ上州高崎在乘付^ツニ石炭脈發見ノ報アリ瓦斯局乃チ技師佛人ベレグレンヲ遣シテ之ヲ視察セシム調査ノ結果ニヨレハ开ハ只下等ノ褐炭ニシテ到底瓦斯局ノ使用ニ適セサルモノナルコトヲ確カメシモベレグレンハ別ニ其地方ニテ耐火煉瓦ノ原料粘土ヲ發見セリ依テ再三之カ試験ヲナセシニ其結果至テ良好ナリ西村ハ瓦斯局ノ一事業トシテ此ノ業ヲ興スノ急務ナルヲ感シ先生ニ謀リテ時ノ東京府知事楠本正隆ニ建言シタリ然ルニ楠本之ヲ許可セサリシカハ西村大ニ之カ放擲ヲ遺憾トシ自ラ此ノ事業ヲ試ミンコトヲ欲シ先生ニ説テ其贊同ヲ得タリ乃チ其際瓦斯器械買入

ノ爲メ渡歐中ノベレゲレンニ其設計萬端ノ調査ヲ托シベ氏ノ歸着後假工場ヲ建築シ假リニ牛力ニヨリ器械ヲ運轉シ製造ヲ試ミタルニ果シテ成績ノ見ルヘキモノアリ製品ハ優ニ外國品ニ拮抗スルニ足ルモノアリシカハ瓦斯局ハ直ニ之ヲ輸入品ニ代用スルニ至レリ即先生カ此ノ業ノ計畫ニ於ケル幾多ノ贊助ハ遂ニ耐火煉瓦業隆昌ノ基礎ヲナセシモノナリ

後工部省ハ深川セメント工場内ニ白煉瓦ノ模範工場ヲ起セシカ後年西村之ヲ拂下ケ兩者ヲ併セテ品川ニ移シ品川白煉瓦製造所ノ名ヲ以テ此ノ業ヲ經營シ漸ヲ以テ進ミ遂ニ今日ノ盛況ヲ呈スルニ至レリ

第二節 日本煉瓦製造會社

青淵澁澤先生今年六十ノ齡ヲ重ネラレ、意氣ノ壯ナル身體ノ健ナル壯者ト雖モ遠ク及ハス、明年先生ノ還曆ニ當ルヲ以テ之カ祝意ヲ表スル一方法トシテ、龍門社ニ於テ先生六十年史編纂ノ舉アリ深縁アル吾社ト先生ノ關係ニ付テ、予最モ多ク先生ニ親炙シ、最モ多ク社業ニ干與セルノ所以ヲ以テ、自然執筆ノ

任ニ當ルコト、ナレルハ予ノ榮トスル所ナリ、然シテ其事タル、明治二十年吾社ノ創立ヨリ三十二年六月ニ至ル十三年間幾多ノ辛酸ヲ嘗メ遂ニ社業成功ノ今日ニ到ル青淵先生關係事業中稀ニ見ル所ノ困難歴史ナリ、記スル所ハ悉ク其真相ヲ描出セルモノナリト雖モ、元來専門外ノ事業行文拙劣ノ咎ハ予ノ甘シテ受クル所ナリ

諸 井 恒 平 述

青淵先生ト我社トノ關係

青淵先生ハ明治ノ偉人ナリ經濟界ノ泰斗ナリ新日本ノ建設者トシテ維新以來我實業ノ扶植ニ盡瘁シ製産ノ發達ヲ獎勵セラレタル一大偉功ハ夙ニ滿天下ノ認識スル所ニシテ後世千載ノ史上ニ其芳名ヲ傳ヘラル、ヤ亦タ決シテ疑ヒナキ所ナリ我輩今爰ニ逐一先生ノ功ヲ舉ケ徳ヲ頌スルノ資ヲ有セス然レトモ先生ノ吾カ日本煉瓦株式會社ニ於ケル關係ヤ實ニ尋常一樣ノ關係ニアラス吾社ノ煉瓦製造業ハ歐米ニ於テモ稀ニ見ル所ノ大規模ヲ有セルモ其資本額ハ僅々貳百五拾萬圓ニシテ之ヲ以テ先生ノ關係セラル、諸種ノ事業ニ比スル時ハ素ヨリ一小會社タ

ルニ過キス然レトモ其關係ノ深且ツ密ナルニ至ツテハ世上殆ント之カ比ヲ見サルモノアリ先生ノ吾社ニ放下セラレタル資本ハ殆ント總資本額ノ三分ノ一ニ當リ吾社カ數回ニ募集シタル社債數萬圓ハ先生ノ投資セラレタルモノ實ニ其多キニ居ル殊ニ先生ハ創立以來吾社主宰ノ重職ニ當ラレ大小ノ機務多クハ其ノ親シク決裁セラレタルモノニ係レルノミナラス工場ノ所在地タル埼玉縣大里郡上敷免村ハ實ニ斯ノ偉大ナル青淵先生ヲ生メル血洗島村ト目睫ノ間ニ在リ先生ノ廟參詣省ト工場巡視トハ必ス同時ニ於テ其足跡ヲ印セラル、ヲ見ル以テ先生ノ所感ノ如何ニ他ト異ナル處アルヘキヤヲ想像スルニ餘リアリ而カモ吾カ社業タル創立ノ初メヨリ事志ト違ヒ失敗又失敗蹉跎又蹉跎殆ント絶望ノ淵ニ沈淪セシコト幾回ナルヲ知ラサリシモ遂ニ萬難ヲ排シテ社業確立ノ今日アルヲ致セルモノ實ニ先生ノ熱誠以テ吾社ヲ扶掖セラレタル結果ニ外ナラス吾社困難ノ歴史ハ即チ先生熱誠ノ歴史ナリ事小ト雖モ亦タ以テ如何ニ先生カ國家經濟ノ發達ニ銳意セラル、カノ一斑ヲ示スニ足ランカ乞フ以下序ヲ追フテ其事實ヲ叙述セン

吾社工場ノ所在地タル埼玉縣大里郡上敷免村ハ元臨時建築局建築顧問ビヨック

マン氏及ヒ吾社雇技師チーゼ氏ノ選定ニ係リ土質ノ純良ナル原料ノ豐富ナル實ニ海内無比ト稱スヘキモ奈何セン煉瓦ノ最大需用地タル東京ヲ距ル二十餘里之ヲ競争者タル他ノ煉瓦工場カ隅田川若クハ江戸川沿岸ニ位地ヲ占メルニ比シテ大ニ地利上ノ缺點アルコト三尺ノ童子モ亦タ能ク知ル所ナリ夫レ然ルニモ拘ハラス尙ホ地ヲ此ノ處ニ撰ミタルモノ蓋シ大ニ其理由ナクンハアラス明治十八九年ノ交ナリキ我邦ヲシテ文明諸國ニ對峙セシメンニハ諸官衙議事堂ノ建築ヲ完全ナラシメサルヘカラストノ議廟廊ノ間ニ起ルヤ十九年二月新ニ臨時建築局ヲ置カレ井上伯總裁ニ獨逸建築大家ビヨックマン氏顧問官ニ任セラレ愈々目的ノ事業ニ着手セントスルニ當リビ氏ハ建築材料ノ主要物タル東京附近ノ產出ニ係ル煉瓦石ノ品質粗惡製法不備到底永遠不朽ノ建築ニ堪ヘサルコトヲ發見シ材料ノ完備ヲ期センニハ廣ク良土ヲ求メ歐式ニ倣ヒ一大機械的工場ヲ新興スルノ止ム可カラサル所以ヲ開申セリ爰ニ於テ總裁井上伯ハ之ヲ民業トシテ成功セシムルノ方針ヲ執リ民間事業家ニ對シ大ニ勸誘セラル、所アリシ結果製品ハ年七朱ノ利益ヲ加算シタル價ヲ以テ同局ヘ買上クヘキコトヲ機械煉瓦ハ本邦未曾有ノ事

業ナルヲ以テ相當ナル外國技師ヲ政府ニ於テ雇聘貸下クヘキ事此ノ二條件ヲ以テ最初池田榮亮氏其勸誘ニ應シ後チ先生及益田孝等ノ諸氏ト俱ニ合同起業スルコト、ナリ遂ニ吾社ノ成立ヲ見ルニ至レリ之レ實ニ明治二十年十月ナリキ

先是建築局ニ於テハ在伯林品川公使ヲ介シテ一人ノ製煉瓦技師ヲ雇聘セリ即チ三年間當社ノ建築及ヒ製造技師タリシナスチエンテス、チーゼ氏ナリ氏ハ既ニ來朝シテビ氏ト共ニ專ラ工場位地ノ選定ニ從事シツ、アリシカ各地探查ノ結果土質ノ純良ナル地區ノ廣大ナル上敷免ヲ措テ他ニ其所ナシト斷定シ愈工場ヲ同地ニ設クルニ決セリ此ノ工場位置ノ選定タル土質ノ純良ニシテ且ツ豐富ナルヲ主眼トシ運輸ノ便否ノ如キハ寧ロ第二位ニ措カレタルヲ以テ若シ前記ノ利益保證ナク單ニ營利ノ目的ヲ以テスルナランニハ成算固ヨリ期シ難ク或ハ吾社ノ成立ヲ見ルヘカラサリシヤモ亦知ル可カラス然ルニ何ソ圖ラン此ノ唯一ノ命脈トモ特ミタル利益保證ノ條件カ工場經營ノ中途ニシテ一場ノ夢ト化シ去ラントハ誠ニ意外千萬ノ出來事ナリト云フヘシ事ノ茲ニ至レルニハ種々ノ事情アルヘシト雖モ當時諸官衙議事堂等ヲ一時ニ改築スルカ如キハ國帑ノ許サ、ル所ナリトテ

政府ノ方針俄然一變シ井上伯遂ニ總裁ノ位地ヲ去ルニ至リシコト其最大原因ニシテ政府ノ事情ハ誠ニ不得止モノアリシナランモ吾社ハ爲メニ暗夜燈ヲ失ヒ殆ント進退維谷ルノ窮境ニ陥レリ是レ實ニ創業第一ノ難關ナリ然レモ此ノ時ニ當リ工場諸般ノ經營ハ既ニ進行ノ途ニアリ加フルニ上敷免地方天然ノ良土ハ他ノ企及スヘカラサル一大特色ニシテ例ヒ運輸上ノ缺點アルモ此ノ長ハ以テ彼ノ短ヲ補フニ足リ施設宜キヲ得ルニ於テハ事業ノ成功必スシモ期シ難キニ非ラサルノ色アリ所謂棄ツルモ惜シク棄テサルモ憂シノ境遇ニシテ創業ノ諸氏亦孰レモ躊躇逡巡容易ニ決スル能ハサルモノ、如シ此ノ際青淵先生ハ主トシテ不撓前往ノ說ヲ主張シテ曰ク苟クモ國家經濟ノ爲メニ此ノ新事業ヲ經營セントスルモノ何ソ政府保護ノ有無ニ因テ當初ノ志望ヲ二三ニスルカ如キコトアルヘケンヤ建築局ノ關係如何ノ如キ亦深ク顧慮スルヲ要セジト爰ニ於テ諸氏ノ意見全ク一定シ爾來着々トシテ工ヲ進メヌ斯クテ二十一年初春ニ着手セル工場建設工事ハ二十二年九月ニ至リ全ク其功ヲ竣ヘタリ

抑モ當時吾上敷免工場ノ設備ハ獨逸國最新式煉瓦型拔器械三臺ヲ据付ケ孰レモ

八十馬力ノ汽機ニ運轉セラレテ一日計六萬個ノ生煉瓦ヲ抽出シ同コールド式乾燥室三棟ハ(一棟凡ソ一千坪)此ノ抽出セル素地ノ水分ヲ換氣作用ニ依テ除去シ而シテ同ホフマン式燒窯三個ハ石炭ヲ燃料トシテ一日五萬個ノ煉瓦ヲ燒成スヘキ仕組ナリ則チ我國從來ノ製造法ト大ニ異ナル要點ハ手工ニ代ユルニ機械力ヲ以テシ天日乾燥ニ代ユルニ室内乾燥ヲ以テシ松薪ニ代ユルニ石炭ヲ以テスル等ニシテ就中コールド式乾燥法ニ依リ天日ヲ藉ラス秩序的ニ室内乾燥ヲ行フ一事ハ斯業上ノ一大進歩トシテ最モ深ク望ヲ囑セル所ナリキ然ルニ工場ノ成功スルヤ第一着手トシテ試製ヲ爲シタルニ型拔器械及ヒ燒窯ハ果シテ能ク豫期ノ成績ヲ修メ得タリト雖モ獨リ乾燥室ハ意外ニモ非常ノ不結果ヲ呈シ生煉瓦ノ棚上ニ置カル、コト數十日毫モ水分ヲ去ラス遂ニ白キ微ヲ生スルニ至ル吾々ノ失望果シテ如何ソヤ技師チーゼ氏ハ此ノ不結果ノ原因ヲ以テ全ク獨逸ト我邦ト氣象上ノ大差異アルニ氣付カス獨逸ニ行ハル、雛形ヲ其儘採用シタルカ故ナリト陳辯シ而カモ其救治策ニ就テハ殆ント成算ヲ示ス能ハス荏苒經過スルコト數月遂ニ雇期限滿チ空シク我邦ヲ去ルニ至レリ之レ明治二十二年十二月ノコトナリ先是吾社ノ支配人

トシテ内外諸般ノ實務ニ當リシ隅山尙德氏モ亦去レルアリ其去リシ原因ニ付テハ今明言セサルモ兎ニ角吾社ハ氏ノ爲メニ容易ナラサル創痕ヲ被リシコト事實ナリ此ノ時ニ當リ資本金ハ工場建設費ノ爲メニ已ニ全部ヲ消費シ去ラレ尙ホ若干ノ負債ヲ生セル等僅ニ生レ出テタル吾社ノ前途ハ轉々寒心ニ堪ヘサル有様ヲ呈シ居タリキ然レトモ此ノ暗雲慘憺ノ間ヨリ一點ノ光明ヲ認ムルノ想アリシハ吾社ノ製品カ乾燥室ノ不結果等製法頗ル未熟ナリシニモ拘ハラス他ノ製品ニ比シ優ニ一頭地ヲ拔キ上敷免煉瓦ノ好評到ル處ニ喧傳セラレ早ク既ニ販路ノ好望ヲ示セルノ一事ニシテ唯一ノ販路ト恃ミタル建築局ハ政府ノ方針一變ノ爲メ非常ニ其規畫ヲ縮小セラレタルモ既ニ着手中ニアリシ裁判所司法省海軍省等ノ改築工事ハ豫定通り進行セラレシヲ以テ隨テ從來有セシ特殊ノ緣故ト品質ノ精良トニ由リ該建築用煉瓦石ヲ一手ニ吾社ヘ引受クルコト、ナレリ爰ニ於テカ乾燥室ハ不結果ナルモ製造ハ寸時モ猶豫スヘカラス一面ニハ乾燥室改修問題ヲ考究スルト共ニ他面ニハ大ニ天日乾燥法ヲ擴張シテ着々製造ヲ進行セシムルノ必要アリ而シテ資本金益窮迫ヲ告ケ此ノ間ノ困難實ニ名狀スヘカラス乃チ隅山

支配人退社後青淵先生指揮ノ下ニ専ラ此ノ難局ニ當リシ予ト北川俊氏トハ具サニ此ノ實情ヲ先生ニ訴ヘタルニ先生再思ノ後増資ノ到底不得已所以ヲ洞觀セラレ爰ニ從來ノ貳拾萬圓ノ外更ニ貳萬圓ノ増資案ハ二十三年五月ヲ以テ株主總會ニ提出セラレ直チニ可決セラレタリ創立後僅々三星霜前跌後甕將來ノ運命亦タ不可測ノ場合ニ當リ此ノ重大ノ難問題カ無事總會ヲ通過スルコトヲ得タルハ全ク先生蓋生ノ德望信用ノ然ラシムル所ニ外ナラスト謂フヘシ

斯クテ焦眉ノ急ニ迫リシ刻下ノ經濟問題ハ僅カニ救治セラル、コトヲ得タリ爾來二三箇月間小康ヲ得テ漸ク胸撫下ロサントセル間モナク茲ニ不幸ノ天外ヨリ落チ來リシニソ是非ナケレンハ他ナシ此ノ年九月大洪水アリ利根小山ノ諸川大ニ氾濫シ爲メニ工場全部浸水シテ燒窯火ヲ止ムルコト數十日ニ及ヒタル一珍事即チ是レナリ此ノ時吾社ニテハ乾燥室不結果ノ爲メ代ユルニ天日乾燥ヲ以テシ場内ノ全面殆ント生煉瓦ヲ以テ覆ハレタル際ナリシカハ其災害ノ慘狀殊ニ甚シク今ヨリ之ヲ憶フモ尙ホ悚然タルモノアリ嗚呼天道果シテ是歟非歟吾社ニ災厄ヲ下スノ甚シキ一ニ何ソ茲ニ至ルヤ

元來天日乾燥法タル我邦ノ如キ雨量多キ國柄ニ在リテハ極メテ不適當ノ方法ナルノミナラス吾社ハ初メヨリ室内乾燥ノ方法ヲ執リ天日乾燥ニ對スル設備ハ殆ント皆無ナリシヲ以テ當初ノ方針ヲ變更セントスルニハ殊ニ支障甚シク到底永久ノ策ト謂フ可カラス故ニ乾燥室改修問題ハ久シク當事者間ノ宿題トシテ考究セラレ其ノ結果略ホ一定ノ成算ヲ立ツルニ至リシヲ以テ乃チ之ヲ先生ニ稟申シ其ノ決裁ヲ仰キタルニ先生ハ特ニ工場ニ臨ミ實地ヲ視察シテ遂ニ予等ノ建策ヲ採納セラレタリ然レトモ此ノ改修工事ハ巨額ノ經費ヲ要シ急速ニ成功スルカ如キハ到底經濟ノ許サ、ル所ナルヲ以テ徐々其歩ヲ進メツ、アリタル折柄突然這回ノ大水害ニ遇ヒ最早一日モ猶豫ス可キニアラス亦タ經濟ノ如何ヲ顧ミルノ遑ナシ輒チ銳意督勵シテ廿四年ノ春初遂ニ全ク其工ヲ竣リヌ幸ニシテ此ノ改修事業ハ豫期ノ目的ヲ達スルヲ得タルヲ以テ爾來乾燥ノ主力ヲ室内ニ注キ補フニ天日乾燥ヲ以テシ爰ニ始メテ規律的執業ヲナスヲ得製造上ノ一大進歩ヲ見ルニ至レリ然レトモ之レカ爲メ資本ヲ固定スルコト甚シク加フルニ昨秋ノ水災ニ關スル損害及ヒ利根水運ノ不如意ヨリ生スル失費(後段詳述)等其他種々ノ事情ヨリシテ折

角昨年増募セシ資金モ早ヤ殆ント消盡シ終リテ再ヒ資本空乏ノ窮境ニ陥リシソ
憐レナル

斯ル多難ノ際ニ於ケル一條ノ活路トモ謂フヘカリシハ二十四年春初ヲ以テ起工
セラレタル碓氷鐵道工事ノ爲メ多額ノ煉瓦需用ヲ生セシコト是ナリ同工事ニ對
スル我工場ハ比較的頗ル優勝ノ地位ヲ占メタルヲ以テ其ノ入札購買法ヲ以テセ
ラレタルニ拘ハラヌ相當價格ヲ以テ之レカ大部分ヲ吾社ニ引受クルコトヲ得タ
ルハ所謂地獄テ佛ノ感ナクンハアラサリシ然レトモ此ノ注文ノ成立ト同時ニ忽
チ事業擴張ノ必要ヲ生シ隨テ資本ノ需用益々告クルニ至リヌ一難去ツテ一難
復タ來ルトハ夫レ此ノ謂ヒ乎昨年増株案ノ墨痕未タ乾カサルニ又モヤ茲ニ増資
ヲ訴ヘンコト苟モ血アルモノ、殆ント堪ユヘカラサル所ナリサハ言ヘ今ヤ事情
切迫一日モ猶豫ス可カラス爰ニ於テ予等斷然意ヲ決シテ第二回ノ増資意見ヲ先
生ニ具狀セシニ先生ハ刻下ノ事情不得己モノトシテ直チニ採納セラレタルモ之
ヲ増株トシテハ到底成功ノ望ナク又他ヨリ借入レントスルモ信用缺乏ノ吾社ニ
對シ應スルモノナキハ明カナルヲ以テ乃チ先生ノ意見ニ基キ株主中ヨリ金貳萬

圓ノ社債ヲ募集スルノ方案ヲ立テ之レヲ株主總會ヘ提出シタリ時ニ二十四年五
月ナリキ幸ヒニ此ノ案ハ異議ナク總會ヲ通過セシモ一人ノ之レニ應セントスル
モノナシ然ルニ先生豫メ此ノ事アルヲ慮リ當時蜂須賀家ヲ代表シテ吾社ノ取締
役タリシ故藤本文策氏ニ謀リ萬一斯カル場合ニハ先生ト蜂須賀家トニ於テ之ヲ
引受クヘシトノ豫約ヲ與ヘラレシカ遂ニ此ノ社債ハ兩家ニテ各壹萬圓宛ヲ擔當
セラレ以テ圓滿ニ局ヲ結フヲ得タリ今ニ始メヌ先生ノ明識ト之ヲ信任シテ大ニ
斡旋ノ勞ヲ取ラレタル故藤本氏ノ功勞トハ今日ニ至ル迄予等ノ追憶シテ忘ル、
能ハサル所ナリ

吾々當事者カ日夕離齟トセシ經濟問題ハ社債ノ成立ニ依リテ茲ニ一段落ヲ告ケ
タリ而シテ二十四年ノ春初納入ニ着手セシ碓氷鐵道工費用煉瓦ハ二十五年ノ下
半期ニ跨リテ之ヲ完納シ其ノ結果當時ノ吾社トシテハ相當ノ收益ヲ得タルヲ以
テ儲テハ之ヨリ漸々愁眉ヲ開クノ端緒ニ就クナランカト喜ヒ祝セシハ東ノ間ノ
夢ニシテ暗慘タル黒雲ハ又モヤ吾人ノ頭上ニ覆ヒカ、ラントシツ、アリ嗚呼吾
人何ソ獨リ悲劇ニ富ムコト斯クノ如ク甚タシキヤ見ヨ碓氷工事ニ依テ得タル收

益ハ僅ニ積年ノ損失ニ對スル幾部分ヲ償フニ過キサリシノミナラス確水納ノ終結ト共ニ販路ノ方向一轉シテ競争上最モ不利益ナル東京方面へ向テ販路ヲ求メサル可カラサルナリ而カモ此ノ際東京煉瓦業ノ景況タル頗ル萎靡不振ヲ極メ不景氣ノ歎聲到ル所ニ滿チ瓦解倒産ノ悲運ニ陷レル工場モ亦タ渺カラサリシナリ彼ヲ想ヒ之レヲ想フテ轉憂悶ノ情ニ堪ヘサリシニ不祥ノ豫言ハ的中シ易キノ諺ニ漏レス爾來數月ナラスシテ着々事實ノ上ニ現レ來リ製法ノ改良經費ノ節減苟クモ手段トシテ盡サ、ル莫キニ拘ハラヌ每期ノ勘定必ス若干ノ損失ヲ醸シ偶收益ヲ見ルコトアルモ之レヲ損失ニ比スレハ實ニ十ノ一ニモ足ラサルノ悲況ニ陷リヌ如斯ニシテ荏苒日ヲ經過センカ青淵先生アリト雖モ夫レ竟ニ奈何センヤ株主ノ迷惑予等ノ痛心果シテ如何計リソ凡ソ吾社ノ歴史ニ於テ最モ悲惨絶望ノ極ニ達セシコト實ニ此ノ時ノ若キハアラスカシ

夫レ然リ然ラハ吾社ハ遂ニ成業ノ望ナキカ否々必スシモ然ラシ吾社ハ實ニ天然ノ良土テウ一大特色ヲ有セリ而カモ其供給力ハ殆ント無盡藏ナリ獨國最新式ノ機械燒窯ハ實用上益其ノ妙ヲ發揮セリ最初不結果ナリシ乾燥室ハ改修ノ目的ヲ

達シテ大ニ其効用ヲ現ハシ來レリ而シテ製出ノ煉瓦ハ至ル所ニ迎セラレテ販路頗ル好望ヲ示シツ、アリ斯克ノ如クシテ尙ホ此ノ社運ヲ挽回スル能ハストハ抑モ是レ何故ソ世間ノ不景氣ハ世間均シク享クル所ナリ吾社獨リ之ヲ奈何トモスヘカラシ然レトモ若シ此ノ際吾社單獨ノ缺點アランカ一刻モ速ニ之ヲ克復セサル可カラサルヤ言フ迄モアラス予等此ノ點ニ就テ頗ル苦心研究スル所アリ遂ニ運輸機關ノ不完全ナル一事カ吾社特得ノ幾多ノ長所ヲ没却シ此ノ社業不振ノ淵ニ陷ラシメシ最大原因タルコトヲ發見シタリ

請フ少シク溯テ吾運輸機關ノ來歴ヲ語ラシメヨ吾社創立ノ際工場所在地ヨリ其ノ製品ヲ最大消費地タル東京へ輸送スル唯一ノ機關ハ實ニ利根川ノ水運ナリキ當初ハ某川舟問屋ニ契約シテ之ニ當ラシメシカ意外ニモ非常ノ輸送澁滯ヲ來タシ僅カニ數萬個ノ煉瓦ヲ送ルニ數十日ヲ費スカ如キ爲メニ約束先ノ督責矢ノ如ク之ト同時ニ東京ヨリ引取ル燃料石炭途中ニ停滯シテ工場ノ燒窯將サニ火ヲ止メントスル等容易ナラサル混雜ヲ醸セリ爰ニ於テ運輸機關ノ改良ハ焦眉ノ大問題トナリ大ニ調査スル所アリシニ曩ニ中山道鐵道ノ開通セシ以來利根水運俄然

衰頹シテ船舶老廢運輸力非常ニ減退セシコト實ニ其主因ナルカ如シ試ニ利根全體ノ川舟貨物ヲ統計セシニ其全數ヲ以テスルモ吾社力運送セントスル貨物全數ニ對スル六七分ニ過キス故ニ今此ノ大輸送ヲ爲サントスルニハ其原動力タルヘキ船舶ヲ大ニ増設セサル可カラズ而シテ利根ノ川舟貨物タル東京ヨリ上武地方ヘ輸出スルモノ其大部分ニ居リ吾社ノ貨物ハ概シテ其ノ歸リ船ニ積載セラル、コトナルヲ以テ此ノ輸出入貨物ヲ一手ニ引受ケ經營宜シキヲ得ルニ於テハ相當ノ收益ヲ得ルコト難カラスト雖モ奈何セン當時ノ川舟問屋タル積年ノ疲弊僅カニ餘喘ヲ保ツニ過キス大ニ運輸業ヲ擴張シテ船舶ヲ新造スルカ如キハ力ヲ能ハサル所ナリ之レヲ以テ勸誘甚タ勉メタルモ遂ニ其ノ甲斐ナカリキ爰ニ於テ吾社ハ自カラ進ンテ輸送業ヲ營ムノ外策ナシト信シ乃チ明治二十二年六月吾社ノ回漕部ハ社品輸送ノ外一般川舟業ヲ營ムノ目的ヲ以テ府下小網町ニ其開店ヲ見ルニ至レリ然ルニ此ノ回漕部ノ設立ニ就テハ青淵先生深ク其ノ前途ヲ危マレ川舟ノ如キハ到底文明ノ利器ニアラス寧ロ百尺竿頭一步ヲ進メテ上敷免深谷間ニ鐵道ヲ布設シテハ如何トノ意見ヲ持セラレタルモ奈何セン當時中山道鐵道線ノ終

點ハ上野ニ止マリ今ノ隅田川線ハ勿論秋葉原線モ未タ成ラスシテ水運トノ運賃比較倍額以上ヲ要スルカ爲メ遂ニ其ノ實行ヲ見ル能ハサリシハ誠ニ遺憾千萬ナリキ而カモ此ノ回漕部ノ末路コソ吾社運ヲ悲況ニ陷ラシメタル大原因ナリシトハ後ニソ思ヒ合ハサレケル

却說愈回漕部ヲ設置スルト共ニ船舶新造ハ不可離要件ナルヲ以テ該原資金壹萬圓ノ社債案ハ二十三年五月ノ株主總會ニ於テ直チニ可決セラレ其後數月ヲ出スシテ吾社ノ回漕部ハ大小ノ船舶無慮貳百隻ヲ有シ其ノ盛時ニ在ツテハ一箇月百萬個以上ノ煉瓦ヲ輸送シテ殆ト利根水運ノ全權ヲ握ルニ至リタリ然ルニ二十四五年ノ交碓氷鐵道工事ノ煉瓦ヲ引受ケ製品ノ大部分ヲ此ノ方面ヘ仕向クル事トナルヤ東京方面ノ輸送大ニ減少シテ水運俄然閉却ヲ告ケ折角膨脹セシ運輸力ハ忽チ一大頓挫ヲ見ルニ至レリ斯クテ二十五年ノ末期碓氷工事納終結シテ再々東京方面ノ輸送頻繁ヲ來タサントスルヤ一度退縮セシ水運ハ既ニ伸張力ヲ失ヒテ又タモヤ澁滯混亂ノ舊時ニ復セルソ是非ナキ是レ船夫等カ一時活路ヲ失ヒ離散セルモノ少カラサリシト元來一葉ノ小舟年ト俱ニ老朽其用ニ堪ヘサルモノヲ生

セル等ニ基因セルナリ爾來百方其回復ヲ計リシカト遂ニ前年ノ盛時ニ及フ能ハサリシノミナラス輸送力萎縮スクノ如クナルヲ以テ折角銳利ナル機械燒窯モ爲メニ其ノ驥足ヲ伸フルニ由ナク僅ニ半數若クハ三分ノ一ノ製造ヲ爲スニ過キス而シテ製造減縮ノ結果ハ亦タ勢ヒ原價ヲ高ムルニ至ル殊ニ吾社ノ如キ負債ノ爲メニ巨額ノ利子ヲ支拂フモノニ在ツテハ此ノ原價ヲ高ムルノ割合愈甚シク其販路ニ影響スル實ニ尠少ナラス單ニ運輸機關ノ不備ナルカ爲メ工場ハ常ニ停滯品ヲ以テ充滿シ每期ノ計算多少ノ損失ヲ免レストハ豈ニ千古ノ恨事ナラスヤ

原來利根ノ水運タル吾工場ヨリ東京ニ至ル水路ノ延長無慮三十里其ノ下流ニ在リテハ舟楫ノ便稍備レリト雖モ上流ニ進ムニ隨ヒ次第ニ狹クシテ且ツ淺ク僅カニ脛ヲ沒スルニ過キス殊ニ冬季ニ入テハ蘆條タル枯川中流數尺ノ間漸ク水深五六寸ヲ保ツノミ斯ク一道ノ河流深淺不定ナルヲ以テ隨テ大中小三種ノ船隻ヲ備ヒ工場ヨリ東京ニ至ルノ間實ニ數回ノ積替ヲ爲サ、ルヘカラス其ノ煩累名狀スルニ堪エス加之和船ノ操縦ハ一ニ陰晴不定ノ天候ニ依頼スルヲ以テ性質上既ニ不規則ナルニ之ニ從事スル船夫ハ目ニ一丁字ナキ蒙昧漢多クシテ天候順良ノ場

合ニモ獲中酒食ノ資絶ヘサル限リハ東漂西泊シテ業ニ就カス抑モ此ノ輩ニ對シテ規律的動作ヲ望ムカ如キ所謂木ニ縁テ魚ヲ求ムルノ類ニシテ要スルニ到底文明的運輸機關タルノ資格ナキモノナリ然ルニ之ヲ以テ當今ノ實用ニ供セントセシハ恰モ十九世紀ノ戰爭ニ火繩銃ヲ以テセントスルモノ其ノ一敗地ニ塗ル、ニ至ルヤ亦タ當然ノミ而シテ青淵先生先見ノ明爰ニ至テ益明ラカナリ

此ノ時ニ當リ施スヘキノ策唯一アルノミ曰ク斷然上敷免深谷間ニ鐵道ヲ布設スルコト即チ是レナリ今ヤ秋葉延長線既ニ成リ隅田川線亦タ將サニ竣工セントス予ト北川氏トハ千思萬考社運回復ノ計是ヲ措テ他ニ策ナキヲ信シ陰カニ相議シテ曰ク此ノ鐵道ヲ成功センニハ管ニ巨額ノ資金ヲ要スルノミナラス敷地買收テウ一大難關ナリ吾々ノ微力ナル其成否未タ知ル可カラス然レトモ吾々不肖ノ身ヲ以テ先生ノ知遇ヲ受ケ此ノ難局ニ當リタル以來或ハ増資ニ或ハ募債ニ必要ノ建策ハ盡ク用非ラレサル莫キモ不幸ニシテ社業ノ不振今日ノ如シ不得已ニ出テシモノアリトハ言ヘ亦タ誠ニ慚愧ニ堪ヘサル所ナリ而カモ斯クノ如クシテ荏苒日ヲ經クルハ管ニ先生ノ知遇ニ酬ユル所以ニ非サルノミナラス私ニハ俸祿ニ眷

戀スルノ誹リヲ免レサルヘク公ニハ益、吾社ヲ衰運ニ導クノ罪ヲ重ヌヘシ眞ニ是レ男子無上ノ恥辱ナリ故ニ吾々ハ爰ニ最後ノ一策ト信スル鐵道問題ヲ提議シ幸ニ採納セラルレハ萬難ヲ排シテ其ノ必成ヲ期スヘク不幸言用ヒラレスハ潔ク處決スヘキノミ今ヤ區々タル事情ニ拘泥シテ躊躇逡巡スルノ秋ニアラスト乃チ明治廿七年一月九日二人携ヘテ青淵先生ヲ深川ノ邸ニ訪ヒ交々相陳情ス先生之ヲ傾聴シ沈思セラル、コト數刻口頭果シテ如何ナル語ヲ迸リ出テンカ諾カ將タ否カ兩人ノ運命實ニ此ノ一利那ニ在リ腋下冷汗ノ滴ルヲ覺エス已ニシテ先生口ヲ開テ曰ク今日ノ場合鐵道布設ノ外復タ策ナキハ余モ同感ナリ累年ノ蹉跌ニ由リ株主ノ意向如何ハ計リ難シト雖モ余ハ斷シテ其成功ヲ計ルヘシ就テハ株主總會ニ必要ナル布設費ノ豫算及ヒ線路踏査等ハ總ヘテ日本鐵道ノ毛利副社長ニ依頼スヘシト直チニ添翰ヲ認メテ附與セラレヌ此ノ時ニ於ケル吾々ノ感慨果シテ如何吾々ノ社務ニ當ル固ヨリ誠意ヲ旨トセルモ然カモ既往ヲ顧ミレハ遺策又タ妙ナカラス然ルニ先生ノ雅量一言茲ニ及ハス言下ニ此ノ大問題ヲ決セラル是レ決シテ尋常人ノ爲シ能ハサル所ナリ嗟乎人生意氣ニ感ス苟モ吾々生命ノアラン限

リ斷シテ社業ヲ完フシ此ノ信任ニ答ヘスシテ已ムヘケンヤト兩人相顧ミテ感涙ニ咽フ爰ニ於テカ即日毛利氏ヲ訪問シ請フ所アリシニ氏モ亦タ快然之ヲ諾セラレタリ而シテ事ハ總ヘテ同社保線課長國澤能長氏ノ擔任スル所トナリ爾來線路ノ踏査經費ノ豫算等着々其歩ヲ進メ地所買收モ略ホ見込立タルヲ以テ遂ニ此ノ年ノ三月深谷、上敷免間鐵道敷設案及ヒ其建設資金參萬六千圓ヲ株主中ヨリ募集スルノ議案ヲ株主總會ニ提出スルニ至レリ總會席上果シテ議論百出セリ甚シキハ此ノ上出資ヲ要スルカ如クンハ寧ロ持株ヲ放棄スルニ如カスト極言スルモノアルニ至ル左モコソアラメ創立以來幾年月ヲ經ルモ一錢ノ配當スラ爲サス却テ或ハ増株ト稱シ或ハ社債ト唱エ殆ト底止スル所ナキ有様ナレハ株主ノ容易ニ首肯セサルモ決シテ無理ナラシ然レモ重望アル先生ノ懇勸ニ説明セラル、アリ三井、蜂須賀ノ兩家ヲ代表セル益田、故藤本ノ兩取締役亦タ熱心ニ斡旋セラレシカハ衆議爰ニ一決シ社債ノ大部ハ先生ヲ始メ蜂須賀、三井等ノ大株主之ヲ引受ケラル、ノ豫定ヲ以テ遂ニ該案ノ成立ヲ見ルヲ得タリ思フニ吾社ノ今日アルハ全ク此ノ案ノ賜ニシテ而シテ青淵先生傲リセハ此ノ案ハ決シテ成立スル能ハサリシヤ

必セリ吾社ノ先生ニ負フ所實ニ斯クノ如ク深且ツ大ナリ
斯クテ鐵道布設ハ愈々實行ニ着手セラレタリ而シテ其第一問題ハ豫テ交渉協議中
ナル地所買收ノ件ナリキ豫期ニ違ハス種々ノ故障ハ紛出セリ素ヨリ該鐵道タル
一會社ノ私用ニ供スルモノナレハ買收上土地收用法ヲ適用スル能ハサルハ論ヲ
俟タス唯恃ム所ハ懇談ニアリ哀願ニアルナリ然ルニ敷地ノ總反別ハ僅カニ三町
餘歩ニ過キスト雖モ其ノ地主ハ百十餘名經過スル所ハ一町四箇村ニ跨ル且ツ廣
ク關係町村ノ同意ヲ得ルノ容易ナラサルハ勿論最小ノ地主一人ノ異議者アルモ
全線路ノ成立セサル虞アリ實ニ此ノ間ニ處スル苦心慘憺ハ殆ント今ヨリ想像ス
ヘカラサルモノアリシカ之レニ對スル社員ノ熱心盡力ハ實ニ非常ナルモノニシ
テ職工人夫ノ末輩ニ至ルマテ狂奔熱中萬一此ノ事ノ成ラサルニ於テハ如何ナル
珍事ヲモ惹起シ兼ネマシキ形勢ヲ示スニ至ル先生深ク其成行ヲ氣遣ハレ親シク
同地ニ臨ミ重立タル人々ト會見シ懇談ヲ竭サル、等一時ハ成否如何カト危フマ
レシ程ナルモ此ノ地一帶先生ノ舊里ニ接シテ其ノ高徳ヲ慕フノ情一層切ナルモ
ノアリ且ツハ吾社多年ノ悲境ニ對シ同情ヲ表スル人モ少カラサリシトニ依リ遂

ニ萬難ヲ排シテ此ノ年七月全ク地所買收ノ目的ヲ達スルヲ得タリ此ノ間地方名
望家ニテ熱心斡旋セラレタル諸氏ノ内大谷藤三郎、金井元治兩氏ノ如キハ數十日
間殆ント家事ヲ擲チテ盡瘁セラレタルハ吾社ノ深ク感謝スル所ナリ借敷地問題
モ首尾能ク落着シタレハ直チニ其筋ニ向フテ布設願書ヲ呈出セシニ此ノ鐵道ハ
一種特別ニシテ所轄縣廳ニ先例ナク爲メニ内務省トノ照會往復ニ意外ノ日子ヲ
費シ漸ク翌二十八年三月布設認可ノ指命アリタリ是ト前後シテ豫テ英國ヘ注文
セルレール亦タ到着セシヲ以テ同年同月工ヲ起シ六月全ク功ヲ竣リヌ其線路ハ
日本鐵道深谷停車場ヨリ北ヘ向ツテ分岐シ同驛ノ東端ニテ中山道ヲ横キリ西島
原ノ郷明戸、上敷免等ノ諸村ヲ經テ工場内小山川沿岸煉瓦置場ニ達スルモノニシ
テ延長貳哩四分ノ三軌隔三呎六吋即チ日本鐵道線ト同一ナリ工事請負ハ國澤能
長氏ノ紹介ニ依リ本間英一郎氏ヘ托セルモ線路踏查工事設計及ヒ監督等ハ總ヘ
テ國澤氏自カラ之ニ當ラレ殊ニ氏カ義俠心ヲ以テ親切ニ簡捷ニ始終一日ノ如ク
盡力セラレタル勞ハ吾社ノ最モ多シトスル所ナリ
吾々カ社業ノ興廢此ノ一舉ニ在リトシテ一同寢食ヲ忘レ全力ヲ傾注シ職工輩ニ

至ルマテ日夜其成行如何ヲ焦慮セシ鐵道布設ノ大問題モ愈々ニ大團圓ヲ告ケ小山河邊煉瓦壘々タル所汽笛遠ク鳴リ列車憂々ノ聲ヲ聞クニ至リテハ喜ヒ極テ泣カントセルモノアリシモ無理ナラスト謂フヘシ皇天亦吾々ノ微衷ヲ憐マレ社運振興ノ天使ハ吾社ノ頭上ニ降臨セラレケン此ノ鐵道ノ成功ト前後シテ日清戰爭將サニ終局ヲ告ケントシ諸般ノ事業漸ク活氣ヲ帶ヒ來リ煉瓦ノ如キモ鐵道ニ工業ニ需用ノ途漸次頻繁ヲ加ヘ三十年ノ上半期ニ入りテハ俄然トシテ春蓄ノ一時ニ發ラクカ如ク未曾有ノ盛況ヲ呈スルニ至レリ吾社ハ此ノ一期ニ於テ實ニ數萬圓ノ收益ヲ得從來ノ損失及ヒ社債若干ヲ償却シ尙ホ年一割ノ配當ヲ爲スヲ得タリ是レ吾社カ創業以來利益配當ヲ行ヒタル嚆矢ナリ

此ノ盛況ニ驅ラレテ事業擴張論ハ却テ株主中ヨリ唱道セラレ立所ニ増資三萬圓ヲ議決シテ從來ノ燒窯三個ノ外更ニ新窯一個ヲ加ヘリ時勢ノ變遷モ亦タ驚ク可キニアラスヤ

爾來期ヲ重ヌルコト四、素ヨリ一浮一沈ハ商業界ノ常ニシテ吾社モ此ノ常數ニハ洩ル、能ハス三十一年下半年ノ如キ未曾有ノ大洪水ヲ被リ燒窯火ヲ止ムルコト數十日ニ及フ等時々ノ不幸ハ免レサリシモ幸ニシテ每期多少ノ配當ヲ爲サ、ルコトナク加之三十二年六月ヲ以テ負債全部ヲ償還シ終リ爰ニ始メテ社業ノ基礎ヲ確立スルニ至レリ

願ミレハ吾社カ最モ悲運ノ際ニ於ケル負債總額ハ無慮拾萬圓ヲ超ヘ約壹萬圓ノ支拂利息ハ資本金貳拾貳萬圓ニ對シ年四五厘ノ利率ニ該當セリ單ニ此ノ一事ヲ以テスルモ吾社ニ取リテハ非常ノ弱點タルヲ免レサリシカ今ヤ青淵先生還曆祝賀ノ盛典ヲ舉行セントスル前一年之ヲ一掃スルコトヲ得タルハ稀有ノ好因縁トシテ吾々ノ殊ニ喜ヒ祝スル所ナリ而シテ尙ホ爰ニ特筆大書スヘキ一事ハ創立以來吾社ノ取締役トシテ益田孝、故藤本文策ノ二氏カ協贊補翼多年一日ノ如ク盡瘁セラレタル偉功ト株主諸氏カ善ク會社重役ヲ信任シ以テ内顧ノ憂ナカラシメ吾重役諸氏ヲシテ専ラ力ヲ社業ノ一途ニ傾注スルヲ得セシメタルコト是ナリ若シ夫レ先生ノ吾々當事者ヲ用ヒラル、ヤ所謂赤心ヲ人ノ腹中ニ置キ善ク信任シ善ク愛撫シ善ク指導シテ以テ各其能ヲ盡シ其所ヲ得セシメ復タ一點ノ遺憾ナカラシム隨テ吾々當事者モ亦タ深く先生ニ心服シ協心戮力會社アルヲ知ツテ一身ア

ルヲ忘レ唯其ノ及ハサルコトヲ恐ル、ノミ然レハ神谷十松、野中眞ノ兩氏ノ如キ創立以來専心社務ニ勵精セルハ勿論職工輩ニ至ルマテ深ク忠愛ノ心ヲ持シ、會社ノ爲メナル語ハ吾社ニ於ケル一警語トナリ如何ニ噪暴ノ輩ト雖モ此ノ語ニ對シテハ口ヲ箝ムニ至ル特ニ吾々ヲ始メ重ナル社員重ナル職工等ハ多ク創業以來苦樂ノ侶ニシテ艱難相倚リ吉凶相拯ヒ其情趣ノ濃ヤカナル和氣霽然トシテ洋々春ノ如キモノアリ之ヲ世上滔々タル會社カ一蹉跌ノ現ル、ヤ忽チ動搖ヲ來タシ相猜疑シ相排擠シ稱シテ改革ト云フモ其實自己ノ野心ヲ充サントスルニ過キス徒ラニ天下識者ノ物笑トナルモノ比々皆然ルト其差果シテ如何ト爲ス吾社微ナリト雖モ此ノ點ハ以テ世ニ誇ルニ足ルヘシト信ス

今ヤ筆ヲ擱カントスルニ臨ミ更ニ一言セン冀クハ青淵先生ノ福壽圓滿ニシテ未來百千年我事業界ノ慈父トシテ益吾々子弟ヲ扶掖教導セラレ以テ我商工業ヲシテ歐米先進國ニモ耻チサル完美ノ域ニ達セシメ給ハランコトヲ是レ吾々ノ千願萬望ノ至リニ堪ヘサル所ナリ明治三十二年上半期株主總會了ルノ後數日諸井恒平謹テ之ヲ記ス

(以上第二節全文ハ諸井恒平氏ノ調査ニヨル)

第四十三章 製糖業

第一節 緒言

青淵先生砂糖ノ輸入年々増加スルニモ拘ハラス糖業ノ我邦ニ盛ナラサルヲ慨スルコト久シ依テ資ヲ投シテ種々ノ方面ヨリ糖業ヲ我邦ニ起スノ得失ヲ攻究シツ、アリ

第二節 八重山糖業會社

八重山糖業株式會社ハ明治二十八年青淵先生及大江卓、梅浦精一等ノ發起ニ係リ其資本金貳拾五萬圓其目的ハ沖繩縣八重山群島ノ石垣島ニ於テ甘蔗ヲ栽培シ砂糖ヲ製セントスルニアリ
同社ハ専ラ専務取締役中川虎之助ノ經理擔當スル所ナルカ成績充分ナラス今其事業ヲ中止セリ

第三節 日本精糖會社

日本精糖株式會社ハ青淵先生及松本重太郎等ノ發企ニ係リ明治二十九年一月ヲ以テ設立シタルモノニシテ其資本金ハ百五十拾萬圓ナリトス
同社設立趣意書ニ曰ク

砂糖ハ人生需要品ノ一大宗ナリ本邦從來砂糖ヲ産スルコト尠ナカラスト雖モ未タ以テ内國ノ需要ニ應スルニ足ラス是ヲ以テ外品ノ輸入スルモノ一年ハ一年ヨリ愈多ク其元價既ニ壹千壹百萬圓ヲ超ユルニ至ル而シテ其荐ニ増加ヲ告クルハ白糖即精製ヲ加ヘタルモノニシテ昨廿六年度ノ輸入價格ヲ以テ之ヲ十年度ニ比スレハ無慮十一倍餘ノ多キニ達シタリ

人文愈開ケ國富益進ムニ從ヒ砂糖ノ需要多キヲ加フルハ古今ノ通觀内外ノ實相ナリ試ニ統計書ヲ按スルニ宇内各國砂糖ノ産額ハ毎年無慮壹百拾億貳千萬封度餘ニシテ一人ニ付平均六封度六分一厘ニ當ル而シテ宇内尙ホ未タ砂糖ノ何物タルヲ知ラサル國民亦蓋尠カラス今姑ク之ヲ措キ唯文明諸國ニ徵スルニ

其千八百九十二年ノ消費高ハ千八百五十年ノモノニ四倍シ英國ハ一人別大凡六拾九封度獨國ハ拾五封度佛國ハ貳拾三封度米國ハ五拾三封度ノ割合ヲナス願テ我國ヲ見ルニ消費高一人別僅ニ六封度壹分五厘ニ過キスシテ文野各國ノ平均額ニタモ及ハス豈ニ此ニシテ止マルノ理アラシヤ是ニ於テ糖業ノ擴張ヲ唱道スル者近來漸ク起リ或ハ栽植ヲ増スヲ以テ最要務トナスカ如シ

然ルニ内國砂糖増殖ノ事タル惟フニ速ニ其目的ヲ達スヘカラス從來甘蔗ニ恬菜ニ若クハ蘆粟ニ之カ振作ヲ試ミタル者尠カラスト雖モ未タ較然タル成功ヲ看ス且今蔗糖ニ就キテ之ヲ稽フルニ鹿兒島縣大島郡ニ於テ黑糖百斤ヲ産スルノ經費ハ四圓七拾錢(或ハ曰ク七)沖繩縣ハ貳圓八拾貳錢(或ハ曰ク四)ナルニ比律賓島ネグロ地方ニ於テハ僅ニ壹圓六拾七錢七厘五毛ニ過キス夫レ大島ト云ヒ沖繩ト云ヒ共ニ本邦内ニ於テ最モ甘蔗ノ栽培ニ適當スルノ地タリ而シテ經費ヲ要スルコト斯ノ如ク太タ多ク更ニ之ニ改良ヲ加フルモ尙ホ熱帶地方ニ及フヘカラサルヤ必セリ况ンヤ其砂糖ノ含有スル結晶分較少クシテ白糖トナスニ適セサルニ於テオヤ今ノ時ニ方リ内國ノ生産ヲ以テ外國ノ輸入ヲ防止センコ

トヲ望ムハ蓋百年河清ヲ待ツニ似タリ
内國ノ糖業ハ急ニ振作ヲ期スヘカラサルコト斯ノ如シ而シテ外國白糖ノ輸入
ハ駭々トシテ増進シ殆ント其底止スル所ヲ知ラス願フニ是レ皆香港ニ於テ精
製輸來スルモノナリ夫レ香港ノ地タル石炭貴クシテ工銀モ亦廉ナラス唯海上
四通ノ要區ニ居リ且原糖ノ産ニ接近シテ運輸ノ利アリト雖モ一旦陸揚ヲナシ
又舶載シテ我國ニ輸致スルノ經費ハ原產地ヨリ直ニ我國ニ運致スルノ廉ナル
ニ如カス且我國白糖ニ對シテハ壹割ノ輸入税アリ畢竟内地ニ於テ精製ヲナス
ニ利アルコト多言ヲ俟タスシテ明ナリ

以上列記スル所ニ據リテ之ヲ觀レハ砂糖精製ノ業ヲ起スハ寔ニ目下ノ急務ニ
シテ且利益アルコト亦疑ヲ容ルヘカラス仍テ茲ニ一株式會社ヲ組織シ次ニ揭
クル目論見要領ニ依リ以テ此ノ業ヲ經營セント欲ス其原料ニ至リテハ姑ク外
國ノ産ヲ取ラサルヘカラスト雖モ本邦南島ノ糖業他日幸ニ發達セハ是レ亦必
ス精製ノ施設ヲ須ツモノナリ故ニ此ノ業ニシテ就テハ管ニ精製加工ノ利益ヲ
回收シ且白糖ノ價值ヲ低廉ニスルノミナラス又内國ノ糖業ヲ誘起スルニ足リ

庶幾クハ以テ國家ノ經濟ニ裨補セン云々ト

夫レ斯ノ如ク同社ハ糖業ヲ營ムノ目的ヲ以テ會社ヲ大阪府東成郡都島村大字善
源寺ニ建設シ設計技師トシテ蘇格蘭グリノック市ノ「ブレイクパークレー」商會ヨ
リロバート、ハウイ、スマアトノ三人ヲ雇聘シ又技師松井元治郎ヲ歐洲ニ派遣シ機
械製作ノ監督及ヒ精糖技術ノ實習ヲナサシメタリ

同社創立ハ明治二十九年ニアリ是ヨリ先キ二十七年ノ春故アリテ東京ノ紳商多
ク大阪ニ集會セリ大阪ノ有志者等此ノ好機會ヲ利シ東京其他ノ紳商ト某所ニ會
シ相議スル所アリ遂ニ精糖事業調查會ナルモノヲ組織シ各自醱金ヲナシ精糖試
驗及海外調査ノ費途ニ宛テ委員十名ヲ撰ヒ技師ノ撰定精糖ノ試験及金錢ノ出納
ヲ委托シタリ爾後着々歩ヲ進メントスルニ際シ恰モ征清ノ役ニ會シ事業ヲ創始
スルノ非ナルヲ察シ陰ニ諸般ノ調査ヲ爲スモ陽ニ同志ヲ募集スルニ躊躇シタリ
然ルニ後チ久シカラスシテ經濟社會モ稍沈靜ニ歸シタルヲ以テ二十八年三月委
員相會シテ株式會社ヲ設立スルニ決シ委員中ヨリ青淵先生、吉川泰次郎、松本重太
郎、阿部彦太郎、野田吉兵衛、佐野常樹、本山彦一、小川銆吉ノ八名ヲ撰ヒテ創立委員ト

ナシ日本精糖株式會社ノ設立ニ着手シ同年十一月十六日其發起認可ヲ得翌二十九年一月十五日設立免許ヲ得タリ
青淵先生ハ現今同社取締役ナリ

第四節 帝國製糖會社

帝國精糖株式會社ハ加東徳三、島海清、左衛門、殿木善兵衛等ノ發起ニ係リ明治二十九年十月十日創業總會ヲ開キ翌三十年二月廿六日ヲ以テ會社設立ノ免許ヲ得テ成立シタルモノナリ同社ノ目的ハ「ジャバマニラ臺灣等ヨリ粗製糖ヲ輸入シ之ヲ器械力ニテ純白糖ニ精製シ販賣スルニ在リ而シテ其資本金ハ五拾萬圓ナリトス」同社ハ最初東京府下南品川元硝子製造所ノ跡ニ設立スルノ豫定ナリシカ工場ノ位置トシテハ横濱ニ設クルノ優レルヲ發見シ後チ横濱市外戸太町戸部ニ於テ凡ソ壹萬坪ノ地所ヲ購入シ之ヲ會社ノ位地ト定メタリ
同社ハ右ノ目的ニテ認可ヲ得役員ノ選舉第一回株金ノ拂込等ヲ結了シタリシカ時恰モ外國糖ノ輸入殊ニ獨逸國ヨリ甘蔗糖等ノ輸入著シク増進シ來リタルヲ以

テ最初目論見ノ當時ト形勢一變シタルカ故ニ到底成算ノ見込ナキト現今經濟界ノ狀況面白カラサルトニヨリ明治三十年十月二十一日總會ヲ開キ解散ニ決セリ
青淵先生ハ同社ノ株主ナリ

第四十四章 人造肥料業

人造肥料ハ我邦今日ノ農家ニ於テ缺クヘカラサル必要品トナレリ然ルニ其初メ此ノ事業ヲ起スニ付テハ種々ノ困難アリ農家モ亦其使用ニ反對セリ其幾多ノ困難ヲモ顧ミスシテ終ニ今日ノ成功ヲ致シタルモノハ實ニ青淵先生ノ力ナリ而シテ其困難ノ甚シキ名狀スヘカラサルモノアリ人造肥料ノ製造ヲ資本家ニ勸メタル技師高峰讓吉ハ中途自身ノ株ヲ先生ニ讓リテ會社ヲ去リ株券ハ大ニ下落シ株主ハ頗ル此ノ業ヲ厭ヒタルニ加ヘテ工場火災ニ罹リタル如キ以テ其一端ヲ知ルヘキナリ蓋シ先生ノ困難ニ處スルヤ事業愈々困難ニシテ精神愈々盛ナリ百方考慮ヲ加ヘ技師以下ノ役員ヲシテ有ン限リノ智識ヲ盡サシメ亦自ラモ工夫ヲ凝シ終ニ困難ニ打勝ツニ至ル是レ先生關係ノ何レノ事業ニ於テモ然ル所ナリ其先生カ技師等ヲ獎勵シ説諭シ種々ノ考按ヲ致サル、ノ狀況ヲ仔細ニ記述セハ實ニ有益ノ立志篇數百冊ヲ得ヘシ惜カナ此レ等ノ材料未タ集マラサルナリ抑モ人造肥料ノ發明ハ最近四五十年來ノ事ニシテ爾來年々盛ンナルニ至レリ就

中過磷酸石灰ノ製造ノ如キハ千八百四十年獨逸ノ碩儒リービヒノ發明ニ係リ其初メハ硫酸ヲ獸骨ニ注加シ溶解性トシテ之ヲ用ヒタリ翌年英國ノ農家フレミングナルモノ又同國產ノ「コブライト」ヲ以テ過磷酸石灰ヲ製シ之ヲ田圃ニ施シテ偉大ノ効ヲ奏セシカハ諸人傳ヘ知リテ續々試製シ遂ニロースト云ヘル者熾ンニ之ヲ製造シ販賣スルニ至レリ爾來年ヲ積テ需要ヲ増シ近年頗ル盛況ヲ見ルト云フ我國ニ於テハ明治二十年青淵先生、蜂須賀茂韶、柏村信、益田孝、澁澤喜作等發起人トナリ資本金貳拾五萬圓ヲ醱集シ人造肥料製造ノ業ヲ創始セリ是レ本邦斯業ノ起源ニシテ實ニ我國過磷酸石灰製造ノ嚆矢ナリトス今同社創立ニ關スル趣意書ヲ見ルニ曰ク

我邦農業ノ改良ヲ要スヘキモノ開墾、牧畜、農具、肥料等枚舉ニ遑アラス中ニ就テ最モ緊要措ク能ハサルモノハ肥料ノ改良是ナリ開墾、牧畜等固ヨリ忽諸ニ附スヘカラスト雖モ我邦自ラ一種ノ慣習遽ニ動スヘカラサルモノアリ且ツ姑ラク之ヲ從來ノ法ニ委スルモ未タ以テ晚トナサス肥料ニ至リテハ然ラス其改良一日進メハ一日ノ益アリ一日怠レハ一日ノ損アリ之ヲ人身ニ譬ヘハ肥料ハ猶ホ

食物ノ如シ家屋衣服ノ粗ナルハ猶ホ忍フヘシト雖モ苟モ食物ニシテ滋養足ラサレハ其生育充分ナル能ハサルヘシ肥料改良ノ急ナル以テ知ルヘシ凡ソ植物體ヲ組織スル所ノ主成分ハ磷酸、窒素及「ボツタース」等ナリ植物生育ノ遲速長短アルハ風雨寒暖ニ依ルコト勿論ナリト雖モ其主成分ヲ得ルノ多少ニ關スルコト亦甚大ナリトス故ニ肥料ハ其主成分ヲ含ムコト最モ多キモノヲ撰フヲ以テ專要トス我邦從前施用ノ肥料即チ人糞、鱈粹、油滓ノ如キ元來磷酸ニ乏シキヲ以テ植物ノ之ヲ獲ル僅少ニ過キス故ニ充分ノ肥料ヲ與フルモ其實効ヲ奏スル七分ニ至ラス是レ余輩カ肥料ノ改良ヲ熱望スル所以ナリ歐米各國ニ於テハ夙ニ此ニ觀ル所アリテ專ラ植物主成分ニ適應スヘキ肥料ヲ製造シ以テ其生育ヲシテ充分ナラシム所謂人造肥料是ナリ

人造肥料ナルモノハ磷酸石灰ヲ粉末ニシテ之ニ硫酸ヲ加ヘ可溶性トナシ更ニ「アンモニア」及「ボツタース」鹽類等ノ物質ヲ和シテ之ヲ製ス故ニ悉ク植物主成分ヲ含有スルヲ以テ凡ソ肥料中此ノ右ニ出ツルモノナキハ論ヲ俟タス

米國南カロライナ州ニハ夥シク磷酸石灰ヲ產出シ肥料製造所凡ソ數十箇所ア

リテ該地ヨリ年々歐洲諸國へ輸送スル磷酸石灰及肥料ノ額極メテ盛大ナリ然ルニ同州ニハ硫酸ノ原質タル硫黄ニ乏シキヲ以テ之ヲ伊太利ニ覓ムト云フ我邦北海道ハ硫黄及アンモニア含有物即チ鍊締粕兩品ニ富ム依テ惟フニ我此ノ兩品ヲ以テ之ヲ南カロライナ州ニ輸送シ而シテ彼ノ特産タル磷酸石灰ヲ積テ歸ラハ彼我共ニ便益ヲ得ルハ勿論殊ニ貿易上一新路ヲ開クモノニシテ蓋シ一舉兩得ノ策ナルヘシ凡ソ肥料改良ノ要點ハ其價格ヲ廉ニシ其結果ヲ同フスルカ若クハ價格同フシテ其結果ノ優レルニ在リ然ルニ若シ前法ニシテ能ク其目的ヲ達シ齎ス所ノ磷酸石灰ヲ以テ好肥料ヲ製造スルニ至ラハ其價格低廉ニシテ且ツ効顯ノ優レルコト鏡ニ照シテ視ル如シ

南カロライナ州ノ磷酸石灰ハ本年農商務省ニ於テ之ヲ肥料ニ製造シ阿波ノ藍作ニ試用セシカ其好結果ヲ報スル續々斷ヘスト云フ是レ其効驗ノ一斑ナリト雖モ由テ以テ他日全豹ヲ觀ルニ至ルヤ期シテ俟ツヘキナリ果シテ然ラハ此ノ肥料タル特リ阿波ノ藍作ニ於テ之ヲ施用スルモ決シテ少額ニアラス况ンヤ全國ノ田畝悉ク之ヲ用キルノ日ニ於テオヤ其需用ノ巨大ナルヘキハ推シテ知ル

ヘシ

是ヲ以テ今一ノ肥料製造會社ヲ創起シ諸君ト俱ニ世ノ鴻益ヲ圖ラントス依テ其會社定款草案及起業營業ニ關スル諸費ト利益ノ割合トヲ左ニ豫算掲起シテ一覽ニ供ス云々

東京人造肥料株式會社ハ明治二十年二月二十八日創業總會ヲ開キ資本金ヲ貳拾五萬圓ト定メ内金拾萬圓ノ拂込ヲ以テ事業ニ着手シ業務擴張ノ日更ニ殘額ヲ募集スルコト、ナシ青淵先生、澁澤喜作、馬越恭平ヲ創業委員ニ撰定シ技術長ハ農商務技師高峰讓吉ニ囑托スルコトニ決セリ

同年三月益田孝及高峯讓吉歐米ニ巡回スルニ當リ肥料製造器械及原料購入ノコトヲ委囑ス四月二十七日同社設立ノ許可アリ五月地ヲ東京府下南葛飾郡大島村ニトシ同年九月ヨリ工場ノ建築ニ着手シ之カ監督ヲ辰野金吾ニ囑托セリ

同年十二月十二日更ニ委員ノ再撰ヲ舉行シ先生澁澤喜作益田孝當撰シ委員ノ互撰ヲ以テ先生ヲ委員長ニ澁澤喜作ヲ検査係ニ任セリ

二十一年二月高峰讓吉ヲ同社技術長ニ雇聘セリ又同月外國ヨリ購入ノ諸器械到

着シ十一月据付工事竣功ヲ告ケ同月二日ヨリ其運轉ヲ始メタリ
同年五月同社開業ノ届出ヲ爲ス七月二十三日株主臨時總會ヲ開キ株金拂込額參
萬七千五百圓ヲ追徴ス

明治二十年ヨリ二十六年ニ至ル同社ノ損益ハ左ノ如シ

明治二十年十二月ヨリ同社ノ損失金四千〇參拾九圓拾壹錢六厘

明治二十二年上半季中損失金參千九百九拾八圓四拾錢壹厘

同 年下半季中損失金七百五拾參圓七拾九錢六厘

明治二十三年上半季中利益金貳千六百參拾四圓六拾參錢四厘

同 年下半季中利益金七百六拾八圓五拾壹錢四厘

明治二十四年上半季中利益金四千貳百參拾參圓九拾九錢壹厘

同 年下半季中利益金千貳百九拾五圓七拾錢壹厘

明治二十五年上半季中利益金六千〇七拾九圓九拾參錢貳厘

同 年下半季中利益金參千九百七拾參圓八拾八錢六厘

同社ハ夫レ斯ノ如ク其營業ノ新奇ニ屬スルヲ以テ其原料採集ノ不便ナルト其製

造品售路ノ梗塞セルニツナカラ至難ナルニ際シ不幸ニモ工場屢災ニ罹リ(明治二十
五年五月三日及同)三資産大半烏有ニ歸シタルヲ以テ一時非常ノ困難ニ沈淪シタリ
明治二十六年七月二十八日株主臨時總會ヲ開キ資本金貳拾五萬圓ヲ減シテ拾貳
萬五千圓トナシ創業以來ノ諸損失消却殘額金四千四百四拾五圓餘及工場燒失損
金等ヲ從來ノ積立金及前半季ノ利益金並現在拂込額拾參萬七千五百圓ノ内資本
減殺金壹萬貳千五百圓ヲ以テ補填スルコトニ決シ商法ノ規定ニ基キ定款改正ノ
コトヲ議定セリ

同年九月二十六日改正定款ノ認可ヲ農商務省へ申請シ十月十二日允准セラレタ
リ

明治二十六年ヨリ同二十八年ニ至ル同社ノ損益左ノ如シ

明治廿六年上半季中利益金五千〇六拾六圓九拾五錢參厘

同 年下半季中損失金八拾六圓四拾九錢八厘

明治廿七年上半季中利益金壹萬千七百七拾壹圓〇七錢八厘

同 年下半季中利益金壹萬千七百六拾壹圓〇五錢參厘

明治廿八年上半季中利益金九千五百拾五圓〇九錢九厘

明治二十六年以降二十八年ニ至ル營業ノ概況ハ前掲ノ如ク頻年盛シニ人造肥料ノ効驗著シク顯ハレ各地ニ於テ大ニ聲價ヲ博セシヲ以テ販路ノ形勢頓ニ一變シ之ヲ二十四五年ノ交ニ比スレハ實ニ數倍ノ増加ヲ見ルニ至リ製造ノ額ハ以テ需要ノ半數ヲ充タスニ過キサリシ當時更ニ十分ノ製造ヲナシ需要ヲ満足セシメント欲スルモ原料ノ一部ナル硫酸供給ノ途梗塞セルヲ以テ策ノ施スヘキナシ是ニ於テ事業ヲ擴張シ硫酸ノ製造ヲ創設スルノ必要ヲ見ルニ至レリ抑モ人造肥料製造ノ業タル泰西諸國ニ在テハ硫酸製造所ニ於テ肥料ヲ製造スルカ若クハ肥料製造所ニ於テ硫酸ヲ製造スルカ硫酸ト肥料トハ相離ル可ラサルモノトセリ是レ他ナシ肥料製造ニ要スル所ノ硫酸ノ量ハ他ノ製造ニ要スルヨリモ多額ヲ要スルニ由レリ同社ニ於テモ當初硫酸ノ製造ヲ兼業セント企圖シタルニ當時王子硫酸製造所ノ製造品價格低廉ニシテ且ツ供給餘リアリシト肥料販路ノ進向十分ナラサリシトニ由リテ其計畫ヲ中止シ專ラ王子硫酸製造所ノ供給ヲ以テ其用ニ充シタリ然レモ其供給ハ素ヨリ定限アリテ其要求ニ從テ之ヲ増加セシ

ムルコト能ハサルノミナラス却テ時々其供給ノ缺乏スルカ如キ動モスレハ同社ノ營業ヲ阻碍ノ虞アルヲ以テ茲ニ當初ノ企圖ニ復シ硫酸ノ製造ヲ開始スルコト、セリ是ヨリシテ營業上ノ便利著シク増進シ爾來逐次事業ノ繁盛ヲ見ルヲ得タリ

明治二十八年十二月増株金第一回拂込金貳萬五千圓ヲ徵收セリ

明治二十九年一月二十日第十五回株主通常總會ヲ開キ二十八年下半季中ノ決算ヲ報告セリ此ノ季間ニ於ケル利益金六千七百四拾八圓參拾七錢參厘ナリ同年三月増株金第二回拂込金貳萬五千圓ヲ徵收セリ

同年同月硫酸製造場建築ノ工事ニ着手シ同年十二月ニ竣功セリ之カ起業ニ屬セシ費用ハ金五萬參千六百五拾貳圓七拾貳錢七厘ナリ

同年七月二十五日第十六回株主通常總會ヲ開キ同年上半季中ノ決算ヲ報告セリ此ノ季間ニ於ケル利益金壹萬五千六百拾四圓〇貳錢壹厘ナリ續テ臨時總會ヲ開キ近來肥料ノ需要長足ノ進歩ヲナシ今後滋増加ノ趨勢アルニ由リ必須ナル器械工場ノ増築ヲナシ若々業務ノ擴張ヲ圖ルノ目的ヲ以テ更ニ資本金貳拾五萬圓ヲ

増加シ五拾萬圓トナシ取締役二名ヲ増員シ専務取締役ヲ置クコトニ決シ取締役ノ改撰ヲ舉行シ先生、益田孝、澁澤喜作、堀江助保、谷敬三當撰シ取締役ノ互選ヲ以テ取締役會長ニ先生専務取締役ニ谷敬三ヲ推選セリ

明治二十九年ヨリ三十一年ニ至ル會社利益左ノ如シ

明治廿九年下半年利益金壹萬九千五百九拾四圓七拾貳錢八厘

同 三十年上半年利益金參萬五千貳百六拾五圓拾四錢八厘

同 年下半年利益金四萬參千五百貳拾四圓五拾四錢

同 三十一年上半年利益金八萬六千四百九拾七圓八拾六錢四厘

同 年下半年利益金七萬〇四百貳拾壹圓拾參錢七厘

同社カ其製品ニ對シ得タル賞牌ハ左ノ如シ

- 一 明治二十三年第三回內國勸業博覽會ニ於テ二等有功賞ヲ受領ス
- 一 明治二十三年時事新報社ニ於テ第三回勸業博覽會列品中優等ノモノヲ公衆ニ求メタル結果同社ノ人造肥料ハ投票多數ヲ以テ金牌ヲ贈ラル
- 一 明治二十八年第四回內國勸業博覽會ニ於テ一等有功賞ヲ受領ス

左ニ掲クルモノハ同社創業以來ノ肥料販賣額ナリ又以テ同社事業進步ノ概況ヲ知リ併セテ我邦農業上改良發達ノ一斑ヲ窺フニ足ランカ

肥料販賣額

年 度	數 量
明治二十一年	四萬八千五百拾貫三百目
同 二十二年	拾貳萬四千三百四拾三貫貳百目
同 二十三年	貳拾五萬七千〇四拾貳貫八百目
同 二十四年	四拾壹萬五千五百四拾八貫八百五拾目
同 二十五年	四拾九萬四千〇五拾壹貫目
同 二十六年	四拾壹萬九千〇六拾三貫五百目
同 二十七年	八拾四萬七千〇三拾四貫五百目
同 二十八年	百〇七萬〇四百八拾六貫目
同 二十九年	百八拾七萬〇貳百八拾七貫目
同 三十年	貳百九拾五萬八千六百〇八貫目

同 三十一年 四百參拾七萬千九百六拾九貫目

明治三十一年一月二十五日同社先生ニ贈ルニ左ノ品及ヒ感謝狀ヲ以テセリ

一金 盃 壹組

但シ料金千圓

感謝狀

明治二十一年本會社創業ノ初メ人造肥料未タ世ニ知ラレス從テ販路ノ進向至難ナリシモ貴下ノ經營其効ヲ奏シ需要漸ク進ミ前途望アルノ運ニ際シ不幸ニシテ祝融ノ災ニ罹リ宿圖亦灰燼ニ歸セントス此ノ時ニ方リ奮フテ工場ヲ再築シ更ニ進テ規模ヲ擴張シ遂ニ本會社今日ノ盛況ヲ見ルニ至リシハ是レ偏ニ貴下カ創立委員長取締役會長ノ重任ヲ荷ヒ百事多難ノ中ニ在リテ規畫宜キヲ得タルニ因レリ其功績ノ著大ナル株主等感佩シテ措クコト能ハス茲ニ謹テ別紙目錄ノ通り贈呈シ聊カ謝意ノ萬一ヲ表ス幸ニ受納アラントヲ乞フ敬具

右ニ對シ先生ハ左ノ答謝狀ヲ送レリ

恭シク感謝狀ヲ領ス諸君ハ本會社カ今日ノ隆運ニ膺ルヲ以テ榮一ノ功績ニ歸

シ別紙目錄ノ臆儀ヲ贈與シテ謝意ヲ表セラル榮一敢テ當ラスト雖モ其事ヲ處理スルニ於テハ毫モ忌憚セス肝膽ヲ披瀝シテ盡シタル所一ニシテ足ラス蓋シ本社ハ我邦ニ於テ未曾有ノ新事業ナルヲ以テ其原料收採ノ不便ナル其製造品售路ノ梗塞セル兩ツナカラ至難ニシテ其未タ目的ヲ達セサルニ際シ不幸ニシテ工場災ニ罹リ資産強半烏有ニ歸セシカ株主諸君カ榮一ヲ信スルノ厚キ銳意屈セス資ヲ増シテ再築シ爾來業務日ニ進ミ以テ今日ノ境遇ニ達スルモノハ實ニ諸君カ能ク榮一ノ計畫ヲ協贊シテ役員諸氏各其任ヲ盡クセシニ由ラスンハアラス是ヲ以テ榮一ハ茲ニ諸君ノ謝意ヲ領スルト俱ニ諸君カ榮一ヲ贊助セラレタルノ功勞ヲ謝セサルヘカラス因テ度テ復辭ヲ陳ヘ敬テ呈ス

東京人造肥料株式會社取締役會長

明治三十一年一月

澁澤榮一

(本章ハ人造肥料株式會社取締役谷敬三氏ノ取調ニヨル)

第四十五章 硝子製造業

第一節 品川硝子會社

品川硝子製造所ハ明治六年三條内府ノ創設ニ成リ其後工部省ニ於テ之ヲ買上ケ數年經營セシモ收支償ハス明治十六年ノ末西村勝三ハ稻葉正邦子ト共ニ政府ノ命ニ應ジテ之ヲ拜借シテ自ラ經營セリ始メ西村ハ此ノ業ノ收支償ヒ難キヲ豫想シテ三萬圓ノ補助ヲ政府ニ請願セシモ終ニ許可ナカリシヲ以テ不得已試ニ其事業ニ從ヒシニ果シテ翌一箇年ニシテ壹萬三千圓餘ノ損失ヲ醸セリ依テ稻葉子ハ拜借ノ免除ヲ乞ヒシカハ西村ハ磯部榮一ト共ニ其代金七萬九千餘圓五箇年据置キ五十五箇年賦ヲ以テ拂下ケタリシカ爾來尙ホ年々損失ヲ免カレサルヲ以テ磯部モ亦十九年拂下人ノ名義ヲ除クニ至レリ然レモ西村ハ之ニ撓マスシテ如何ニ拮据經營スルモ其効表ハレサルヲ以テ海外ニ赴キ實地ニ就テ之カ源因及改良法ヲ探究セント欲シ同年歐洲ニ渡航シ數月ノ間各地ノ硝子工場ヲ巡回シテ事業ノ實況ヲ觀察シ又技術家ニ就テ製造方法ヲ傳習シタリ然ルニ當時歐洲各國ノ硝子

工場ニ於テハ獨逸人ジーマンス發明ノ瓦斯應用新式爐一般ニ採用セラレ斯業ノ上ニ一大進歩アルコトヲ發見シ始メテ豁然醒悟シ我國從來使用ノ舊式裝置ヲ破毀シ此ノ新式ヲ採用スルニ非サレハ到底外國輸入品ト相馳騁スルコト能ハサルヲ看破セリ茲ニ於テ此ノ新式瓦斯窯ヲ採用シ大ニ事業ヲ擴張セント欲シ翌二十年歸朝後工部省ニ乞フテ年賦金利引即納ノ許可ヲ得タリ乃チ青淵先生ヲ始メ益田孝、柏村信等ニ説キテ其贊助ヲ得廿一年六月資本金拾五萬圓ヲ以テ品川硝子會社ヲ設立シ先生ヲ戴イテ相談役トス爾來殆ト舊工場ヲ改築シ構造器械共ニ皆新式ヲ採用シ其他長州小野田ニ分工場設置ノ計ヲナシ共ニ孜々トシテ經營ニ力メタル結果製造ノ改良ハヨク其効ヲ擧ケタリシモ終ニ營利會社トシテ其收支償フニ至ラス不得已廿五年十一月解散ノ不幸ヲ見ルニ至レリ然レモ同會社ハ實ニ本邦硝子製造業ニ對スル開祖ニシテ後年ニ至リ田中工場其他斯業ニ付成功セシモノトシテ其模範ヲ此ノ會社ノ新式裝置ニ取ラサルモノナク終ニ斯業今日ノ盛況ヲ見ルニ至レリ故ニ此ノ會社ノ如キ會社夫レ自身ハ不幸失敗ニ終レリト雖モ我國ニ於ケル硝子業成功ノ基礎根柢ナリシコトハ明白ナル事實ナリトス

第二節 磐城硝子會社

磐城硝子會社ハ磐城國小名濱ニアリ明治二十年九月ノ交青淵先生及益田孝、淺野總一郎等ノ發起ニ係ルモノニシテ其目的ハ專ラ食器壺類等ノ製造販賣ニアリ當時青淵先生ハ中澤岩太ニ命シテ窯ヲ築カシメ海福某ヲ技師トシ大ニ製造ニ力メシモ製品ニ龜列ヲ生シ數回ノ改良ヲ試ムルモ終ニ良好ノ成績ヲ得ルコト能ハス二十三年ニ至リ解散セリ

後田中榮八郎東京本所區ニ一工場ヲ起シ同社養成スル所ノ職工ヲ使用シ終ニ事業ノ成立ヲ見ルニ至リシト云フ

第三節 田中工場

田中工場ハ製瓶事業ヲ營ム工場ニシテ明治二十三年頃ノ創立ニ係リ田中榮八郎ノ所有タリ田中ハ青淵先生前室ノ姉ノ子ニシテ幼ヨリ先生ノ薰陶ヲ受ケタリ今同工場ノ沿革及狀況ニ就キ田中氏ノ語ル所ニヨルニ曰ク

予カ田中工場ヲ創立シ製瓶ノ業ニ着手シタルハ明治二十三年ノ九月ナリ是ヨリ先キ邦人ノ製瓶業ヲ起スモノ枚擧スヘカラス小名濱瓶所品川硝子會社大阪硝子會社ノ如キ皆有力ナル起業家ノ創設ニ係ルモノナリシカモ彼等ハ本邦ノ事情ニ適セル熔爐ノ構造燃料ノ撰擇原料ノ混合法等ヲ解セサリシナリ該業ニ最肝要ナル吹工ノ練熟ナル者ヲ有セサリシナリ其結果彼等ハ遂ニ實用ニ適スルノ製品ヲ出スト能ハス製瓶ノ事業ハ日本人ノ體格ニ適セザル至難ノ業ナリトノ奇異ナル妄想ニ惑フテ半途ニシテ皆屈撓シ了リタルモノニシテ今ニシテ之ヲ顧ルルキハ轉タ痛惜スヘキモノアリ當時予ハ以爲ラク製瓶ノ事業ハ歐米ニテモ機械力ヲ利用スルヲ得ス皆人工ニ依ルカ故ニ工銀貴キ彼國ニ在テハ工銀ハ實ニ製品實價ノ大部ヲ占ムヘク况ンヤ之ヲ本邦ニ輸來スルニハ運搬ノ費用容易ナラスシテ而モ破損用ニ堪エサルモノ比較的ニ多數ヲ生スヘシ然ルニ本邦ハ工賃ノ低廉ナル歐米ノ比ニアラス硅砂等ノ材料皆備レリ獨リ只技術ノ練熟ヲ缺クカ爲メニ目前多大ノ需要ヲ見ツ、瓶類ノ供給ヲ外國ニ仰クコト實ニ遺憾ノ極ナリト是ニ於テ予ハ銳意シテ該業創設ノ調査ニ從事シタル末熔爐ノ

構造ハ前者ノ失敗ニ鑑ミテ其缺點ヲ除キ獨逸最新ノ式ヲ折衷シテ簡易有効ナル新爐ヲ築キ失敗セル各工場ニ從事シ多少ノ經驗アルモノハ悉ク之ヲ招集シテ業ヲ操ラシムル等前者ノ經驗ヲ利用スルノ用意オサシク怠ラス竟ニ二十三年ニ至リ開業ヲナシタリ

予カ新築セル熔爐ハ瓦斯ノ熱力頗ル銳クシテ原料ハ容易ニ熔解シ得タリ予カ招集セル數人ノ職工ハ皆既往ノ經驗ニヨリテ幾何モナクシテ販鬻ノ價値アル瓶ヲ製造スルコトヲ得タリ要スルニ彼等ハ既ニ吹工トシテ用ヲ達スルノ技術ヲ練磨シ得タルモ彼等ノ前傭主ハ彼等ノ技術ヲ養成スルカ爲メニ倒レタルモノナリキ去レハ予カ此ノ業ヲ起スニ及ンテ豫想外ノ好結果ヲ收メタルモノハ豈之ヲ先敗者ノ賜ナリト謂ハサルヲ得ンヤ

予カ當初製造セシハ葡萄酒瓶ナリシ而モ此ノ種ノ瓶ハ需要ノ途廣カラス製瓶事業唯一ノ目的ハ完全ナル麥酒瓶ヲ得ルニアリテ瓶類ノ輸入ヲ防遏シ事業ヲ擴張スルハ實ニ此ノ目的ヲ達スルニ歸ス然ルニ麥酒ハ其腐敗ヲ防クカ爲メ瓶詰ノ後蒸殺法ト稱シ蒸汽ノ勢力ニ觸レシムルノ必要アリ冷冽ナル麥酒ヲ包容

セル硝子壺ニシテ急ニ外部ヨリ蒸汽ノ激熱ヲ受ク製造ノ方法完全ナルモノニ非サルヨリハ此ノ際皆破烈シテ瓶酒併セテ廢滅ニ屬ス醸造家カ瓶ノ撰擇ニ焦心スルハ蓋シ此レカ爲ナリ予ハ今ヤ此ノ困難ニ當リテ麥酒瓶製造ヲ企ルノ勇ナクシテ止マンカ始ヨリ事ヲ起サ、ルノ優レルニ如カス之ニ於テカ百折不撓ノ精神ヲ以テ大成ヲ期シ精ヲ勵マシ資ヲ惜マス經營ノ勞空シカラスシテ遂ニ良好ノ麥酒瓶ヲ製出スルニ至リタルハ二十五年ノ末ナリキ

當時横濱麒麟麥酒製造所ニ於テセシ試驗頗ル良好ナリケレハ同所ニ於テハ直ニ之ヲ採用スルコトヲ約シタリ次テ日本麥酒會社モ亦予カ製品ヲ専用スルコト、ナリテ予カ麥酒瓶製造ノ大目的ハ茲ニ大成セラレタルノ感アリ事業日ニ隆運ニ趣キ熔爐ノ増築ト職工ノ養成ニ醒寤シテ日モ亦足ラサルノ勢トナリヌ予ノ歡喜知ルヘキナリ而モ是只予カ一身ノ上ノミナラス從來價格七錢ナリシ容器ヲハ俄ニ四錢前後ニテ購入シ得ラル、コト、ナリタルヨリ醸造家皆急ニ活氣ヲ鼓シ茲ニ醸造界ニ一大新生面ヲ開キタリト云フモ過大ニアラス斯ル趨勢ナリケレハ予カ麥酒瓶事業ハ長足ノ進歩ヲナシテ廿六年ノ央ニ至テハ一箇

三月二十五萬本ヲ製造スルモ尙供給ノ足ラサルヲ覺ユルノ盛況トナリタリキ予カ製瓶ノ良好ナルコト醸造社會ニ宣傳セラル、ヤ田中工場ハ多々ノ需要者ニ圍繞セラレ其請求ニ苦ムノ有様トナリテ孜孜供給ニ營々スルノ間製造高ハ益々増加スルニ從ヒ製品ノ原價ハ却テ比反例シテ低落スルヲ見タルカ故ニ予ハ更ニ步ヲ進メテ大阪麥酒會社、札幌麥酒會社、神戸子ル商會等多額ノ需要者ト特約ヲ締結シテ販路ヲ擴張スルコトヲ勉メタルノ結果同年ノ末ニ至テハ瓶類ノ輸入全ク杜絶シテ却テ徐々輸出ノ高ヲ増進スルノ勢ト變シタリ

瓶類輸出ノコトハ横濱六番リチャードソン商會ノ手ヲ經テマニラヘ麥酒瓶ヲ輸送セシヨ嘴失トシ印度カルクタ、ケル子ル商會ヨリウイスキー、セリ、瓶輸出注文アリ、横濱ドツドウエル、カイライル商會及ゴルドン商會等ヨリマニラヘ輸出スル麥酒瓶、葡萄酒瓶ノ注文アリ頃日又米國シヤートル市醸造麥芽會社ヨリ瓶類數十萬ノ注文ニ接シ日本郵船會社ハ其輸送ニ就キテ特ニ力ヲ盡サンコトヲ約シタルハ此ノ業或ハ大ニ望ヲ屬スルニ足ラン歟要スルニ瓶類ハ他日本邦有數ノ輸出品トナルヘキコト疑フ可ラサルモノナリ

云々ト又以テ同工場ノ狀況ヲ知ルニ足ルヘキナリ
 田中工場ハ明治廿三年創業ノ當時ニアリテハ一日ノ製造高僅々六七百個ナリシ
 カ今日ニ至リテハ優ニ二萬個以上ヲ製出スルコト、ナリ盛ナリト云フヘキナリ
 然リ而シテ社會ノ開明ハ各種事業ノ發達ヲ助長シ延テ硝子器類ノ需用ヲ増加ナ
 ラシメタルヲ以テ同工場ハ此ノ際大ニ規模ヲ擴張シ管ニ從來ノ壘類ノミニ止マ
 ラス板硝子ヨリ各種ノ玻璃器ニ至ルマテ之ヲ製造セント企圖シタリ然レトモ事
 頗ル大計畫ニ屬スルヲ以テ衆力ヲ糾合スルノ必要ヲ生シ田中工場ノ組織ヲ變更
 シ東洋硝子株式會社ノ創立ヲ見ルニ至レリ

第四節 東洋硝子會社

東洋硝子株式會社ハ田中工場ノ製瓶事業ヲ現在ノ儘全部引受ケ以テ營業ヲ開始
 シタルモノニシテ其資本金額參拾萬圓ナリ同社ハ瓶類ノ製造ヲ以テ其經濟ヲ維
 持シ尙硝子板及各種硝子器ノ製造ヲ營ミ一般需用ニ應スルヲ目的トス青淵先生
 ノ長男篤二ハ株主ノ一人ナリ

第四十六章 熟皮業

第一節 日本熟皮會社

日本熟皮會社ハ明治二十一年西村勝三ノ發起ニ係リ先生及益田孝等ノ贊助ヲ得
 テ資本金拾五萬圓ヲ以テ神戸ニ設立シタルモノナリ此ヨリ先キ西村ハ明治初年
 以來自ラ經營セル櫻組ノ事業トシテ大ニ製革ニ力ヲ盡セシト雖モ其製品ハ我國
 全般ノ需要ヲ充タスニ至ラス爲ニ年々海外ノ輸入ヲ仰クノ不利ナルヲ憂ヒ大ニ
 斯業ヲ擴張センコトヲ期シ水質氣候原料ノ買收運搬ノ便利等諸般ノ點ニ於テ地
 ノ神戸ニ優ル所ナキヲ看即チ業ヲ其地ニ起セリ先生及益田ヲ相談役トシ從來西
 村カ雇聘セル獨逸技師クンベルゲルヲ派遣シ以テ事業ノ進捗ヲ計レリ其製品中
 獨逸式ノ製法ニ依ル底皮ノ如キハ優等ノモノヲ製出セシモ時運未タ至ラス陸軍
 省其他當時ノ需要者ハ舊習ニヨリテ米國式ノ速成品ニ慣レテ容易ク同社ノ製品
 ヲ歡迎スルニ至ラス加之時恰モ一般工業會社ノ厄運ニ遭遇シ不幸ニモ資金ニ不
 足ヲ告ケ經營ヲ全フスルヲ能ハスシテ遂ニ明治廿五年九月解散ノ否運ヲ見ルニ

至リタリ然レモ此ノ會社ノ存立ハ以テ櫻組ト東西相呼應シテ製皮業進歩ノ上ニ資セシ効果蓋シ尠少ナラサルナリ

第二節 熟皮會社

日本熟皮會社ハ解散シタリト雖モ當時伊藤長次郎三宅忠三等株主中ノ有志ハ尙將來ニ望ヲ屬シ四萬五千餘圓ヲ以テ一切ノ財産ヲ引受ケ更ニ熟皮株式會社ノ名ニヨリテ資本金拾萬圓ヲ以テ之カ再興ヲ計リ先生亦株主ニ加入セシカ其製品ハ果シテ時運ノ進歩ト共ニ一般需要家ノ歡迎スル所トナリ漸次隆昌ノ域ニ進ミツ、アリシカ廿七八年戰役ノ際一時需要増加ノ好況ニ乘シ俄然資金ヲ三倍シ事業ノ輕進ヲ計リシヲ以テ忽チニシテ大蹉跌ヲ生シ殆ント回復ノ途ナキニ至リ終ニ三十一年中解散ノ決議ヲナセリ

第三節 櫻組

櫻組ハ西村勝三ノ經營ニ係リ製皮造靴及ヒ革具ノ製造ヲ業トスルモノニシテ素

ト維新以來陸海軍ノ日ニ整備シ靴其他革具ノ需要甚夥多ナルニ拘ハラズ原料、製品共之ヲ擧テ海外ニ仰クノ國家ノ爲メニ不利ナルヲ感シ内地ニ於テ不斷之レカ供給ヲナシ以テ一旦有事ノ日ニ際シ後顧ノ憂ナカラシメンコトヲ期シ明治三年ヲ以テ創立セシモノニシテ實ニ我國ニ於ケル洋式製皮業ノ始祖ナリトス製皮造靴革具共各地ヲトシテ製造場ヲ起シ大ニ其經營ニ力メシニ時運未タ際會セス職工ノ不熱練、原料ノ不足等幾多ノ艱難ニ遭遇シ殆ント倒産セントスルモノ前後幾回ナルヲ知ラス然レモ其間拮据經營一日ノ如ク終ニ創業以來三十年後ノ今日ニ及ヒ初メテ當初ノ目的ヲ達シ鞏固ナル一合資會社(資本金參拾四萬圓)トシテ陸海軍所要ノ靴其他革具ハ殆ント櫻組ノ製品ニヨリテ供給セラル、ノ狀況ニ至レリ

第三回内國勸業博覽會ニ於テ其製品ニ對シ名譽賞金牌ヲ與ヘラレタリ其時ノ褒賞證左ノ如シ

明治三年始メテ造靴ノ業ヲ開キ尋テ製皮ノ工ヲ起ス辛苦法ヲ搜リ拮据勞ヲ執ル能ク陸海二軍ノ具備ヲ補ヒ社會一般ノ需要ヲ給ス船齋ノ途漸ク絶エ輸出ノ

端方ニ發ス功績國內ニ播キ名聞海外ニ及フ其事績ノ偉ナル感賞スヘシ
而シテ嘗テ櫻組ニ從事ノ職工ニシテ今獨立シテ造靴ノ業ヲ自營スルモノ全國ヲ
通シテ千有餘名ニ出ツルト云フ

青淵先生ハ明治ノ初年以來或ハ營繕會議所ニ或ハ瓦斯局ニ西村ト共ニ公務ニ從
事シ相知ルコト深キヲ以テ其間櫻組ノ事業ニ對シ常ニ自ラ信スル所ヲ以テ懇口
ニ幫助扶掖セシモノ實ニ少ナカラス殊ニ明治十二年ノ交漸次事業ノ困難ニ陥リ
負債ハ積ンテ其額巨萬ニ上リ殆ント大蹉跌ヲ生セントセシ際ノ如キ先生ハ友誼
上之ヲ看過スルニ忍ヒストナシ百方其救濟法ヲ講シ遂ニ一夕債主ヲ招集シ諄々
トシテ説クニ負債ノ爲ニ櫻組ヲ倒産セシムルノ國家ノ爲ニ不利ナル所以ヲ以テ
シ債主共同シテ櫻組ノ事業ヲ監督シ年々舉クル所ノ利益ヲ以テ年賦償却ノ途ヲ
立テシムルコトヲ詢リ遂ニ一同ヲシテ先生ノ發案ヲ承諾セシメシカ如キハ實ニ西
村ニ對スル非常ノ盡力ナリキ櫻組ノ今日アルハ一ニ先生ノ賜ナリトハ西村ノ常
ニ人ニ語ル所ナリト云フ亦以テ先生盡瘁ノ如何ニ大ナリシカヲ窺フニ足ル而シ
テ先生ハ現ニ合資會社ノ出資者ノ一人ナリ

明治三十二年十月同組ハ創立三十年祝舉行ノ爲芝紅葉館ニ於テ園遊會ヲ催フシ
内外ノ貴顯紳士ヲ招待セリ當日同組カ來賓ニ配布セル同組沿革ノ談話ハ左ノ如
シ

閣下及諸君、維新ノ當初兵制御新定ノ際我國ニ於テ軍靴ノ製造ヲ爲ス能ハサ
ルヲ不便トシ兵部省ノ御勸誘ヲ被リ西村勝三カ製靴事業ヲ開始シタルハ實ニ
明治三年十月十五日ニシテ本月ハ恰モ其三十週年ノ當月ナルカ故ニ聊祝意ヲ
表スル爲メ粗末ナル園遊會ヲ催シ内外貴顯閣下及紳士諸君ノ貴臨ヲ辱フスル
ヲ得タルハ無上ノ光榮トスル所ナリ

凡ソ如何ナル事業ヲ問ハス時ニ浮沈盛衰アルハ數ノ免レサル所ニシテ櫻組事
業ノ一盛一衰ノ如キハ固ヨリ社會ノ一小些事ニ過キサカ故ニ茲ニ其經歷ヲ
披陳シテ敢テ閣下及諸君ノ清覽ヲ煩ハスハ敬禮ヲ失スルノ嫌ナキニアラスト
雖モ櫻組ノ事業ハ維新以降ノ新工業タル製靴製革業全體ノ發達ニ就テ直接ニ
關聯スル所多キノミナラス三十年前ニ發生シタル櫻ノ萌芽ハ風雨霜雪ノ辛酸
ヲ經テ再ヒ春陽ノ季節ニ會ヒ漸ク將ニ蕾ヲ破ラントスルノ好運ニ向ヘリ是偏

ニ大方恩露ノ徳ニ依ル所ニシテ既往ヲ顧ミテ追懐ノ至ニ堪ヘス聊事歴ノ一斑ヲ拜告シ併セテ感謝ノ意ヲ表スルモ亦必スシモ禮ニ於テ缺クル所ナキヲ信スルナリ

明治ノ初メ百事創始ニ屬シ海外ノ事物ヲ輸入スルニ當リ工商共ニ徒ラニ事ノ新規ナルニ驚クノミニシテ何人モ其事情ヲ審ニセサルノ時ニ際シ殊ニ製靴製革ノ事業ノ如キハ抑モ末ナリトシテ何人モ意ヲ留ムルモノナク明治三年築地入舟町ニ製靴工場ヲ開設シタルノ當時ニ在リテハ原料ノ仕入靴ノ製造販賣ノ方法等計畫ノ順序ヲ立ツルコト最モ困難ニシテ恰モ物ヲ暗中ニ搜索スルカ如ク偶横濱ニ來リタル支那人中曾テ香港ニ於テ製靴ノ職ニ從事シタルモノヲ雇フテ專ラ製作ニ當ラシメ事ノ細大トナク其意見ヲ參考トシテ立案シタルカ如キハ今日ニシテ考レハ殆ント一笑ニ値セスト雖モ亦以テ創業當時ノ情况ヲ知ルコトヲ得ヘシ幸ニシテ瑞西總領事シーベル君大ニ勝三ノ計畫ニ力ヲ添ヘラレ同國人フアーブル、ブランド氏等ニ圖リテ製靴ニ關スル書籍器械其他必要ノ原料ヲ歐洲ヨリ取寄セ茲ニ始メテ事業ノ緒ニ就クコトヲ得タルハ同氏等ニ對

シテ大ニ感謝スヘキ所ナリトス

同年十月築地入船町ニ製革工場ヲ設置シ翌年十一月之ヲ向島ニ移ス今日向島須崎町ニ於ケル製革所ハ即チ其時ニ建築シタルモノニシテ規模構造ノ法ニ副ハサルヘキハ勿論ナリト雖モ當時只一二ノ製革圖書ヲ參考シテ之ニ隨意ノ判斷ヲ加ヘ僅ニ差支ナキ工場ヲ建築スルコトヲ得タルハ誠ニ僥倖ト云ハサルヲ得ス是ヨリ先キ横濱在留ノ獨逸人某我牝牛皮ノ價格低廉ナルヲ以テ之ヲ製革トシテ本國ヘ輸送スル爲メ製造所ヲ本牧村ニ設置ス即チ該工場ノ技手タルボスケニ就テ製革ニ係ル諸般ノ事項ヲ質問シ其養成シタル職工ヲ我工場ニ採用シ亞ヒテ本牧村ノ製造所閉鎖セラル、ニ及ンテボスケヲモ亦我工場ニ雇聘シタリ然レモ當時專ラ軍靴ノ甲革ヲ製造スルニ止マリ需要ノ大部分タル底革、中底革及武具用等各種ノ皮革ハ一切外國ノ輸入ヲ仰キタリ

明治四年和蘭國ヨリ靴工手レマルシャンヲ雇聘シ其事業ヲ傳習セシム當時專ラ士族ノ子弟ヲ募リ又救育所ノ少年五十餘名ヲ引取リテ造靴ノ職ニ就カシメ其後ニ至リ養育院ノ少年モ亦連年之ヲ引取リテ靴工生徒ヲ養成シ聊カ窮民授

産ノ方法ヲ講シタリ工業ノ發達ハ一ニ職工ノ技倆如何ニ依ルハ勝三等ノ深ク信スル所ナルカ故ニ爾來大ニ職工ノ養成ニ勉メ今尙其事ニ銳意セリ
明治五年初メテ洋式革具製造所ヲ設置ス同年勝三ノ弟同姓勝郎ヲ歐米ニ派遣シ製革製靴ニ係ル事業ヲ視察セシメ兼テ必要ナル器械標本類ヲ購求シ大ニ事業改良ノ資ニ供スルコトヲ得タリ

明治十二年製革技手ヲ濠洲シドニ一ニ派遣シ製革ノ事業ヲ調査研究セシム之レ本邦製革業上記憶スヘキ一新紀元ニシテ翌十三年同人カ調査ヲ齎シテ歸朝スルニ及ンテ彼地ニ於ケル製革ノ方式ヲ採用シ新タニ汽機ヲ裝置シ生徒ヲ募集シテ新式ノ製革法ヲ傳習シ漸ク好結果ヲ得タルヲ以テ明治十七年ニ於テハ從來舶來皮革ノミヲ使用セラレタル陸軍砲兵工廠ニ於テ兵器附屬品製造ノ爲メニ我製革ヲ代用セラル、ニ至リ斯業ノ爲メニ聊カ面目ヲ施スコトヲ得タリ然レ靴底革ハ其結果尙不充分ニシテ依然外國品ノ輸入ヲ仰キタリ當時我工場ニ於テ募集シタル生徒ノ數無慮三百餘名而シテ完全ニ其業ヲ卒ヘタルモノ僅ニ三十餘名ニ過キス以テ職工養成ノ困難ニシテ且ツ失費ノ夥多ナルヲ見ルニ

足ルヘシ

明治十九年勝三歐洲諸國ノ工業ヲ視察シ就中獨佛ノ軍靴及武具製造ヲ調査シ諸般ノ器械器具ヲ購求シタリ始メ我工場ニ於テハ獨逸ニ行ハル、製革ノ方式ヲ採用シ亞ヒテ明治十三年以來ハ多ク濠洲ノ方式ニ依リタリト雖モ濠洲或ハ米國ノ如キ原料ノ豐富ナル地ニ於テハ其製造ノ方法粗大ニシテ專ラ機械力ヲ使用シ到底我國ニ應用スルノ不可ナルヲ覺リ本邦牛皮産出ノ狀況工銀ノ比較及内地産藥種ノ性質等ヲ研究シ獨逸式ニ依ルノ必要ヲ認メタルヲ以テ獨逸國ニ於テ技手クンベルグルヲ雇入レ歸朝後更ニ職工生徒ヲ募リ製革ノ方法ヲ全然獨逸式ニ改メタリ是亦製革業上記憶スヘキ事實ナリトス

明治二十年事業取關ノ爲メ西村謙吉ヲ埃獨諸國ニ派遣ス

明治二十一年ヨリ年々牝牛製革ヲ獨逸ニ輸出シ來リタルモ原料騰貴ノ爲メ二十三年ニ至リテ止ム

本邦ノ製革業漸次發達シタルヲ以テ陸軍省ニ於テハ精密嚴格ナル實地檢査ヲ施行セラレ我製革ヲ以テ軍靴底ニ使用スルニ於テ些ノ懸念ナキノ成績ヲ認メ

ラレ明治二十二年以來舶來革ノ使用ヲ廢シテ本邦製革ヲ用イラル亞ヒテ中底革モ亦我國ノ製革ヲ用イラル、ニ至リ軍靴製造ノ材料皮革ハ一切外國ノ供給ヲ受クルノ必要ナキニ至レリ

明治二十三年内國勸業博覽會ニ於テ名譽金牌ヲ賞授セララル

明治二十八年事業擴張ノ爲メ府下北品川ニ製革支工場ヲ設置ス

同年西村謙吉ヲ米墨諸國ニ派遣シ製革原料ニ關スル取調ヲ爲サシム

明治二十九年從來ノ製靴法ヲ改良シ分業製靴法ヲ採用スルカ爲メニ技手ヲ米國ニ派遣シテ調査ヲ爲サシメ翌三十年新ニ工場ヲ府下北品川ニ起シテ仕入靴ヲ製造シ専ラ多數ノ勞働者ニ供給シ兼テ東洋諸國ニ輸出スルノ目的ヲ以テ改良靴ト稱スル分業器械製新靴ヲ發賣シタリ

明治三十一年東洋諸國ノ牛皮產出ニ係ル事項取調ノ爲メ西村謙吉ヲ南清、暹羅、新嘉坡各地ニ派遣シ歸朝後更ニ獨逸索遜製革學校ニ留學セシム同人ハ該地ニ於テ製革職工獨逸人三名ヲ雇ヒ入レ目下同行歸朝ノ途ニ在リ而シテ同人該地滯在中ニ於ケル任務ノ一トシテ専門ノ學者、實業家ニ依頼シテ新設工場ノ設計

書ヲ調製セシメ同人ヲシテ亦自ラ其事ヲ研究セシメタリ

明治三十二年技手大澤亨農商務省實業練習生トシテ製革業研究ノ爲メ獨逸索遜へ留學ス

同年清國湖北總督張之洞氏ノ依頼ニ應シ清國武昌へ製革所新設ノ計畫ヲ爲ス爲メ技手ヲ同地ニ派遣シ今現ニ出張中ナリ且ツ清國ヨリ我國ニ派遣スル留學生十名ノ爲メニ我工場ニ於テ製革業傳習ノコトヲ承諾ス

以上ハ技術作業ニ關スル概要ニシテ製革ノ事業ハ特ニ學理ノ應用ニ關スルモノ多ク技術ノ上ニ於テ一步ヲ進ムル毎ニ研究ノ困難ハ常ニ一層ノ深キヲ加フルカ故ニ其成績ニ於テハ未タ大方ノ賞賛ヲ博スルニ足ラサルヲ慚ツト雖モ幸ニシテ目下ノ必要ニ供給シテ遺憾ナキコトヲ得ルニ至レリ而シテ製靴ノ事業ハ其進歩大ニ著シク今ヤ外國ノ製品ニ對シテ甚シキ遜色ナキノミナラス我靴工ノ團體ハ現ニ米國桑港ニ於テ盛ニ製靴業ニ從事スルカ如キ固ヨリ同業家カ苦心經營ノ勞少ナカラサルニ依ルト雖モ櫻組モ亦幾分ノ光榮ヲ荷フコトヲ得ルハ大ニ欣喜ニ堪ヘサル所ナリ

技術上ニ於ケル研究ノ苦心ハ固ヨリ營業者本然ノ務ニシテ將來ニ於テモ其勞苦ノ益大ナランコトハ豫メ期スル所ナリト雖モ櫻組カ創業以來經過シタル營業上ノ困難ハ作業ニ比シ更ニ一層ノ甚シキモノアリ勝三等不敏ニシテ屢蹉跌失敗ノ逆境ニ陥リ初メ伊勢勝一己ノ營業ヲ移シテ依田西村組ト爲シ更ニ櫻組ノ名稱ニ改メ其間種々ノ困難ニ遭遇シ將サニ倒レントシテ僅ニ一縷ノ命脈ヲ維持シ得タルコト凡ソ幾回ナルヲ知ラス幸ニシテ官民諸公特殊ノ眷顧ト舊佐倉藩主堀田家ノ非常ノ保護トニ依リ能ク三十年ノ長日月ヲ經過シテ遂ニ今日ノ小康ヲ得ルニ至リタルハ其恩惠ノ大ナル勝三等ノ常ニ銘シテ忘レサル所ナリト雖モ特ニ本日ノ祝會ニ際シテ其感更ニ一層ノ深キヲ覺フ云々

第四十七章 汽車製造業

第一節 平岡工場

青淵先生汽車製造業ノ我邦ニ起ラサルヲ慨シ明治二十三年六月二十三日益田孝、平岡照等謀リ小石川陸軍砲兵本廠内工場ノ一部ヲ借用シ此ノ業ヲ創始ス平岡ハ久ク鐵道作業局ニアリ汽車製造ニ熱スルモノナリ又砲兵本廠ノ工場一部ハ當時不用ニ屬スルモ萬一事アルノ日ニ當リ必要アリ職工ヲ離散セシメサルカ爲メ陸軍省ヨリ特約ヲ結ヒテ貸下タルモノナリ此ニ於テ一ノ匿名組合ヲ組織シ平岡工場ノ名ヲ以テ事業ヲ經營セリ先生亦其組合員タリ

平岡工場開業後數多ノ車輛等ヲ製造シタルモ明治二十七年ニ至リ陸軍省ニ於テ工場ノ入用アル等ノ爲メ工場ヲ本所錦糸堀ニ移シ同時ニ組合ヲ解散シ平岡一名ノ所有ニ歸セリ時ニ同年十月三十一日ナリ爾來平岡ハ單獨ニ其營業ヲ繼續シ漸次盛況ニ赴キツ、アリト云フ

第二節 汽車製造會社

明治二十九年九月青淵先生等發起人トナリ汽車製造合資會社ヲ大阪ニ設立ス先
生ハ業務擔當社員ニ推選セラレ熱心社務ニ從事ス明治三十二年七月盛ニ開業式
ヲ舉ケタリ同社ニ關シ中外商業新報ノ記事ニ曰ク

鐵道事業ノ發達ニ伴ヒ機關車貨車鐵路其他鐵道用材ノ需用著ク増加セルニ拘
ラス其材料中僅ニ枕木ヲ除ク外ハ盡ク外國ノ供給ヲ仰キ特ニ機關車ノ如キ材
料ヲ輸入スルモ其製造組立等ニ至リテハ鐵道局附屬工場外二三鐵道會社所屬
工場ヲ除ケハ之ヲ能クスルモノナク加フルニ是等ノ工場ト雖モ辛フシテ其組
立テヲ爲シ得ル位ニシテ各自ノ需用ヲスラ完全ニ充實シ得サル實況ニシテ到
底一般公衆ノ需用ニ應スルノ餘裕ナキヨリ鐵道事業ニハ最モ經驗多キ前ノ鐵
道局長井上勝子ハ本邦鐵道業ノ前途ニ鑒ミ機關車及鐵道用品ヲ製造シテ汎ク
公衆ノ需ニ應シ得ル會社ヲ設立スル考按ヲ起シ其調査ニ着手シタリ是レ實ニ
去ル明治二十六年ノ事ナリトス

爾後氏ハ専心調査ニ從事シ其結果遂ニ成案ヲ見ルニ至リ合名又ハ合資組織タ
ラシメントテ有力者ニ説キ居リシカ偶、征清ノ役起リシ爲ニ遂ニ會社ノ設立ヲ
見ルニ至ラサリシカ越テ二十九年ニ至リ青淵先生岩崎彌之助等ノ諸氏此ノ計
畫ヲ贊成シテ大ニ助力スル所アリ其外毛利前田ノ兩家ヲ始メ京阪實業家中氏
ノ企圖ニ同意スルモノ多ク同年七月同志ノ人々會合シ九月七日ヲ以テ今ノ汽
車製造合資會社ノ創立ヲ見ルニ至レリ

本社及工場ハ共ニ大阪西成郡川北村大字島屋ニ在リ而シテ同社當初ノ資本ハ
六拾四萬圓ニテ其出資者ハ左ノ如シ

黒田長成 前田利嗣 毛利五郎 岩崎久彌 住友吉左衛門(五萬圓宛)

澁澤榮一 今村清之助 廣田理太郎 田中市兵衛 井上 勝 真中忠直

田島信夫(三萬圓宛)

其後森村市左衛門田邊貞吉ノ諸氏新タニ加入シ資本總額七拾三萬圓トナリタ
リ後復拾七萬圓ヲ増資セシヲ以テ現今ノ總資本ハ九拾萬圓(六拾九萬三千五百
圓拂込濟)ナリ同社ノ役員ハ創業ノ當時井上氏專任業務擔當社員トナリ毛利澁

澤眞中、松本四氏ハ業務擔當社員、原田中兩氏監查役タリシカ本年六月會社契約ヲ改正シ重役改選ヲ行ヒ社長井上勝、副社長平岡潤、監查役青淵先生、田邊貞吉ノ諸氏上任シタリ

同社事務所(本社)ハ煉瓦二階建百坪餘ニテ三十年五月起工シ翌三十一年春竣成シ工場ハ全部平屋造鐵屋ニテ木工造車工場等ニ於テ板敷ニ木材ヲ用ヒアル外ハ殆ント木片ヲ見ス構造簡潔ニシテ規矩整然タルハ他ノ工場ニハ稀ニ見ル所ナルヘシ工場ノ建築材料ハ英國グラスゴー、アルロル氏ノ所有工場ノ製造ニ係リ昨年四月組立テニ着手シ年末ニ竣成シタル由ナルカ工場ノ種類坪數ハ左ノ如シ

種類	棟數	建坪
木工及造車	四	六一二・五〇
旋盤及仕上	三	四五〇・〇〇
塗工場	一	一五〇・〇〇
鍛冶及鑄物	二	五〇〇・〇〇

製 罐	計
汽罐車組立	一四
	二、二七九・五〇
	三三〇・〇〇
	二、三七〇・〇〇

各工場共數棟ヲ聯結シテ一工場ヲ形造リ現今ハ二十馬力ノ汽罐二臺備付アリテ各工場ノ動力需用ニ應シ居レリ此ノ外倉庫及木材貯藏所數棟ノ建物アリ孰レモ充分ノ設備ヲ爲セリ

職工及人夫、現在使用シ居ル職工ハ百五十餘名ニテ其賃銀ハ最高日給壹圓拾錢最低三拾錢ニテ平均一人五拾錢前後ニ當ル又昨今使用シ居ル常雇人夫ハ平均一日七拾錢位ノ由ナルカ今後本式ノ工事ニ着手スル時ハ職工人夫共尙ホ増加スル筈ナリ

諸會社ノ製作依頼、同社創立ノ當時ハ事業開始後少クトモ二三年間ハ到底會社ノ經費ヲ補フ程ノ收入ナカルヘシトノ覺悟ナリシニ今春來局部工場ニ於ケル諸般ノ設備成ルニ從ヒ漸次工場必需品其他ノ試驗的製作ヲ開始スルヤ四月頃ヨリ漸次一般ノ注文來リ今日ニテハ既ニ數拾萬圓ノ巨額ニ達シタル由ナル

カ工場ニ依リ未タ機械ノ完備セサル分モアリ旁、創業ノ際ナレハ諸事可成控ヘ目ニナシ期限ノ短キ注文ハ謝絶シ居ルト云フ亦以テ同社事業ノ有望ナルヲ推知スヘシ

現今ノ製作品、汽罐車ノ製造ニ着手スルハ數箇月ノ後ナルヘシトノコトナルカ現今製造シ居レル客車、貨車、土運車其他ノ鐵道材料、汽罐、諸機械、建築材料等ニシテ昨今ハ貨車百輛、神戸棧橋會社ノ吹拔倉庫建築材料及九州鐵道會社ノポイント、クロッシンダ數十組ノ製造中ニテ先頃ハ某所ノ土運車二十輛ヲ十日間ニ製造シ了リタル由ナリ

第四十八章 ホテル業

第一節 帝國ホテル

近年歐米各國人ノ本邦ニ來遊スルモノ年々多キヲ加フルニ拘ハラズ東京市中適當ノ宿泊所ナク或ハ鹿鳴館ニ或ハ離宮ニ宿泊セシムルコトアルモ之ハ身分アリ資格アル人ノ場合ニ適スルノミニシテ一般ノ旅行者ニハ西洋軒、東京ホテル、築地ノメトロポリタンホテルノ外ニ適當ノ場所ナク之レ等モ到底多數ノ旅客ヲ容ル、ニハ足ラス明治二十年時ノ外務大臣井上馨ノ勸誘ニヨリ青淵先生大倉喜八郎、益田孝、横山孫一郎等發起人トナリ一大完全ナル「ホテル」建設ノ議ヲ決シ政府及宮内省ノ贊助ヲ得地ヲ麹町區内山下町ニトシ資本貳拾六萬五千圓ヲ以テ建築ニ着手シ建築請負ヲ土木會社ニ托シ明治二十三年十一月落成シ開業セリ其建築三層六百坪ニシテ其室内裝飾其他一般ノ設備東洋ノ一大「ホテル」タルニ耻サルナリ爾來有名ノ旅客ハ數多宿泊シ天長節其他大宴會ハ數此ノ場所ニ於テ催サル、ニ至レリ併シ乍ラ「ホテル」業ハ客扱其他經濟ノ整理ニ非常ノ技術ヲ要シ未タ適當ノ擔

任者ヲ養成スルニ至ラス或ハ外國人ヲ雇入使用ヲ試ムルモ未タ満足ヲ得ス青淵先生ハ理事長(後取締役會長)トシテ就任シ百方經營ニ苦慮スル所アリ

第二節 京都ホテル及日光ホテル

京都ニ京都ホテルアリ明治二十二年ノ交前田伊八等ノ開設スル所日光ニ日光ホテルアリ明治二十三年安生順四郎加藤昇一郎等地方人士ノ開設スル所ナリ兩所共ニ我邦名勝ノ地相當ノ旅館ヲ設クルハ國家ノ經濟ヨリ見ルモ必要トスル所ナリ其創立ニ當リ青淵先生資ヲ扶助セリ

第四十九章 直輸出入業

青淵先生常ニ我邦人ノ外國出商賣ノ氣力ニ乏シキヲ慨シ堀越善重郎其人ノ如キハ蓋シ先生ノ深ク望ヲ後來ニ屬スル所ニシテ堀越商會ノ起立シタル所以ナリ抑モ堀越商會ハ明治二十七年二月一日堀越善重郎外數名ノ創立ニ係リ専ラ絹織物段通花莖等ヲ海外ニ直輸シ又之カ委托販賣ヲ引受クルヲ業トス堀越ハ商業學校出身ニシテ夙ニ米人メーソンノ商館ニ入り絹織物段通及ヒ花莖直輸出入業ニ從事セルコト玆ニ年アリ偶明治二十六年矢野二郎ノ高等商業學校長ヲ罷ムルヤ矢野ノ親友益田孝堀越ヲ助ケテ獨立セシメ矢野ト共ニ同業ヲ經營セシメンコトヲ企テ之レヲ青淵先生ニ諮ル先生曰ク海外直輸出入業ハ余カ多年ノ宿望ナリシモ未タ其實行ヲ試ミシコトナキノミナラス邦人ノ此ノ業ニ從事セルモノ多ク蹉跌ヲ免レスシテ失敗ニ終ルヲ見ル聞クカ如クンハ其能ク功ヲ奏シ産ヲ殖セル者獨リ森村市左衛門氏アリ希クハ斯業ノ計畫ニ先タチ氏ニ會見ヲ請フテ親シク其所說ヲ聽クコトヲ得ント同年七月二十六日先生森村ト帝國ホテルニ會見ス先生ノ所

信愈固ク乃チ請フテ森村外數名ノ贊同ヲ求メ匿名組合ヲ組織シテ同商會ノ創立ヲ視ルニ至レリ其趣旨トスル所ハ專ラ邦人ヲ以テ斯業ヲ經營シ以テ我邦ノ商權擴張ニ資セントスルニ外ナラス

同商會ハ先ツ其商品ノ販路ヲ專ラ米國ニ求メンコトヲ欲シ二十七年二月十一日堀越自ラ渡米シテ其支店ヲ紐育府ゲリーオン街ニ設置セリ堀越ノ發スルニ先タチ先生之ヲ誠メテ曰ク跣歩ヲ積マサレハ以テ千里ヲ致ス無シ百里ノ行程ハ一日ニ馳セ難シ今夫レ海外貿易ハ重大ノ業ニシテ此ノ盛衰ハ以テ國家ノ消長ニ關シ其興廢ハ以テ一國商權ノ縮暢ニ及ホス足下ノ任重ク途遠シ決シテ功ヲ急ク可ラスト同年三月十九日其支店ヲ紐育ニ開設ス

是ヨリ先キ米國ハ彼ノ「ジャーマン」購銀條例實施ノ結果トシテ金貨海外ニ流出シ財政紊亂シテ商況沈滞千八百九十三年即チ我カ明治二十六年ニ至リテ其茶毒漸ク甚シキヲ加ヘ爲メニ米國內地ノ工業ハ其產ヲ減シ輸入亦從ツテ少キヲ加フルニ至レリ同商會カ紐育ニ支店ヲ開設セシハ實ニ其翌年ニシテ米國ノ財政ノ病根未ダ癒エス民皆其餘弊ニ窮セルノ際ナリシヲ以テ人多ク其營業ノ結果如何ニ就

テ憂慮スル所アリシモ前年來ノ不景氣ハ偶以テ物品ノ缺乏ヲ來タシ需用増加シテ供給足ラサルノ狀況ヲ呈スルニ至リシカハ同商會開店ノ當日ヨリ顧客踵ヲ接シテ至リ初ノ杞憂ニ比スレハ聊カ好果ヲ收ムルヲ得タリ依テ創業年度ハ其營業ノ時日僅ニ九箇月ナリシモ茲ニ一割五分ノ配當ヲナシ尙ホ且ツ規定ノ積立ヲ了セリ

前年ノ結果其功ヲ奏セシコト此ノ如クナリシト米國ノ財政整理モ稍其緒ニ就キ將來ノ望亦タ空シカラサルヘキヲ豫想スルヤ廿八年三月資本ヲ倍加シ漸ク其擴張ヲ圖レリ而シテ同年亦タ應分ノ利アリシト雖モ市場ノ浮沈需用供給ノ其權衡ヲ逸シテ上下スル猶波濤ノ高低アルカ如ク前廿七年度ニ於テ日本絹布ノ需用増加セルト其利ノ多カリシハ會以テ本邦在留外人ノ競賣トナリ爲メニ市價ノ騰貴ヲ促カシ機業家ノ其利ニ浴セシモノ多カリシカハ産額頓ニ増加シ商品市場ニ溢レ漸ク再ヒ其價ヲ減シ將來ノ損失豫メ期スヘキモノアルヲ認ムルニ至レリ故ヲ以テ同年度ハ利益ノ配當ヲ廢シテ在品ノ價ヲ削減シ以テ將ニ來ラントスルノ恐慌ニ備ヘタリ

果セル哉廿九年度ニ至リテハ本邦ト米國ノ兩市場ニ日本絹布ノ堆積スルアルヲ見ルニ至レリ而シテ甲斐絹ニ於テ最モ多カリキ爲メニ其市價暴落殆ント購入原價ノ半タニ及ハサルノ慘境ニ沈淪シ加フルニ米國ノ財政ハ依然混亂未タ整理ヲ視ルニ至ラス而モ此ノ年大統領ノ改選アリ國民皆政事ニ狂奔シテ商工ノ業ハ殆ント遺レテ顧ミサルモノ、如ク爲メニ同商會ノ營業日々ニ非ニシテ損失ノ重ムル愈、多ク非常ノ困難ヲ見ルニ至レリ青淵先生森村ト共ニ同商會ニ監査タリ此ノ狀ヲ視ルヤ事大小トナク細大漏サス之ヲ聽キ策ヲ社員ニ授ケテ前後ヲ講シ勉メテ社員ヲ獎勵シテ其心ヲ沮喪セサラシメ且ツ屢書ヲ在米ノ堀越ニ送り將來ヲ誠メ一ニハ事業當初ノ經營急進ニ失セシヲ責メ具サニ其弊ヲ叙シ極メテ經費ヲ節シ其缺損セル資本ヲ以テ之カ維持ヲ講スヘキ旨ヲ諭サル今其數回ノ書信中其一ヲ左ニ掲載ス

爾來御清適遙賀之至に候借貴商會營業困難之實況は先般來尊書御申越も有之又御本店への來狀も矢野氏若くは井上杯より其時々被申越殊に此の程森村翁への尊書も被相廻一覽仕候就而先日も矢野井上二氏に森村氏と共に一日相會

し種々相談を盡し候得共先般正金銀行に對する金融の餘裕を計るの一案も到底當方にては工夫も相立かね候間此の儘營業維持被成候御都合なれば詰り今日現存の資本額に信用貸依頼有之候ものを以て運轉の外無之と御覺悟被成右にて何様にも繰廻はし細々にも業務を繼續し景氣挽回の場合に幾分の利益を得以て是迄の損耗を償却致候御見込相立候はゞ之を目途に御辛抱被成候外無之と存候右様申上候も小生等は凡て貴臺に對する嚮望を抛棄し只其成行に委すると云ふか如き念慮には無之候得とも如何にせん今日の儘にて資本に餘地を生し候工夫は別段方法無之と申す事に候

元來貴商會の營業は今日より回想すれば聊か急進の嫌有之其功を急ぎしより全體の資力に超過せる經營に相成候様被存候間小生は是非此の際一段落を付けされは其改正も如何と懸念仕候乍去貴臺徒手にて御歸國被成候とて前陳の改正案とて容易に成立候とも難申に付寧ろ幾分の命脈候様なれば或は此の儘に魯戈虞淵の日を回すの御決意も不得已場合とも相考申候

自然右様の御決意相成候上は第一に貴店の經費節減を御勉被成候外無之候而

して營業に就ても此の上正金銀行より取引上種々の小言不相生様精々信用の程度を守り候御工夫專一に御座候又此の程も井上より貴方の將來營業に屬する豫算承合候處利益の豫想は……にて費用は……の由但別に特別の利益も可相生御豫想なれとも是は確と申答は難致との由に候然る時は目前其豫算上既に不足相現はれ候姿にて決して確定の見込と申兼候間此の上今一段の省費御心配被成候外無之と矢野井上へも申述候儀に候實に今日資本減殺の上營業困難の日に於て其融通の途を講ずる事もせずして只經費節減のみ相論し候は難きを賣るの憾有之候へとも維持を勉ると申上には是非右等の見込無之ては單に萬一に僥倖と申姿に相成候間終に右様申上候儀に御座候小生は貴臺及原田氏迄是迄の御勉勵の御精神は充分想得申候又矢野も井上も頗精勵の様子にて是又満足仕候不幸にして當初の處置聊急進に過候と第二には米國の不景氣より今日に相成候は眞に残念の次第に候併海外輸出業の今日に必要なを思へば貴商會の爲小生等の資本幾分減少候杯は毫も遺憾には無之偏に此の損耗と困難とをして相當の經驗とし得る丈けの價值を生せしめ申度と存候

而して其點に就ては殊に貴臺の將來の御丹精に依り可申と存候御自重被下候
右取込中一書申上候勿々不一

二十九年十二月廿二日

澁澤榮一

堀越善重郎殿

而して資金ノ缺乏ハ到底營業ノ圓滑ヲ缺ク而已ナラス空シク時機ヲ失スルノ虞アルヲ認メラル、ヤ先生森村ト共ニ其私財ヲ投シテ一時之レカ救濟ノ道ヲ講セリ偶米國ハ大統領ノ改選ヲ終ヘ金貨黨ノ首領マッキンレー當選セルヲ以テ信用頓ニ恢復シ商工ノ業亦タ勃興シテ人心大ニ安ヲ加ヘタルヲ以テ同商會ノ如キ曩日失ヒタル幾分ノ資本ヲ填充シテ漸ク其缺損ヲ小ナラシメタリ
越ヘテ三十年大統領マッキンレー就職海關稅則ノ改正アリ同商會ノ商品タル絹布段通花莖ノ三種ハ悉ク皆前代未聞ノ苛稅ヲ課セラル、ノ不幸アリシヲ以テ營業ノ結果亦タ前途杞憂ニ堪ヘサルモノアリシモ一ハ米國財政ノ基礎確立シ天産ノ收獲豐富ニシテ農民ノ囊裡頓ニ温キヲ加ヘ多年萎靡沈滯ノ商况再ヒ英氣ヲ呈スルニ至リシト又一ニハ先生並ニ森村ノ保護ヲ得テ重稅實施ニ先タチ多額ノ物品

ヲ購入シテ之ヲ米國ニ輸出セシ結果トシテ同年度ノ利益望外ノ多キヲ加ヘタリシヲ以テ茲ニ全ク前年度ノ損失ヲ填充シ尙ホ且ツ六朱ノ配當ヲ爲スニ至レリ之レニハ社員ノ鞠躬盡力能ク其機ヲ誤ラサリシニ歸スヘシト雖モ抑モ亦先生ノ保護アルニアラスンハ馮ンソ能ク今日アルヲ得ンヤ

同商會又廣ク歐洲ニ販路ヲ有シ其取引年々増加シテ其利益亦歲々多キヲ加フルモノアリ前途頗ル多望ナリト云フ

(本章ハ堀越商會役員井上金治郎氏ノ取調ニ據ル)

第五十章 倉庫業

第一節 澁澤倉庫部

倉庫業ハ銀行業保險業運送業ト相待テ商業上缺クヘカラサル必要機關ナリ故ニ倉庫ノ設備充分ナルト否ト其保管習慣ノ善良ナルト否トハ大ニ商業ノ盛衰ニ關スルモノアリ

我邦舊來ノ倉庫業者ハ其規模甚々小ナリシカ東京ニ於テハ三井三菱ノ倉庫業興リ各地ニ於テハ株式組織ノ倉庫業起リ近年大ニ改良發達ニ向ヘリ

青淵先生ハ倉庫業ニ付テハ大ナル關係ナシ尤モ澁澤倉庫部ト稱スルモノアリ東京深川ニ於テ最モ紀律正シク此ノ業務ヲ營メリ

今澁澤倉庫部ノ起源ヲ按スルニ深川福住町澁澤邸内ニハ巨多ノ倉庫アリ先生之ヲ他ニ貸付セリ先生一夕子弟ヲ集メ人間處世ノ心得方并經濟運用ノ途ニ付テ語ル談偶倉庫ノ事ニ及フ先生坐中ヲ顧ミテ曰ク此ノ倉庫ヲ以テ倉庫業ヲ營ムモ以テ役員勞働者數十人ノ口ヲ糊シ尙ホ相當ノ利益ヲ擧クルニ足ルヘシト依テ又長

男篤二ヲ願ミテ曰ク汝尙幼ナリト雖モ乃父ノ志ヲ繼クノ考アラハ試ミニ坐中ノ子弟ト共ニ其經營ノ方案ヲ立テ來レ予レ汝ニ資ヲ給シ其業務ニ從事セシムヘシト是レ澁澤倉庫部ノ初ナリ

澁澤倉庫部ノ開業ハ明治三十年三月三十日ニアリ同倉庫ノ容積ハ福住町ノ分(六十九棟六十一)七百七十八坪五合萬年町ノ分(十一棟五十九坪前)五百七十二坪五合及ヒ永代町ノ分(四棟三十九坪前)百八十三坪ニシテ一箇年ノ物品出入高ハ明治三十年三月三十日ヨリ同三十二年三月二十九日間ニ入庫高七拾九萬三千六百九拾九個出庫高七拾貳萬貳百七拾六個ナリト云フ

第二節 倉庫會社

倉庫會社ハ明治十五年十一月梅浦精一朝吹英二原善三郎等ノ創立ニ係ル其資本金六萬五千圓其目的ハ東京及橫濱ニ倉庫ヲ建テ一般商品ノ保管預リヲナスニアリ青淵先生ハ同社ノ株主ナリ然ルニ經營意ノ如クナラス意外ノ損失ヲ生シ明治十八年解散セリ

第五十一章 取引所

第一節 株式取引所

株式取引所ハ明治七年第七號布告株式取引所條例ヲ以テ制定セラレ明治十一年布告第八號ニヨリ之ヲ廢止變更シ後チ又數度條例ノ改正ニ逢ヒ以テ今日ニ至レルモノナリ

是レヨリ先キ明治四五年ノ取引所公許ノ問題起ルヤ青淵先生大藏省ニ在リ之カ利害得失ニ付キ頻リニ討議研究スル所アリ當時議論ニ派ニ分レ一ハ之ヲ以テ有害ナリト認定シ斯カル投機ノ業ヲ公許スルニ於テハ將來國家ニ茶毒ヲ流ス蓋シ尠ナカラサルヘシ宜シク嚴禁シテ以テ惡弊ヲ未發ニ塞クヘシト他ハ曰ク凡ソ先物約定相場會所ノ事タル之ヲ海外諸國ノ實例ニ照スモ經濟社會必要ノ一機關ニシテ到底之ヲ缺クヘカラストニ說容易ニ決セサリキ先生ハ井上大藏大輔等ト共ニ第二說ヲ主張シ大藏少輔玉乃世履等ハ第一說ヲ固守シタリ後チ大藏卿大隈重信ハ之ヲ政府ノ雇法律顧問佛國人某ニ質シ其所說ヲ參酌シ遂ニ第二說ヲ採用

シテ取引所公許ノ議ヲ採用セリ

明治七年同條例ノ公布アルヤ先生既ニ官ヲ辭シ民間ニアリ有志ト共ニ主唱者トナリテ東京株式取引所ヲ創立セリ是レ本邦株式取引所ノ起原ナリトス而シテ其成立ヲ見ルヤ先生ハ株主ヲ止メタリ蓋シ先生ハ其制度ノ必要ヲ主張スルモ其業務ヲ好マサルナリ

同條例頒布後株式取引所ハ大阪及横濱等ノ各地ニ起リ米商會所モ亦設置セラレ、ニ至リキ青淵先生ハ同條例制定ノコトニ關シ盡力セルノ緣故ニヨリ東京兜町米商會所及大阪株式取引所ノ株主タリ後チ皆之ヲ止メタリ

株式取引所ノ盛大ニ赴クヤ又隨テ弊害ナキニアラス政府モ爲メニ數條條例ニ改正ヲ加ヘタリ先生亦同志ト改良ノ策ヲ講センカ爲メ明治二十一年人ヲ海外ニ派シテ「ブルス」ノ取調ヲ爲サシメタリ蓋シ我邦取引所ハ株式組織ニシテ仲買ナル中間ノ一階級アリテ二重ノ手數ト冗費トヲ免レサルノ不利益アルヲ感シタルニヨリ外國ニ行ハル、會員組織ニ改メントノ考ヲ起シタルナリ之レカ爲メ一時「ブルス」論大ニ世上ニ囂々タリキ然ルニ該取調ノ結果ハ遂ニ其効ヲ奏セスシテ止ム

ニ至レリ

最初取引所公許ノコトニ關シ先生ト玉乃世履トノ間ニ一佳話アリ先生ト玉乃トハ莫逆ノ親友ニシテ同シク官ニアリ常ニ何事ニ拘ハラス其所見所說ヲ一ニシ以テ事ニ當レリ然ルニ取引所公許可否ノ問題ニ就テハ全ク所見ヲ異ニシ各自說ヲ固執シテ互ニ讓ラス後チ先生ハ大藏省ヲ去リテ民間ニ下リ玉乃ハ依然官ニ止マリシカ頃シモ政府ニ於テハ前說ノ如ク取引所問題ニ付キ法律顧問ノ所見ニ徵シ敢テ法理上禁スヘキ性質ノモノニアラサルヲ確メタルヲ以テ遂ニ之カ條例ノ制定ヲ爲スニ至リシカハ玉乃モ玆ニ始メテ豁然大悟スル所アリ一日態先生ヲ其邸ニ訪ヒ前日所說ノ非ナルヲ悟リシ旨ヲ述ヘ大ニ先生ノ卓見明識ニ服シ陳謝スル所アリシト云フ

第二節 商品取引所

明治二十七年奥三郎兵衛濱口吉右衛門、柿沼谷藏等東京商品取引所ヲ創立ス青淵先生友人ノ依頼ニヨリ其株主タリ後チ之ヲ止ム同取引所ハ鹽、雜穀、砂糖、油、肥料、綿

糸、棉花、木綿、金屬、蠶糸等ノ取引ヲナスモノナリ

第五十二章 各種商工業

第一節 日本土木會社

日本土木會社ハ明治二十年三月青淵先生、大倉喜八郎、藤田傳三郎等ノ創立スル所ニシテ其資本金貳百萬圓ナリ
初メ大倉組ハ東京ニ在リ、藤田組ハ大阪ニ在リ、共ニ政府ノ御用ヲ請負最モ盛ンニ土木ノ業ヲ營メリ而シテ兩者互ニ競争ノ弊害ニ陷リ我邦土木事業ノ發達ニ不利少ナカラサルヲ以テ先生等雙方ノ間ニ盡力協定シテ相合併シ一ノ土木會社ヲ組織シ内外ノ技師ヲ雇入レ我邦土木ノ業務ヲ完全ナラシメ從前請負業者ノ弊習ヲ一洗センコトヲ期セリ

土木會社ハ帝國ホテル、華族女學校、東京郵便電信局、農商務省、赤十字社病院、陸軍省各兵營、陸軍大學校、東京灣浚渫埋立、利根運河、琵琶湖疏水、碓氷鐵道等數多ノ建築及土木工事ヲ請負ヒテ之ヲ落成セリ然ルニ後二十二年ニ至リ藤田ノ一派ハ故アリテ土木會社ヲ脱センヲ以テ明治二十六年十一月之ヲ解散シ其業ハ大倉土木組ニ

引繼キタリ

青淵先生ハ同社ノ創立委員長ニシテ後チ相談役タリ

第二節 日本輸出米商社

日本輸出米商社ハ明治二十年青淵先生及大倉喜八郎安田善次郎淺野總一郎等ノ發起ニ係ル其資本金貳拾萬圓ニシテ其目的ハ九州米ヲ精ラケ之ヲ外國ニ輸出セントスルニアリ是ヨリ先キ政府ニ於テ紙幣消却ノ爲メ正貨吸收ノ必要アリ準備金ヲ運用シテ米穀ノ輸出ヲ企テ大ニ販路ヲ開キタルヨリ神戸岡山四日市等各地ニ精米所ノ創立ヲ見ルニ至レリ
同社ハ事業經營頗ル其宜シキヲ得ス明治二十二年解散セリ

第三節 日本鉛管製造會社

日本鉛管製造株式會社ハ明治三十二年一月ノ交若山鉉吉佐々田懋郷誠之助益田孝等發起トナリ資本金拾萬圓ヲ以テ創立シタルモノナリ而シテ其目的ハ若山鉛

管製造所ノ事業ヲ引繼キ水道用其他諸種ノ鉛管ヲ製造スルニアリ青淵先生ハ友人ノ依頼ニヨリ同社株主ノ一人ナリ

第四節 東洋浚渫會社

東洋浚渫株式會社ハ明治二十九年十月ノ交長崎市松田源五郎等ノ創立スル所ニシテ其資本金ハ貳拾五萬圓ナリ同社ノ營業目的ハ浚渫器械船ヲ備ヘ河川港灣ノ浚渫ト土地埋築ノ請負ヲ爲スニアリ明治三十一年初メニ到リ開業シ長崎港灣ノ浚渫其他ニ於テ其事業徐々進歩シツ、アリ青淵先生ハ同社株主ノ一人ナリ

第五節 東京藥品會社

東京藥品會社ハ明治二十年九月東京藥種商ノ創立スル所ナリ資本ハ拾萬圓ニシテ株式組織ナリ其ノ目的ハ精良ノ藥品ヲ製造シ及ヒ販賣スルニアリ青淵先生ハ依頼ニヨリ同會社ノ顧問タリ後チ之ヲ止ム而シテ會社モ亦事業振ハスシテ解散ス

第六節 東京賣炭組合

東京賣炭組合ハ明治二十年四月淺野總一郎、田中平八、田中菊次郎、北村英一郎等ノ創立ニ係ル其資本八萬圓其目的ハ北海道幌內產ノ石炭ヲ販賣スルニアリ青淵先生ハ其組合員ノ一人ナリ明治二十三年北海道炭礦鐵道會社ノ組織成ルニ及テ解散ス

第七節 青山製氷會社

明治二十三年三月ノ交青淵先生及大倉喜八郎、淺野總一郎等相謀リ青山製氷會社ヲ起ス地ヲ東京青山ニトシ器械ヲ裝置シ技師西川虎之助ヲシテ之ニ從事セシム其目的ハ東京ニ人造氷ノ供給ヲ豐カナラシメントスルニアリ然ルニ計畫充分ナラス二十五年ニ至リ終ニ廢止セリ

第八節 東京馬車鐵道會社

東京馬車鐵道會社ハ明治十三年谷元道之種田誠一等ノ創立ニ係ル青淵先生ハ二人ト懇意ノ間柄ニシテ其勸メニ應シ株主ニ加入シ常ニ二人ノ依頼ニヨリテ會社要務ノ協議ニ與カル後チ數年事業盛大ヲ致スニ至リ之ヲ止ム

第九節 函館馬車鐵道會社

函館馬車鐵道株式會社ハ明治三十年一月函館地方有志者ノ創立ニ係ル資本金拾五萬圓其目的ハ函館區内ニ馬車鐵道ヲ布設シ以テ運輸ノ業ヲ營ムニアリ同社ハ後チ函館鐵道株式會社ノ所有ニ係ル函館湯ノ川間ノ鐵道布設權ヲ讓受ケ事業ヲ擴張シタリ青淵先生ハ地方人士ノ依頼ニヨリ同社株主ノ一人ナリ

第十節 函館地所會社

函館地所合資會社ハ明治三十一年末ノ交舊函館鐵道會社株主等ノ創立スル所ニシテ其資本金ハ拾三萬五千圓ナリ同社ノ目的ハ其所有ニ係ル地所數萬坪ヲ賣却及賃貸スルニアリ青淵先生ハ友人ノ勸ニヨリ同社株主ノ一人ナリ

第五十三章 朝鮮事業

第一節 緒言

青淵先生ハ朝鮮半島ノ經濟上ニ少ナカラサル關係ヲ有セリ先生監督ノ下ニアル第一國立銀行ハ明治十一年五月以來釜山仁川京城元山津(廢今之ヲ)ニ支店ヲ有シ朝鮮政府稅關ノ出納ヲ取扱ヒ其他一般銀行業務ニ從事セリ又時トシテハ朝鮮政府及同國帝室ノ爲メニ立替金ヲ爲スコトモアリ又常ニ朝鮮市場貨幣ノ整理ニ注意シ明治三十年我邦幣制ノ改革アルヤ我壹圓銀貨ノ漸次缺乏ヲ告ケ貿易上差支ヲ生スルニ至ルヲ豫想シ刻印付壹圓銀貨ヲ通用セシムルコトニ盡力セリ其他青淵先生德澤ノ朝鮮半島ニ及フモノ尠少ニアラサルナリ

第二節 朝鮮人士往來

朝鮮人士ノ渡來スルモノアルヤ先生屢之ヲ招キ厚遇ス金玉鈞金宏集朴定陽魚允中等ノ如キ數先生ト往來セルモノナリ近年又義和宮教育ノ事ニ就キ盡力ス

明治十七年朝鮮京城ノ變起ルヤ金玉鈞逃レテ我邦ニ來ル姓名ヲ變シテ岩田某ト云フ屬來テ先生ニ救助ヲ請フ先生一日金玉鈞ヲ王子ノ別邸ニ招キ先生自身ノ維新前後ニ際スル境遇ヲ説キ示シ之ヲ金玉鈞ノ身ノ上ニ比較シ諭シテ曰ク今日子ノ爲ニ謀ルニ直ニ天津ニ赴キ李鴻章ニ面會シ朝鮮ノ國情ヲ述ヘ巨細ニ心事ヲ語ルニ若カス然ラハ近日ノ變亂其名正シクシテ假令李鴻章子ヲ捕ヘテ獄ニ下シ或ハ殺スコトアルモ他日必ス子カ志ヲ繼テ起ルモノアラン況ンヤ李ハ必スシモ子ヲ殺サ、ルナリ計此ニ出テス徒ラニ本邦ニ在テ一身ノ安全ヲ求メハ事ヲ起シテ其名無ク毫モ鄉國ノ爲メ益スル所莫ラン子若シ余カ言ニ從ハ、天津ニ至ルノ旅費ハ余請フ子カ爲メニ之ヲ辨セン金玉鈞謝シテ曰ク先生ノ僕カ人物ヲ見ル高キニ失ス僕ハ到底決シテ先生ノ想像スルカ如キ志望アル人物ニアラスト此ノ後先生金玉鈞ノ人ト爲リヲ卑ミ再ヒ見ス曰ク彼必ス終リヲ完フセス事ヲ謀リ憂國ノ誠心ニ出テスト既ニシテ刺客ノ爲メニ欺ク所トナリ上海ノ客舎ニ於テ毒手ニ斃ル

第三節 日韓通商協會及韓清語學校

明治二十七年先生ハ吉田文三ノ發起セル日韓通商協會ノ事業ニ賛成シ金員ヲ寄付シ其評議員トナリ會員ノ募集ニ盡力セリ同協會ノ趣旨左ノ如シ

第一條 本會ハ日韓通商協會ト稱シ本部ヲ東京ニ本部關西事務所ヲ大阪ニ支部ヲ朝鮮國京城、仁川、釜山、元山ニ置ク

但シ本條ノ外會員百名已上ヲ有スル府縣ニハ支部ヲ設クルコトアルヘシ

第二條 本會ハ日本朝鮮間ノ通商事業ヲ獎勵誘導スルヲ以テ目的トス

第三條 本會ハ右ノ目的ヲ達センカ爲メ左ノ諸項ヲ實行ス

第一、日韓兩國朝野ノ中間ニ立テテ通商上彼我ノ便益ヲ全フシ交情ヲ厚フスルヲ務ム

第二、本會ハ朝鮮國ノ實地ニ就キ主トシテ左ノ事項ヲ取調フヘシ

(一)各港貿易(二)内地行商(三)工業、鑛業、漁業、農業(四)運輸、交通、金融、韓錢相場

第三、本會ノ實施シタル事業ノ景況并ニ取調ヘタル事物ノ狀況及本會ノ目的

ニ關スル事件又ハ有益ノ論說等ヲ蒐メ毎月一回日韓通商協會報告トシテ之ヲ會員ニ寄贈ス

第四、朝鮮國樞要ノ地ニ商品陳列所ヲ設置ス

但シ本項商品陳列所ハ本會事務整頓ノ後設立ニ着手ス

明治二十八年先生ハ韓清語學校ノ發起人トナリ盡力ス此ノ校今廢ス

第四節 京仁鐵道

今現ニ韓國京城仁川間二十六哩ノ鐵道中已ニ仁川ヨリ鶯梁津ニ至ル二十哩間ニ列車ノ運輸ヲナシツ、アルモノハ我京仁鐵道合資會社ノ經營スル所ニシテ實ニ同國鐵道ノ創始ナリト素ト米人「モールス」カ韓國政府ヨリ獲得シタル鐵道布股權ヲ我京仁鐵道引受組合ニ讓受ケ後更ニ組合ノ組織ヲ變更シテ會社トナセシモノナリ當初「モールス」ヨリ引受ノ考按者ハ即チ我青淵先生ニシテ自ら組合ノ設立及「モールス」トノ締約ノ事ニ當リ爾來引續キ組合ノ委員長トシテ外ハ「モールス」ニ對スル時々ノ談判接衝ヨリ内ハ組合員間ノ調議、政府ニ對スル交

涉等殆ント細大ノ事務ヲ一身ニ引受ケ執掌セラレシ末完全ニ我有ニ歸シ尋テ合資會社ノ組織トナスヤ亦其社長トナリ總支配人以下ノ職員ヲ督勵シテ終ニ滯リナク開業ヲ見ルニ至レリ

此鐵道タル延長二十六哩餘工費二百數十萬ニ過キササル小鐵道ナリト雖モ我邦人ノ外國ニ於テ經營スル鐵道事業ノ嚆矢ニシテ且其地勢タル恰モ我國京濱間ノ如キ要地ヲ占メ日韓ノ通商上ハ勿論東亞ノ國際上ニモ至大ノ關係ヲ有スル事業タリ加之我國ノ經濟事情不振ヲ極メ金融必迫ノ時ニ於テ我特志家中ニ議ヲ纏メテ其事ノ完成ヲ告ケシハ實ニ我明治歴史中注目スヘキノ事件ナリト云ハサルヘカラス而シテ此舉ノ我青淵先生ニヨリテ企テラレ先生ノ苦心經營ニヨリテ成サレシヲ思ヘハ吾人ハ彼我國民ニ代ハリテ先生ニ多謝シ且先生六十年史中ノ一節トシテ特筆セサルヘカラサルナリ

予ハ組合及會社ノ囑托ヲ受ケテ先生ノ下ニ屬シ終始秘書ノ任ニアリシヲ以テ今先生六十年史編纂ノ事アルニ際シ不肖ヲ願ミス敢テ此一節ニ對シ起源ヨリ現今ニ至ル迄事實ノ梗概ヲ叙述セントス

其一起 源

京仁鐵道ハ米國人「ゼームス、アール、モールス」横濱二十八番館米國貿易商會主カ去ル明治廿九年三月韓國政府ヨリ布設、營業ノ特權ヲ得タルモノニシテ其特許約定書ノ譯文ハ左ノ如シ

朝鮮政府ヨリ米人「モールス」ニ與ヘタル特許約定書譯文寫

朝鮮國政府ハ左ノ事ヲ宣令シ且約定ス

第一 朝鮮王國京城ヨリ濟物浦ニ至ル鐵道ヲ敷設シ及保管スル事並ニ漢江ニ架橋スルノ權利ヲ下ニ記スル所ノ條款ニ從ヒ米國人「ゼームス、アール、モールス」及其讓受人ニ許與ス

第二 該鐵道ノ線路及該橋架設ノ場所ハ「モールス」若クハ其讓受人ノ選定セル技師ノ測量設計ニ從テ決定スヘシ
該橋側ノ一方若クハ雙方ニ歩行者ノ便ニ供スル爲メ步道ヲ設クヘシ
又該橋ニハ船舶通航ノ爲メ開闔機ヲ設クルカ或ハ河上通常ノ航行ヲ妨ケサ

ル丈ノ高サニ之ヲ架設スヘシ

第三 朝鮮政府ハ該鐵道ノ敷設及使用ノ爲メ相當ノ幅員ヲ以テ該鐵道ノ全線路ニ要スル土地ノ通路使用權及停車場、倉庫、工場副線(電車入レ替)敷地ヲ要スル土地ヲ具備スヘシ而シテ該會社「ゼームス、アール、モールス」及其讓受人ニ於テ右通路ヲ所有スル間、且朝鮮政府ニ於テ下ニ記スル所ニ從ヒ該鐵道及其財產ヲ購買ニ因テ所得スル迄ハ右通路使用權ヲ該會社ヘ貸渡スヘシ
通路使用權貸渡免許ニ對シ該鐵道會社ハ朝鮮ノ郵便物及郵便人夫並ニ朝鮮政府ノ兵隊及軍器ハ無償ニテ運搬スルコトヲ約定ス朝鮮政府カ購買ニ因テ該鐵道ヲ取得セルトキハ茲ニ該會社ヘ貸渡シ置キタル土地ハ悉皆朝鮮政府ヘ還納セシムルモノトス
該鐵道ノ線路測量ノトキニ當リ若墓地若クハ墳墓アルトキハ之ヲ毀損セサル様充分ニ注意スヘシ
又單純ナル小徑ヲ除クノ外凡テ踏切ニハ必要ナル通路ヲ設置シ車輛ノ通行スル所ニハ線路ヲ平等ナラシメ且線路ニシテ車輛ノ通行スル大道ヲ橫斷シ

其上面ヲ通行スルニハ高キニ過クル場所ヘハ築堤ヲ穿テ隧道ヲ設クヘシ
第四 該鐵道は京城濟物浦及漢江ニ各一箇所及漢江濟物浦間ニハ少ナクモ三
箇所ノ停車場ヲ設クヘシ而シテ江畔ノ停車場ハ馬浦若クハ龍山ニ設置スヘ
シ

第五 該鐵道ノ敷設器具及運轉ニ要スル物件ニシテ外國ヨリ輸入スルノ必要
アルモノハ關稅ヲ免除シ且該鐵道及其財產又ハ其收益ニハ何等ノ税金ヲモ
賦課セサルヘシ

第六 該鐵道ニ外國人及内地人ヲ使用スルハ該會社支配人ノ隨意タルヘシ但
可成的内地人ヲ使用スヘシ殊ニ土工事業ニハ一割以上ノ外國人ヲ使用スヘ
カラス尤モ内地勞働者ノ賃銀ニシテ外國勞働者ノ輸入ヲシテ利益ナラシム
ル程高價ナル場合ニハ差懸リタル事業ノ爲メ他國ノ勞働者ヲ輸入スルコト
ヲ得ヘシ但シ右外國勞働者ハ該事業終了ノ上ハ初メ來リシ所ノ國ヘ必ス送
還スヘキモノトス依テ之カ爲メ右輸入勞働者ハ其ノ來着ノトキ一々稅關ニ
於テ帳簿ニ記載シ置キ事業終了ノ上ハ一人タリトモ滞在ヲ許サ、ルヘシ

第七 前記ノ營業ニ從事スル爲メ右「ゼームス、アール、モールス」及其讓受人ニ會
社ヲ組織シ必要ナル資本金ヲ募集スルコトヲ許可ス而シテ該會社ハ該鐵道
ノ敷設所有保管及運轉ノ爲メ必要ナル總テノ財產ヲ所有シ取得シ移轉シ並
ニ契約ヲ結ビ該鐵道ヲ使用シ且一般ノ鐵道會社カ通常執行享有スル總テノ
權力ヲ所有スルコトヲ得

第八 該會社ノ元資金ハ右「ゼームス、アール、モールス」及其讓受人ニ於テ之ヲ決
定シ該事業ヲ適當ニ實行スル爲メニ必要ナル資本金ヲ作ルヘシ朝鮮政府ニ
於テハ前記ノ通路使用權ニ關スル事項ノ外ハ責任ナキモノトス

第九 該會社ノ組織及事業ノ開始ハ相當ノ理由ナクシテ之ヲ延期スヘカラス
但如何ナル場合ニ於テモ本令ノ日附ヨリ十二箇月以内ニ之ヲ爲スヘシ
若右期限内ニ開始セサルトキハ本免許ハ無効タルヘシ但交戰其他會社ノ力
及サル爲メ右期限間ニ事業ヲ開始スルコト能ハサル時ハ延期ヲ許可スヘシ
又該鐵道敷設事業ハ其開始ヨリ三箇年間ニ成就スヘシ但シ交戰其他ノ爲メ
妨ケラレタル場合ニハ其中止シタル日數ニ均シキ期限ノ延期ヲ許可スヘシ

第十 原因ノ何タルヲ問ハス若該鐵道會社ト朝鮮政府トノ間ニ葛藤ヲ生シタル場合ニハ左ノ方法ニヨリ任命サレタル二人乃至五人ノ公平ナル委員ノ裁斷ヲ以テ之ヲ決定スヘシ即チ一人ノ委員ハ朝鮮政府ヨリ之ヲ命シ該會社ヨリモ亦一人ヲ命スヘシ而シテ若右兩名合意シ能ハサルトキハ右兩名ニ於テ今一人ヲ任命シ其裁斷ヲ以テ決定スヘシ但同人ニ於テ今兩名ノ助力ヲ得ムコトヲ欲スルトキハ朝鮮政府及該鐵道會社ハ前記三名ト協議スル爲メ更ニ各一人ノ委員ヲ任命スヘシ

第十一 該鐵道落成ヨリ十五箇年ノ後ニ於テ朝鮮政府ハ該鐵道及其財産ノ全部ヲ當時ノ評價ヲ以テ買收スルコトヲ得右價ハ第十條ノ規定ニ從ヒ任命シタル委員ニ依テ決定セラルヘシ
 若朝鮮政府ニ於テ右規定ノ十五箇年經過ノ時ニ當リ該鐵道ヲ買收シ能ハサル場合ニハ更ニ十箇年間該會社ニ本免許ヲ與フヘキモノトス
 右十箇年經過ノ後及其後毎十箇年ノ終リニ當テ之ヲ買收スルハ朝鮮政府ノ隨意タルヘシ

第十二 朝鮮政府ハ本免許ノ期限間若クハ本書ニ記載スル該鐵道會社ニ於テ該鐵道ヲ所有シ居ル間ハ京城濟物浦ノ兩點ヲ連絡スル同様ノ鐵道ニハ免許ヲ與ヘサルコトヲ約定ス

但本條ハ朝鮮王國ノ他ノ地方ヲ連絡スル他ノ鐵道ニハ關係ナキモノトス
 第十三條 本宣令或ハ免許ノ英本文及其ノ條件ハ公認セラレタル本書ト認ムヘシ但シ之ニ漢譯文ヲ添附スヘシ

朝鮮京城ニ於テ

一千八百九十六年三月二十九日

外務大臣 李 完 用 印
 農商工部大臣 趙 秉 稷 印

其二 京仁鐵道引受組合

京仁鐵道引受組合ハ元京釜鐵道布設ノ事ヨリ一轉シテ之レカ組織ヲ見ルニ至レルモノニシテ京釜鐵道ノ發起ハ明治二十九年六月七日ノ頃ヨリ青淵先生ヲ始メ我國有志者中ニ於テ未開ノ韓國ヲ扶掖シテ其國內ニ鐵道ヲ布設シ運輸交通ノ便ヲ

開クハ我國ノ對韓政略上必要ノ一ナルノミナラス又實ニ我國商業家ノ當サニ力ヲ奮フヘキ所ナリトノ趣旨ニヨリテ計畫サレシモノニシテ其七月ノ發起人總會ニ於テ委員八名ヲ撰ヒ内貳名ヲ韓國ニ派出シテ其政府ト談判ヲ開カシメシモ其議遲々トシテ之レカ要領ヲ得ルニ至ラス荏苒歲月ヲ經過セリ是ヨリ先キ京城仁川間鐵道布設ノ特許ヲ得タル米國人「モールス」ハ一旦其本國ニ歸リテ之レカ資金ノ募集ニ從事セルニ際シ青淵先生等謂ラク單ニ京釜鐵道ニノミ戀々トシテ徒ラニ歲月ヲ費サンヨリハ寧ロ「モールス」ニ談判ヲ試ミ京仁鐵道ノ全部ヲ讓受ケ此事業ニ向ツテ資金ヲ注キ徐ロニ其歩ヲ京釜ニ及ホスニ如カスト是ニ於テ先生等主トシテ小村外務次官ニ協議シ其斡旋ニヨリテ「アルウキン」ヲ介シテ其意ヲ在米國ノ「モールス」ニ通スルニ至レリ是レ即チ京仁鐵道引受計畫ノ濫觴ナリシナリ

明治三十年三月下旬「モールス」米國ヨリ我國ヘ渡來セルニ際シ先生等之ト會談シ稍要領ヲ得タルヲ以テ時ノ外務大臣隈伯ニ對シ具サニ京釜鐵道發起以來ノ經歷ト道般京仁鐵道全部引受ノ希望ヲ有スル旨ヲ陳述シテ其贊助ヲ求メタル上一面ニハ再三「モールス」氏ニ會シテ契約ノ條件ヲ協議シ又一面ニハ屢次岩崎三井以

下有力者數十名ヲ會シテ其希望ヲ協議シ「シンヂケート」設立ノ事ヲ詢リタル結果其五月四日ニ至リ京仁鐵道引受組合ノ組織ヲ見ルニ至レリ組合員ハ青淵先生ヲ始メトシ岩崎久彌三井高保大倉喜八郎安田善次郎今村清之助益田孝中上川彦次郎瓜生震莊田平五郎前島密松本重太郎原六郎原善三郎大谷嘉兵衛ノ十五名ニ「モールス」ヲ加ヘ都合十六名ニシテ其規約ノ全文ハ左ノ如シ

京仁鐵道引受組合同規約

朝鮮國京城仁川ノ間ニ氣車鐵道ヲ布設シ運輸業ヲ營ムノ特許ヲ得タル米國人「ゼイムス」「アル」「モールス」ヨリ其業ヲ引受ケ他日之ヲ日本商會社ニ讓リ渡ス目的ヲ以テ茲ニ同志者ノ組合ヲ組織シ其規約ヲ設クルハ左ノ如シ

第一條

本組合ヲ京仁鐵道引受組合ト稱シ左ニ列記スル十六名ヲ以テ其組合員トス

岩崎久彌

今村清之助

原六郎

原善三郎

大倉喜八郎

大谷嘉兵衛

中上川 彦次郎
安田 善次郎
前 島 密
三 井 高 保
澁 澤 榮 一

瓜 生 震
松 本 重 太 郎
益 田 孝
莊 田 平 五 郎
ゼイムス、アール、モールス

第二條

京仁鐵道布設ノ特許ヲ「ゼイムス、アール、モールス」ヨリ引受クル爲メ契約ヲ締結スルニ付テハ其契約書ノ草案ヲ組合員ノ會議ニ付シ全員ノ認諾ヲ得タル後之ヲ締結スルモノトス

第三條

前第二條ニヨリ組合全員ノ認諾ヲ得タル契約ヲ締結シ終リタル後ハ其契約ノ條項ニ掲載セル權利義務ハ組合員ニ於テ平等ニ之ヲ享有シ且ツ負擔スルモノトス

第四條

本組合ハ相當ノ期間ヲ見計ヒ京仁鐵道ヲ日本商事會社ニ讓渡スモノトス
但シ此讓渡ヲナス迄ハ一時組合ニ於テ運輸ノ業ヲ營ムコトアルヘシ

第五條

本組合ヲ代表シテ「ゼイムス、アール、モールス」及其他ノ人ト協議ヲ爲シ契約ヲ締結スル爲メ及組合ノ事務ヲ處理スル爲メニ組合員會ニ於テ互撰ヲ以テ委員三名ヲ撰舉シ組合ニ關スル一切ノ事務ヲ擔當セシム

第六條

委員ハ本組合ノ事務ヲ處理スルニ付キ必要ト認ムルトキハ適當ナル使用人ヲ任命シテ之ニ相當ノ俸給ヲ支給シ且ツ組合ニ要スル諸經費ヲ支出スルコトヲ得

第七條

委員ハ三人連帶シテ諸般ノ事務ヲ取扱フモノトス又必要ト認ムルトキハ何時ニテモ組合員會ヲ招集スルコトヲ得

第八條

組合員會ハ組合員全數十分ノ五以上出席スルニアラサレハ開會シテ決議ヲ爲

スコトヲ得ス又決議ハ出席員過半ノ同意ヲ得ルヲ要ス

但シ組合員中出資ノ拂込ヲ延滞スル者アルキハ此決議ノ數ニ加ヘス

第九條

組合員會ノ議事ハ年長ノ委員ヲ以テ議長トス議長ハ自己ノ投票權ノ外ニ會員ノ意見相半シタル場合ニ於テ可否決定ノ投票權ヲ有ス

第十條

本組合ニ於テ京仁鐵道引受ノ爲メニ要スル出資額及其他ノ諸費用ハ組合員ニ於テ平等ニ之ヲ負擔シ其必要ニ應シテ委員ノ催告ニ從ヒ之ヲ拂込ムヘシ

但京仁鐵道引受ノ爲メニ要スル出資額ハ豫メ其極度ヲ金貳百萬圓ト定ムト雖モ鐵道工事ノ模様ニヨリ資金ニ不足ヲ生スルキハ組合員ニ於テ平等ニ之ヲ負擔スルモノトス

本組合ハ組合員會ノ決議ニ依リ本組合若クハ組合員ノ名義ヲ以テ他ニ負債ヲ起シテ本條第一項ノ拂込金ニ代フルコトヲ得

第十一條

組合員中資金ノ催告ニ應シ出金セサル者アルキハ其未拂金高百圓ニ付一日金四錢宛ノ遅延利息ヲ支拂ハシメ三十日ヲ經テ尙ホ其拂込ヲ爲サルキハ組合員會ノ決議ヲ以テ之ヲ處分シ其處分ニ對シテ異議ヲ唱フルコトヲ得ス

第十二條

本組合ハ京仁鐵道ヲ日本商事會社ニ讓渡シタルキ直チニ解散スルモノトス

第十三條

組合員全數五分ノ四ヨリ少カラサル同意ヲ以テ決議スルニ非サレハ中途ニ於テ本組合ヲ解散シ又ハ組合員ニ本組合ヨリ脱退スルコトヲ許サ、ルモノトス

第十四條

本組合ヲ解散スルキハ組合員中ヨリ二名ノ清算人ヲ撰任シテ一切ノ計算ヲ爲サシメ殘餘ノ財産ハ各組合員現ニ拂込ミタル出資ニ應シテ分配シ若シ又損失ヲ生シタルキハ各組合員ニ於テ之ヲ負擔スヘシ

第十五條

脱退ヲ許シタル組合員ヲシテ履行セシムヘキ條件ハ特ニ組合員會ニ於テ之ヲ

決議スルモノトス

第十六條

此規約ニ明記セサル事項ト雖モ組合員會ノ決議ヲ以テ之ヲ増補スルコトヲ得
前記ノ條項ヲ組合員各自ニ確約シタル證據トシテ同一ノ本規約十六通ヲ作り
各記名調印シテ各員其一通ヲ保有スルモノナリ

明治三十年五月四日

此ノ如ク組合ノ設立ヲ見タルヲ以テ其五月八日先生等組合ノ代表者トナリ「モ
ルス」トノ間ニ鐵道完成ノ上金貨百萬弗ヲ以テ買受クルノ契約ヲ締結シタリ其契
約書ノ全文ハ左ノ如シ

明治三十年五月八日日本帝國橫濱現住商人合衆國臣民「ゼームス、アール、モール
ス」以後特許人ト稱スト「東京仁鐵道引受組合」ノ代表者タル澁澤榮一益田孝及瓜生
震以後組合ト稱ストノ間ニ締結シタル契約書

朝鮮國政府ハ明治二十九年三月二十九日附命令別紙「甲號寫」ノ通ヲ以テ特許人
及其讓受人ニ與フルニ該命令ニ掲載シタル條件ニ遵ヒ朝鮮國京城ヨリ濟物浦

ニ至ル鐵道ヲ敷設シ之ヲ運用シ且之ヲ維持スヘキ特許ヲ以テシ特許人ハ該命
令ニ遵ヒ適任ナル技師ヲシテ該鐵道ノ線路及漢江へ架設スヘキ橋梁ノ位置ヲ
測量決定セシメ該命令ニ規定シタル時期即チ明治三十年三月廿二日ニ於テ現
ニ該鐵道敷設ノ工事ヲ創メ目下勦精施行中ナリ而シテ特許人ハ該特許ノ唯一
ノ所有者タリ且其所有者タルコトヲ主張シ該特許及之ニ因リテ許與セラレタ
ル總テノ權利、特權及免除并ニ之ニ因リテ獲得シ若クハ獲得スヘキ又ハ築造シ
若クハ築造スヘキ財產(該鐵道ヲ含有ス)ヲ賣却讓渡シ完良有効ノ所有權ヲ移附
スルニ充分ナル適法ノ權利權力ヲ有シ且該權利權力ヲ有スルコトヲ主張ス而
シテ特許人ハ下ニ掲クル所ノ約定及條件ヲ以テ該特許及前記一切ノ權利、特權、
免除并ニ財產ヲ該鐵道ト共ニ組合へ賣却讓渡シ組合ハ之ヲ買入ル、コトヲ契
約セリ依テ本契約書ハ之ヲ證スルコト左ノ如シ

第一、後ニ掲クルカ如ク組合ヨリ特許人ニ對シテ履行スヘキ契約ヲ原因トナシ
茲ニ特許人ハ組合ニ對シテ左ノ契約ヲ爲スモノナリ

(イ)特許人ハ嚮ニ其任命シタル技師ノ作成シタル測量設計、目錄及明細書右測

量設計、目錄及明細書ノ謄本ハ本契約書ノ日附ヨリ二箇月以内ニ特許人ヨリ組合ヘ交付スルコトヲ特許人ニ於テ約定ス但シ右ハ別紙乙號方法書ト合一ナリニ據リ本契約書ノ日附ヨリ一箇年以内ニ於テ前記京城濟物浦間ノ鐵道ヲ總テ良好完全ニ築造敷設完成裝備シ且適當精確ニ運轉作用シ得ル状態ニ爲スヘキヲ但シ特許人ハ必要ト認ムル場合ニ於テ右鐵道ヲ前記ノ如ク充分ニ完成裝備スヘキ期限ヲ六箇月間延引スルノ權利ヲ有シ且天災其他抗拒シ難キ原因ニヨリテ避クヘカラサル實際ノ遷延ヲ生シタルトキハ右鐵道ヲ前記ノ通り充分ニ完成裝備スヘキ前記十八箇月ノ外更ニ十二箇月以内ノ延引ヲナスコトヲ得

(ロ)特許人ハ組合ノ雇入レタル技師ヲシテ該鐵道ノ既定線路ヲ検査シ且其築造工事ヲ監督セシムルコトヲ許シ尙右技師ヲシテ満足ニ其任務ヲ執行セシムルカ爲メ特許人ハ右技師ニ對シ總テ正當且必要ナル便益ヲ與ヘ又特許人カ雇入レタル技師ト同一ノ資格ヲ與フヘキコトヲ約定ス但シ右技師ノ報酬ハ總テ組合ニ於テ支拂フヘキモノトス

(ハ)特許人ハ組合ヨリ請求アル時ハ前記測量設計、目錄及明細書ノ増減變更(假令ハ線路ノ傾斜ヲ五十分ノ一ヨリ百分ノ一ニ變更シ若クハ曲線ノ半徑ヲ九鎖ヨリ十五鎖ト爲スカ如キ)ヲ爲スヘキコト但シ之カ爲メ増加スル所ノ實費ハ組合ニ於テ支拂フヘキモノトス

(ニ)特許人ハ本項(イ)節ニ規定スルカ如ク該鐵道ヲ完成シタル時ハ直ニ該特許及之ニ因リテ許與セラレタル一切ノ權利、特權及免除并ニ之ニ因リテ獲得シ若クハ築造シタル一切ノ財産、前記ノ通り築造敷設完成裝備シタル鐵道ヲ包含ス)之ニ附屬シ若クハ附添スル一切ノ附屬物及附添物其他各種目ノ車輛一切ノ橋梁、停車場、倉庫、店舖、工場、建設物并ニ一切ノ器械、裝備品、材料供給品、貯藏品等總テ前記測量設計、目錄及ヒ明細書ノ全部若クハ一部ニ依リ製作、築造、建設若クハ裝備セラレタルモノハ前記命令ニ掲載シタル條件ヲ除クノ外何等ノ性質種類ニ係ルヲ問ハス一切ノ債務、責任及故障ナク之ヲ組合ニ賣却讓渡シ又組合若クハ組合ノ指定シタル一己人若クハ會社ニ對シテ前記特許、權利、特權、免除及財産ノ良好完全ナル讓渡證書ヲ作成交付シ

且組合ヲシテ該鐵道及之ニ附屬シ若クハ附添セル權利、特權免除并ニ財產ヲ完全ニ且故障ナク保持所有セシムルコト

(ホ)特許人ハ前節ニ規定シタルカ如ク賣却讓渡ヲ爲スニ當リ本契約書ノ締結及履行ニ對シテ朝鮮國政府若クハ其他ノ外國政府會社商社若クハ一個人ヨリ故障異論及要求ヲ申出ルコトアルモ總テ之ヲ負擔シ全部其責ニ任スヘキコト

第二、本契約書ニ掲クル如ク特許人ヨリ組合ニ對シテ履行スヘキ契約ヲ原因トナシ茲ニ組合ハ特許人ニ對シテ左ノ契約ヲ爲スモノナリ

(イ)組合ハ後ニ掲クル購買代金支拂ノ擔保トシテ本契約書ノ正當ナル締結及交付ヲナシタル後特許人ヘ合衆國金貨五萬弗ヲ供托スヘキコト

(ロ)特許人ニ於テ組合若クハ組合ノ指定シタル一己人又ハ會社ニ對シテ前記特許及本契約書第一項ニ節ニ掲載シタル權利、特權免除及財產ノ良好完全ナル讓渡證書ヲ作成交付シ且ツ前ニ規定スルカ如ク該鐵道及之ニ附屬スル權利、特權免除及財產ヲ完全ニ且故障ナク保持所有セシムルニ於テハ組

合ハ右特許并ニ鐵道ノ購買代金トシテ本項前節ニ規定シタル供托金ノ外ニ合衆國金貨九拾五萬弗ノ金額(全部合計合衆國金貨壹百萬弗)ヲ特許人ヘ確實ニ仕拂ヒ若クハ仕拂ハシムヘキコト但シ前記購買代金ノ仕拂ヲ爲シタルトキハ特許人ハ更ニ合衆國金貨貳萬五千弗ノ減額ヲ爲シ直ニ之ヲ組合ニ返還スヘキコトヲ約定ス

第三、特許人及組合相互ノ間ニ於テ尙ホ左ノ事項ヲ契約ス

(イ)若シ組合ニ於テ本契約書第二項(ロ)節ニ規定シタル購買代金ノ仕拂ヲ爲サス若クハ爲スコトヲ懈ルトキハ本契約書ノ契約ハ無効ニ歸スヘク而シテ本契約書第二項(イ)節ニ規定シタル組合ノ寄托金ハ特許人ノ所有ニ歸スヘキモノトス

(ロ)若シ特許人ニ於テ本契約書第一項(イ)(ロ)(ハ)(ニ)及(ホ)ノ諸節ニ掲載シタル契約ノ全部又ハ一部ヲ規定ノ方法并期限ニ於テ履行セス若クハ履行スルヲ怠ルトキハ組合ハ本契約書ノ契約ヲ尙ホ繼續實施シ或ハ特許人ニ於テ違約怠慢ノ所爲アリタルト同時若クハ爾後一箇年以内ニ於テ何時タリトモ

本契約書ノ契約ヲ取消シ及解止スルノ權利ヲ有ス而シテ若シ組合ニ於テ本契約書ノ契約ヲ繼續實施スル場合ニ於テハ特許人ハ其違約怠慢シタル一日毎ニ損害賠償金トシテ合衆國金貨壹百弗ノ金額ヲ組合ヘ支拂フヘキモノトス但シ右違約怠慢ノ所爲一箇年ノ間繼續スルトキハ本契約書ノ契約ハ無効ニ歸スヘク且特許人ハ右ニ規定シタル賠償金ノ外ニ本契約書第二項(イ)節ニ依リテ組合ヨリ特許人ヘ寄托シタル一切ノ金額ヲ組合ニ返還スヘキモノトス若シ又特許人ニ於テ違約怠慢ノ所爲ヲナシタル爲メ組合カ本節ノ規定ニヨリ其保有スル權利ニ依リ其違約怠慢ノ所爲アリタルト同時若クハ爾後一箇年以内ニ於テ本契約書ノ契約ヲ取消シ及解止シタルトキハ特許人ハ本契約書第二項(イ)節ニ依リテ組合ヨリ特許人ヘ寄托シタル一切ノ金額ヲ組合ニ返還スヘク且該金額ノ外更ニ組合カ被ムル所ノ損害ヲ總テ賠償スヘキモノトス

(ハ)本契約書ノ契約ニ基キ支拂フヘキ一切ノ金額ハ支拂者ノ便宜ニ依リ支拂期日ノ當時横濱ニ於ケル合衆國金貨參着爲換相場ニ依リ日本國通貨ヲ以

テ支拂フコトヲ得ヘキモノトス

(ニ)若シ特許人ト組合トノ間ニ於テ本契約書ニ掲載シタル各契約ノ眞實ナル解釋意義若クハ履行法ニ關シ示談ヲ以テ調停シ難キ爭議ヲ發生スルトキハ之ヲ利害ノ關係ナキ仲裁者三名ノ裁決ニ附スヘシ右仲裁者ノ一名ハ特許人之ヲ選任シ其一名ハ組合之ヲ選任シ猶ホ一名ハ特許人及組合共同ニテ之ヲ選任スヘシ若シ此第三仲裁者ノ選任ニ關シ特許人及組合ニ於テ同意シ得サルトキハ特許人及組合ヨリ選任セラレタル二名ノ仲裁者協議ノ上之ヲ選任スヘシ而シテ該仲裁者中ノ二名ニテ署名シタル裁決書ハ最終ノ判決ニシテ本契約兩當事者ヲ羈束スルモノトス

(ホ)本契約書ニ包含スル諸般ノ規定ハ兩契約當事者ノ相續人、遺囑管財人、選定管財人并ニ讓受人ニ適用シ且之ヲ羈束スヘキモノトス

右契約ヲ締結シタル證據トシテ當初記載ノ年月日日本帝國東京ニ於テ本契約ノ本證タル日本文ノ契約證書ニ當事者雙方記名調印スルモノナリ但シ正本二通ヲ作り各自一通ヲ所持ス

James R. Morse

澁澤榮一印

益田孝印

瓜生震印

契約當事者ハ左ニ記名セル立會人ノ面前ニ於テ記名調印及交付セリ

立會人

H. W. Denison

岡村輝彦印

青淵先生ハ組合創立ト同時ニ推サレテ其委員長トナリ自邸ノ一室ヲ以テ事務所ニ供シ總テ冗費ヲ節約シテ萬般ノ事ニ當レリ而シテ工學博士仙石實ニ顧問ヲ囑托シ又工學士吉川三次郎ヲ監督技師ニ任シ韓國ニ赴キテ「モールス」ノ工事ヲ監督セシメ一面ニハ政府ニ請願シテ資金ノ一部貸付ノ豫約ヲ得タリ然ルニ爾來此豫約ヲナシタル松方内閣ハ倒レ其後ヲ承ケタル伊藤内閣亦倒レ次ノ大隈内閣亦久シカラスシテ倒ル、等内閣ノ更迭頻繁ナリシカ爲メ政府トノ交渉ニ頗ル困難ヲ

生シ又一方ニハ「モールス」ヨリ工事ノ進行上前金ノ増額ヲ請求シ或ハ變更工事決定遲延ヲ理由トシテ賠償金ノ請求ヲナシ又他方ニハ佛國「シンヂケート」ノ代表者「グリル」ヨリ高價ヲ以テ買受ノ申込アリタルニヨリ組合ニ向テ解約ノ請求ヲ試ムル等内外ノ困難ハ其四圍ニ蟬集セリ先生ハ此間ニ處シテ總ヘテノ方面ニ向テ其衝ニ立テ一方ニハ組合員ノ離散ヲ豫防シ一方ニハ政府當局者ト談判ヲ重ネツ、建設落成ノ日ヲ待チタリシニ翌三十一年ニ至リ工事ノ設計ニ對シ「モールス」ノ代理者ト我監督技師トノ間ニ其見解ヲ異ニスルノ點頻々トシテ續出シ彼我ノ間屢々交渉面議ヲ重キタルモ要領ヲ得ス仲裁ニヨリテ事ヲ決定スルノ外途ナキノ場合ニ臨ミ終ニ「モールス」ハ一身ノ力殆ント其煩累ニ堪ヘストナシ現在ノ出來形ヲ以テ即時賣買取引ヲ決行センコトヲ提議シタリ時ニ三十一年十月ナリ依テ更ニ足立太郎ヲ總支配人ニ任シ之ニ命シテ工事ノ實況ヲ視察セシメ又一面ニハ當局者ニ調査ヲ乞ヒテ外交上ノ故障ナキコトヲ確メ得タルヲ以テ進ンテ其提議ニ應スルノ方針ヲ取リ價格ノ點ニ付數回交渉ヲ重キタル後十二月ニ至リ終ニ雙方ノ協議整フニ至レリ斯クテ十二月下旬外務省ノ手ヲ經テ韓國政府ノ承認ヲ經卅二年

一月上旬ニ至リ鐵道ニ關スル全財産實地引繼ノ手續ヲ了シタリ而シテ前々年來青淵先生等ヨリ數十回ノ交渉ニヨリ數代ノ内閣ニ於テ豫約ヲナシタル趣旨ニ基キ政府ハ此ノ月ニ至リ百八拾萬圓ヲ組合ニ貸付クヘキ豫算案ヲ議會ニ提出シ大議論ノ末其通過ヲ見ルニ至レリ

斯クテ組合ハ一月下旬政府ヨリ百八拾萬圓ノ貸付金ヲ受領シタルヲ以テ其三十一日ヲ以テ鐵道ノ買受代金ヲ「モールス」ニ拂渡シ同人ヨリ正式ノ鐵道賣渡證書ヲ領手シ茲ニ京仁鐵道ハ全ク組合ノ所有ニ歸スルニ至レリ尋テ「モールス」ヨリ代金未精算高ニ對シ種々ノ要求アリシモ至當ノ理由アルモノハ之ヲ認メ其他ハ一切論破拒絕シ三月下旬之ヲ精算シテ同人ニ拂渡シタルニヨリテ一切ノ取引ヲ結了シ又五月下旬ニ至リ同人組合ヨリ脱退ノ手續ヲ了セシヲ以テ茲ニ「モールス」ニ對スル關係ハ全然終結スルニ至レリ

其三 京仁鐵道合資會社

京仁鐵道引受組合ノ組織ハ工事竣功後鐵道引受ノ時ニ至ル迄ノ私立同盟ニシテ之ヲ公表セサリシカ今ヤ工事完成前ニ於テ公然我所有ニ歸シ自ラ殘工事を施行

スルノ場合ニ至リシヲ以テ最早公ケノ組織トナスニ於テ何タル支障ナキノミナラス組合内外ノ關係上公然タル法制上ノ會社組織トナシ追テ時機ヲ見テ更ニ株式會社ニ變更ノ方針ヲ取ルノ得策ヲ認メタルヲ以テ資本金ヲ七拾貳萬五千圓社員ヲ從來ノ十五名トシ終ニ三十二年五月十五日ヲ以テ會社定款ヲ締結シ同時ニ從來ノ委員タリシ青淵先生、益田孝及瓜生震ヲ取締役ニ選定シ同十七日會社設立ノ登記ヲ經タリ茲ニ於テ從來組合ノ有シタル權利義務其他一切ノ物件書類及總支配人以下ノ職員ヲ舉ケテ會社ニ引繼ケリ

青淵先生ハ引續キ推サレテ其社長トナリ自邸ノ一室ニ於テ萬般ノ事務ヲ主宰セラル、一舊ノ如シ而シテ總支配人足立太郎屬員ヲ率テ韓地ニ出張シ殘工事を急進シ終ニ卅二年九月十八日ニ至リ仁川、鷲梁津間二十哩ノ運轉ヲ開始シ非常ノ好結果ヲ得テ内外人ノ好評ヲ博スルニ至レリ京仁間全通ハ三十三年六七月ノ交ナルヘシト云フ

其四 開業後ノ狀況

京仁鐵道ハ韓國京畿道ノ西海岸仁川ノ內濟物浦チエマルボウニ起リ京城ニ終ル

全線二十六哩四分ノ一ニシテ其停車場ハ仁川、柱峴、牛角洞、富平、素砂、梧柳洞、鷲梁津、龍山、南大門、京城ノ十箇所ニ置ケリ軌道ハ所謂廣軌道ニシテ總テ米國式ナリケリシ四呎八吋半、最急勾配百分ノ一、最急曲線六度軌條ハ鋼製五十六磅橋梁ハ漢江ノ本流ニ二百呎、スパン、鋼鐵橋十張ヲ架スルノ外他ハ皆木橋即チ「トレッヌル」ナリ卅二年九月十八日ヲ以テ開業シタルハ仁川ヨリ漢江ノ西岸鷲梁津ニ至ル廿哩間ニシテ同年十二月卅一日迄百五日間營業ノ成績ニ見ルニ頗ル好結果ヲ呈セリ即其營業收入ハ一日平均百四拾七圓餘一日走行一哩ニ對シ壹圓六拾錢、一日營業一哩平均七圓四拾錢ノ收入ニ當レリ又旅客ノ數一日平均三百六十六人其内韓人凡ソ八割以上ヲ占メ支那人之ニ亞キ日本人及歐米人ハ又其次ニ位ス貨物ハ全線未開通ニ基ク不便ト漢江川舟ノ競争ニ依リ比較的少量ニシテ一日平均十一、二噸ニ過キスト雖モ全線開通ノ上ハ蓋シ大ニ増加スヘキ見込ナリ又發車數ハ開業ノ當初ハ毎日兩端ヨリ各二回宛發車セシカ十二月一日ヨリハ各三回ノ發車ニ改正セリカク回數増加ノ結果ハ頗ル良好ノ成績ヲ呈シタリ以上ノ事實ヲ以テ之ヲ我國各鐵道開業當時ノ狀況ニ比較スルニ前途非常ニ有望ナリト云ハサル可ラス即チ

我京濱間ハ開業ノ當時一日一哩ノ收入拾圓内外ニ過サリシモ現今ハ四拾圓ニ達シ、日本鐵道ハ六圓四拾錢ニ止マリシモ現今ハ三拾圓ニ上リ甲武ノ如キ四圓ヨリ始マリテ拾五圓ニ達シ關西ノ如キハ其初メ二三圓ノ間ニ起リテ今日尙ホ七圓ニ出テス又有名ナル阪堺ノ如キ今日四拾圓ノ收入アリト雖モ開業當時ヲ顧ミレハ僅ニ九圓ニ過キサリシナリ即我京仁鐵道ノ開業後百五日間平均一日一哩七圓四拾錢ハ非常ノ好成绩ナリト云ハサルヘカラス況ンヤ現今ノ開業ハ途中開業ニシテ不日京仁間全通ノ上ハ一日一哩拾三圓ニ下ラサル見込ナルニ於テオヤ之ヲ我國各鐵道ノ開業初年ニ比較スレハ實ニ第一位ヲ占ムル者ト云フヘキナリ而シテ京仁鐵道ハ韓國ノ最樞要地タル首府ト開港トヲ聯絡スルヲ恰モ我京濱間ノ如キ重要ノ鐵道ニシテ殊ニ仁川ノ地點タル實ニ南北支那ヨリ韓國ニ入ルノ門戸ヲ占メ前途益、貿易ノ盛況ヲ呈スルノ形勢ヲ備ヘ一方ニハ京仁京釜兩鐵道ノ開通ニヨリテ京城亦益、繁榮ヲ加フルトセハ京仁鐵道ノ前途モ亦有望ナリト謂フヘシ京仁鐵道ノ計畫ハ此ノ如ク成功シ戰後率先シテ善隣扶掖ノ一大事業ヲ完成シタリ其結果ハ彼國ノ開發ニ於テ又彼我兩國ノ關係ニ於テ或ハ有形的ニ或ハ無形的

ニ徐々トシテ現出シ來ラントス而シテ一方ニ於テハ前記ノ如ク會社自身ノ前途モ亦有望ナリトセハ在ラユル方面ニ對シ成功モ亦偉ナリト云フヘシ此事タル素ト我國有力者ノ協力ト帝國政府ノ贊助トニ基ク所尠カラスト雖モ其成功ハ主トシテ青淵先生カ爾來四星霜間終始一貫至深至切ナル苦心盡力ニ歸セサルヘカラスルナリ

(以上澁澤家元方員八十島親徳氏ノ調査ニヨル)

第五節 京釜鐵道

京城釜山間鐵道敷設ノ事ハ先生發起人ニ加ハリ盡力スル所アリ明治三十一年九月八日該發起人ト韓國政府トノ間ニ左ノ契約ヲ締結セリ

京釜鐵道契約

第一條 韓國政府ハ京城釜山間ニ鐵道ヲ敷設使用ノ件及經過スル所ノ江川ニ築橋スルノ權ヲ以テ日本人ノ京釜鐵道會社發起人ニ許可シ其代理人ナル佐々木清麿乾長次郎ト辨理事務條款ヲ定ムルコト左ノ如シ

第二條 鐵道線路ノ敷設及江橋建築ノ方法ハ京釜鐵道會社若クハ其代理人ノ撰定スル技師ノ測量ニ依リ取極ムヘシ而シテ江橋ハ高架橋ニシテ船舶ノ往來ニ差支ナカラシムヘキモノヲ要ス否ラサル時ハ明ケ閉チノ出來得ル橋ヲ作り毎日幾時間ノ時期ヲ定メ開閉スヘシ又其橋ノ左右ニハ人道ヲ作り往來ヲ別ニシ行人ノ衝突ヲ避シムル様致スヘキコト

第三條 鐵道ノ尺量ハ開國五百年勅令第三十一號國有鐵道規則第二條ニ各地方ノ鐵道ハ務メテ均一ニ歸シ以テ通行ニ碍ナカラシムヘシトアルニ依リ該鐵道ノ幅ハ京仁鐵道ノ軌路ニ準スヘシ其線路ノ地段及停車場、倉庫、工作場、轉轍器、側器等ニ充ツヘキノ地段ハ韓國政府ヨリ供給シテ以テ該鐵道ノ敷設ニ便ナラシム該會社カ該鐵道ヲ管理スルノ年限内及韓國政府カ該鐵道ヲ買收スル迄ハ右ノ地段ヲ該會社ニ專屬スルヲ許ス韓國ノ軍用品、兵丁、郵便物及郵便遞送人ノ往來ハ無賃タルヘシ韓國政府カ該鐵道ヲ買收スル時ハ右專屬ノ地段ハ韓國政府ニ返納スヘシ線路ニ當リ若シ墳墓アルトキハ迂回シテ其墳墓ヲ犯スナカルヘシ且ツ道路ヲ橫斷スル場合ニハ必ス地形ニ從ヒ宜ヲ量

リテ其道路ヲ通シ行人及車馬ノ容易ニ往來シ得ル様致スヘキコト

第四條 停車場ハ一ヲ京城ニ置キ一ヲ釜山ニ置ク其他ノ停車場ハ便宜ニ從ヒ列置スヘシ而シテ其場所ニハ別國人ノ居留ヲ許サ、ルコト

第五條 凡ソ鐵道ニ要スル所ノ機器及各種ノ物件ニシテ外國ヨリ輸入シ來ルモノ、海關稅ト鐵道所管ノ地段ニ係ル一切ノ地稅トヲ免シ又該鐵道所管ノ種々ノ利益ニハ徵稅セサルコト

第六條 韓人及外國人ノ別ナク雇用スルコトハ監督ノ意見ニ遵フト雖モ而モ必ス韓人ノ多數ヲ用ユヘシ土役ノ人雇入ニ至テハ十分ノ九ノ割合ヲ以テ韓人ヲ使用スヘシ工事繁忙ノ時ニ方リ韓人ノ雇料漸ヤ昂貴スル爲メニ別ニ他國人ヲ外國ヨリ雇入レタルトキハ該鐵道落成ノ後其他國人ヲ本國ニ還送スルコト、シ其入港出港ノ時ニ於テ海關ヨリ銘々檢査シ一人タリトモ留メ置クコトヲ許サス木材ハ韓地產ノモノヲ混用スルコト

第七條 該會社若クハ代理人ニ於テ本事業ヲ執行スル爲メニ會社ヲ設立シ資本ヲ蒐集スルコトヲ得該會社ハ該鐵道ノ敷設運轉等ノ爲メニ必要ナル契約

ヲ結ヒ所需一切ノ物件ハ該會社ノ所有財產トシテ自由ニ處分スルコトヲ得而シテ諸般ノ事務ヲ處理スルニ當リ一般鐵道會社ノ享有スル一切ノ權利ヲ享有スルコト

第八條 該會社發起人或ハ其代理人ハ入用ノ資本ヲ精算シ之ヲ蒐集スヘシ韓國政府ハ前條記載スル所ノ地段ノ供給ヲ除クノ外更ニ給スル所ナキコト

第九條 倘シ其他ノ地方ニ於テ支線ヲ添設セントスル場合ニハ韓國政府暨其臣民カ自ラ敷設スルニアラサルヨリハ別國政府暨其臣民ニ敷設スルコトヲ許サ、ルコト

第十條 本契約調印ノ日ヨリ起リ三箇年内ニ速ニ會社ヲ組織シ工事ヲ起工スヘシ此ノ期限内若シ起工セサルトキハ更ニ契約スルニ非サルヨリハ本契約ヲ以テ廢紙トナス該會社戰爭若クハ其他種々ナル不慮ノ事故ニ妨害セララル、如キ已ムヲ得サル事情ニ依リ起工ヲ遲延スルトキハ更ニ延期ヲ與フ而シテ其起工ノ時ヨリ十箇年内ニ落成セサルトキハ本契約ノ廢止ヲ行フ但シ十箇年内ニ於テ戰爭暨不慮ノ事故アルニ遇ハ、其事故ノ月日ヲ按シ期限ヲ延

ハスヲ得ルコト

第十一條 若シ鐵道ニ關シ措辨シ難キ場合ヲ生シタルトキハ韓國政府ト該會社ト各一人ヲ派出シテ協議處分セシムルコト若シ協議整ハサルトキハ該二人ハ局外者一人ヲ招キ斟酌裁定セシメ此ノ裁定ヲ以テ終結トナスコト局外人ニシテ自ラ裁斷スルヲ欲セサルトキハ其局外人ト該二人ト別ニ局外二名ヲ招キ立合ノ上協議處分スルコト

第十二條 鐵道落成後十五年ノ終リニ於テ韓國政府若シ該鐵道ヲ專有スルノ意アラハ則チ上條第三項ノ人員ニ公平ノ評價ヲ致サセ買收スル能ハサルトキハ十年ヲ延期ス延期ハ每二十年ヲ以テ期トナスコト

第十三條 何時タリトモ韓國政府ノ財政整頓シ該鐵道ヲ經營シ得ルノ場合至ラハ該政府ハ該鐵道ヲ以テ日韓間ノ共同事業トナスノ旨意ヲ以テ更ニ該會社ト協議ノ上本契約ヲ改正スルコトヲ得ルコト

第十四條 韓國ノ會社若クハ臣民ハ何時タリトモ該鐵道ノ株主タルコトヲ得而シテ該株主ハ他ト同一ノ權利ヲ享有スルヲ得ルコト

第十五條 該鐵道會社ハ如何ナル場合ト雖モ日韓兩國ノ政府暨臣民ニ非ル外ハ該株券ヲ他人ニ讓與スルヲ許サ、ルコト

以上特許ノ各條各其確實ナルヲ保證シ互ニ記名調印シテ以テ憑信ヲ昭ラカニスルコト

大韓光武二年九月 日

外部交渉局長 李 應 翼
農商工部通信局長 姜 寅 圭

大日本明治三十一年九月八日

京釜鐵道發起人代理人 佐々木清麿
京釜鐵道發起人代理人 乾 長次郎

第六節 朝鮮視察

明治三十一年四月二十三日先生東京ヲ出發シ長崎ヲ經テ朝鮮ニ赴ク夫人兼子第一銀行員清水泰吉其他四名隨行ス此ノ行朝鮮ニアル第一銀行支店ノ狀況京仁鐵

道工事進行ノ模様其他朝鮮ノ經濟并財政ノ事情ヲ觀察スルニアリ釜山仁川ニ立寄リ京城ニ至リ五月三十日東京ニ歸ル到ル處鄭重ノ權迎ヲ受ケ請ニ應シ演說セリ就中京城ニ於テハ韓國皇帝陛下ニ謁見シ七寶燒花瓶一對琥珀織物三卷ヲ獻ス又明成皇后(閔后)ノ陵ニ參拜シ先生ノ夫人ヨリ七寶燒花瓶一對ヲ奉納ス其他韓國政府諸大臣以下ニ物ヲ贈ル品アリ又京城學堂日語學校維持及京城貧民救助ノ爲メ金員ヲ寄付ス韓國皇帝陛下ヨリ饗宴ヲ賜ヒ同國ノ財政經濟改良ノ方法ニ付テ諮詢アリ

是ヨリ先キ東京出發前先生ハ韓國遊歷ノ目的ニ關シ龍門社總會ニ於テ左ノ如ク演說セリ

諸君今日ハ昨日ノ模様テハ天氣モドウカト思ヒマシタケレトモ幸ニ持直シマシテ此ノ龍門社ノ總會ニハ何時モ天氣廻リカ宜ウコサリマシテ社員一同嚙ソ御満足ノコト、私モ共ニ歡ヒヲ申シマス、斯ル好機會ニ於テ私ハ滿場ノ諸君ニ一言申述ヘテ置クコトカコサイマス、御聞及モコサイマセウカ私ハ近日朝鮮ニ旅行スル筈ニナツテ居リマス、時節柄經濟社會多忙ノ際ニ漫遊ノ如キ旅行ニ日

ヲ費シマスノハ心ナラヌヤウニハ考ヘマスカ豫テ第一銀行ノ用向テ昨年來參ラウト約束ヲシテ置キマシタコトテスカラ暫時漫遊ヲ至ス積リテコサイマス、併シ私ノ今度ノ旅行ハ決シテ政治ニ關係ヲ持ツトカ若クハ經濟上ノ大ナル用向ヲ帶ヒルトカ云フコトテハコサイマセヌ、又其行先モ餘リ耳新ラシイ土地テテコサイマセヌカラシテ何か特ニ告別ノ辭ヲ述ヘルト云フ如キ價值アル旅行テハコサイマセヌケレトモ、暫ク留守ニ致シマス爲メニ一言ノ御別レノ辭ヲ述ヘテ置クヤウニ至シマス、即チ朝鮮ト我日本ノ是迄ノ關係ニ就テ一言申述ヘタイト思ヒマスノテ或ハ斯様ニ想像シタカ實際行ツテ見ルトサウテナカツタト云フコトカアルカモ知レマセヌノテ其事ヲ一言申述ヘヤウト思ヒマス

此ノ朝鮮ト稱ヘル半島國ハ先年來何ヤラ鼎ノ重サカ能ク分ラナカツタ、其深サモ十分ニ知レナカツタ爲メテ大方輕カラウ、大方淺カラウト思ヒツ、モ餘リ世間カラシテ附廻スト云フコトハナカツタヤウニ見ヘル、所カ明治二十七年ニ日本ト衝突ヲ惹起シテカラシテ遂ニ其重サ深サカ確然分ツテ來テ極東ノ風雲カ今日甚タ忙シクナツタヤウニ見ヘマステス、吾々商人カ斯ル言語ヲ吐ケハ何ヤ

ラ急ニ政治家ニテモナリ、若クハナラウト欲スルカト云フ御疑カアルカモ知レ
マヌセカ、私カ朝鮮ニ參ルニ就テ止ムヲ得ス箇様ナ觀念ヲ惹起スノテアリマス
借テ右様ナ次第ニナリマシテ現ニ今日我朝野ノ有志ノ御方々杯モ頻リニ此ノ
東洋ノ問題ニ就テ種々御議論モアルヤウテアリマスカ、自身ノ考ヘマス所テハ
ドウモ此ノ世ノ中ノ有様殊ニ外交上ノ事柄ハ多ク他働ニ促サレテ自働ニ少ナ
イト云フ嫌カアリハセヌカ、露西亞カ旅順口ヲ取ツタト云フト吃驚スル、英吉利
カ威海衛ニ手ヲ付ケタト云フト初メテ騒出スト云フノハ甚タ遺憾ニ考ヘルノ
テコサイマス、畢竟外交ニ就テハ侵略的即チ政治的ト云フノト經濟的トノ差別
カトウモ此ノ自働他働ノ差別ヲ爲シハシナイカト思ヒマス、昔ノ外交ハトウシ
テモ國ノ文明ニ進ム時代程侵略的ノ方針ヲ執ツテ己レノ領分ニスルト云フノ
カ重モナル外交ノ基礎テアツタト云ツテ宜イテコサイマセウ例ヘハ朝鮮ト日
本トノ關係ヲ見テモスツト以前ノ神功皇后ト云ヒ、若クハ阿部比羅夫又ハ文祿
ノ大開テモ、總テ政治的ト云フ中ニ侵略ヲ含ンテ居テ、經濟的外交ハ甚タ少ナカ
ツタト申シテ宜イヤウテス、今日ノ外交ノ有様テモ尙ホ其國ノ模様ニ依テ自ラ

其主義ヲ見分ケ得ラレルカト思ハレマス、併シ今申ス、成ヘク丈ケ自働ニ行クト
云フニハ經濟的方針ヲ取ルコトカ主ニナラナケレハ常ニ外交ヲ完ウスルコト
ハ出來ヌヤウニハナリハセヌカト思フノテコサイマス、我々此ノ經濟社會ニ從
事スルモノニ於テ海外ノ國ハドウナツテモ宜イ海外ニ就テハ一切關セス焉ト
云フコトハ出來ヌ、唯、侵略トカ餘リ政治熱ヲ強メ我力ヲ量ラスニ居テハ困ル是
ハ平素慎マレナケレハナラヌ、併シ常ニ他國ニ對シ經濟上ノ利益ヲ増進スルコ
トハ國ヲ愛スルト共ニ務メナケレハナラナイ、即チ經濟的ノ外交ニ於テ我々ハ
最モ力ヲ用ヒナケレハナラヌコト、考ヘル、維新以前ノ朝鮮ノ有様ハ文祿以後
カラシテ徳川時代ニ於テ修交ハコサイマシタケレトモ貿易、通商ト云フモノニ
於テ見ルヘキモノカナカツタト言ツテ宜イ、勿論彼國モ野蠻テアリマシタラウ
カ、サウ云フ己レモ餘リ文明トハ申セヌテアツタラウト思フ、爲メニ其進歩ハ極
ク遅々タルモノテアツタ、明治ト改マリマシテモ朝鮮ニ對スル關係ハサウ急ニ
進ンテ參ラナイ、彼國ニ求メル所ノ少ナイ爲メニ我國カ輕蔑シタノテ、明治九年
頃ニ修交ノコトカ進ンテ參ツテ爾來日韓ノ貿易ハ大ニ注意スヘキ様ニ爲ツタ

ト考ヘマス、而シテ朝鮮ノ事情ニ精通シタモノニ聞キマスト情ナイ國柄ト云フコトハ誰レモ言ヒマスケレトモ貿易上ノ進歩ヲ見マスルト決シテ左様ニ輕蔑スヘキモノテナカラウヤウニ思ハレマス、十年以來ノ貿易及本邦人ノ交通ニ就テ調査シマシタニ中々見ルヘキモノカアル、今二十七年カラ二十九年マテ彼國ニ在留セル人員ノ増加ヲ見マシテモ三年ノ間ニ九千人カラ一萬二千五百人マテニ進ンテ居ル、又貿易ノ輸出入ヲ調ヘテ見マスト二十一年カラ三十年マテノ十年ノ統計カ輸出ノ點ニ於テ二十一年ニ七拾萬圓ト云フ額カ三十年ニ五百貳拾五萬圓ニ進ンテ居ル、又輸入ノ額ハ百四萬圓カラ八百八拾六萬圓マテニ進ンテ輸出入合計貳百萬圓ニ足ラヌモノカ千四百萬圓マテニ進ンテ居ル、殆ント七倍ノ進ミヲ爲シテ居ルサウシテ此ノ輸出入ノ重モナル取引ハトコノ國テアルカト云フト我日本テアル又日本ノ貿易高カラ較ヘテ見テモ朝鮮ハ左マテ低イ國テナイ、輸出ニ於テハ亞米利加カ第一等テアルケレトモ續イテ香港トカ或ハ支那トカ英吉利トカ印度朝鮮ト云フヤウニ矢張相當ナ位置ヲ持ツテ居ル、又輸入ハ英吉利カ一番テアルケレトモ朝鮮ハ其最下等ノ國トハ言ハレナイ、サウシ

テ輸出入品ノ摸樣ヲ見ルト朝鮮カラハ天產物又ハ粗製品即チ米トカ大豆大麥牛皮肥料ナトカ其大部分ヲ占メ又本邦カラハ多ク鐵器トカ綿絲織物摺附木卷煙草等ノ種類テ多クハ製造品ヲ以テ向フニ供スル殊ニ日本人ノ朝鮮近海ニ於テ漁業ニ從事スルモノカ餘程多イ趣テアリマス、是ノ統計ハ完備シテ居リマセヌケレトモ……斯様ニ朝鮮トノ貿易ハ相當ナル進ミテアリマスケレトモ概シテ日本ノ朝鮮ヲ見ルコト甚タ冷淡テ朝鮮ヲ大事ナ國柄ト見テ貿易ヲ致シテ居ラヌト言フテモ宜イ有様テアル、今般私カ彼地ニ罷越スノハ最初申上ケマス通り別ニ朝鮮ノ政治上ニ關シ若クハ商賣上ニ關シテ居ルト云フ譯テハコサイマセヌ、何カ思付カアツテ罷越スト云フ譯テモコサイマセヌ、併シ前申ス通り貿易上ノ關係ハ甚タ重ンスヘキ國テアルノテ假令國ノ程度ト云ヒ人物ト云ヒ、其階級モ下テ居テ卑ムヘキ有様テアルニモセヨ、長イ間交ヲ結ンテ居ル此ノ朝鮮ニ參レハ特ニ心ヲ用テ之ヲ視察シ丁度先刻田口君カ支那ノ制度ヲ發達サセルニハ第一ニ貨幣制度ヲ定メ、又兌換紙幣ノ方法ヲ興シ其國ヲシテ中央銀行ノ如キモノヲ組立サセテ大ニ其國ノ商賣ヲ發達セシムルノカ即チ唇ノ亡ヒサルコ

トヲ務ムル方法ニナルテアラウト仰ヤイマシタカ、私モ朝鮮ニ對シテ尙ホ同シ
感シヲ有チハ致シマスマイカト考ヘマス、丁度今マテノ朝鮮ヲ將來誘導致スニ
於テ第一ニ經濟的ニ心ヲ用ユルカ宜カラウト思ヒマスル點ヲ申上ケテ果シテ
朝鮮ノ土地へ行ツテ見テ此ノ事ニ就テハ斯クアリタイ、一應表面ニ就テハ斯ウ
考ヘテ見タカ實際取調ヘタラス様テアル就テハ此ノ後ハ斯ウ云フ處置ヲ施シ
タラ如何テアルカト云フコトハ取調ヘノ上更ニ此ノ龍門社諸君ノ御攻究ヲ請
ヒタイト考ヘマス、唯朝鮮ニ對シテ斯ウ云フ意見ヲ以テ旅行致シテ見タイト云
フホンノ一場ノ御告別ノ爲メニ一言申上ケ置クニ過キマセヌ

又明治三十一年四月十九日東京商業會議所會員ハ其會頭タル先生ノ爲メニ送別
會ヲ催フシ席上左ノ演說アリ

中野副會頭送辭ノ要領

自分ハ本會ノ紹介者タル故ヲ以テ一言スヘシ今回澁澤君ニハ朝鮮ニ趣カル、
ニ付前例ニ依リ今日留送別會ヲ開キタルニ君ノ來臨ヲ辱フシ一同満足ノ至リ
ナリ謹テ君ノ健康ヲ祝ス、惜澁澤君ノ渡韓ニ就テ其用向ノ何タルハ吾々ノ知ル
處ニ非サルモ朝鮮ト我國トハ其地形上ニ於テ唇齒ノ關係アリ且ツ交通上ノ情
誼モ一朝夕ノ故ニ非サルニ外交政策ノ失敗ヨリ今ヤ吳越晉ナラサル有様トナ
リシハ遺憾千萬ナリ願フニ政治上ニ於テ彼我ノ交情舊態ニ回復スルハ容易ノ
業ニアラス專ロ將來ハ商業上ノ關係ヨリ相扶掖シテ政治上ニ於ケル失敗ヲ償
フノ外ナシ今回澁澤君ノ渡韓ハ此ノ希望ヲ遂達スルニ就テ幾多ノ便宜ヲ與フ
ルナラント信ス君ハ銀行業ノ上ニ於テ彼國トハ密接ノ關係アリ加フルニ日本
實業界ノ泰斗トシテ其名聲ハ鷄林八道ニ噴々タルモノアルヘキヲ以テ平素無
感覺ノ朝鮮人モ君ノ聲咳ニ接シテ大ニ感奮スルニ至ルヘシ願クハ君ニ於テモ
彼國官民ニ接セラル、ニ當リテハ我國民真意ノ在ル所ヲ開示シ以テ彼我阻隔
ノ感情ヲ融和スルニ力メラレンコトヲ切望ノ至ニ堪ヘス
今夕ハ極メテ不行届ナレトモ款語盡辭斯夕ヲ永フセラレンコトヲ望ム

澁澤會頭答辭ノ要領

今回自分渡韓ニ就テ前例ニ依リ留送別會ヲ開カレタルハ誠ニ満足ナリ
只今中野君ヨリ贈言ヲ辱フセリ同君ノ述ヘラレシ處ハ自分モ至極同感ナリト

雖モ不才無能ノ自分ニ於テ到底其贈言ニ當ル能ハサルヲ恐ル、ノミナラス此ノ行ハ左様ナル大目的大抱負ヲ有スルニハ非スシテ早ク言ヘハ支店ノ巡視ニ過キス元來同地ニ於ケル支店ハ鷄肋銀行トモ謂フヘキモノナリ曾テ英人サルド氏ヨリ内地ノ取引ヲ專業トスル銀行ニ於テ外國ニ取引ヲ開始スルハ危險ニシテ其結果失敗ニ歸シ易シト警メラレタルコトアリシカ如何ニモ廿七年ヨリ廿九年頃迄ハ閉店センカト迄思ヒシ程ナリシ幸ニ其後ハ差シタルコトナク今日ニ至リタルモ此ノ際實況觀察ノ必要ヲ感シ急ニ渡韓ヲ思ヒ立チシ次第ナリ勿論單ニ支店巡視トハ云フモノ、實ハ他國ニ於ケル貨幣問題ノ實況ヲ調査セントスルモノ亦目的ノ一ナリ御承知ノ如ク朝鮮ハ以前ハ銅貨國ニテ流通貨幣ハ銅貨ノミナリシカ其後五兩銀白銅ナト通用スルニ至レリ然ルニ五兩銀ハ其鑄造高貳百萬圓ニ過キスシテ實際ハ日本ノ一圓銀ハ殆ント同國ノ通貨同様ニ國內ニ流通シ銀紙合算シテ同國內ニ流通シツ、アル我貨幣ノ高ハ凡三百五六拾萬圓ニ上ホリ同國ニ於ケル通商其他ノ大部ハ全ク此ノ三百五六拾萬圓ニテ支配サレ居ル實況ナリ其國ノ貧弱推想ニ餘リアリ然ルニ昨年十月以來我國ハ

金本位ヲ施行シタレハ同國ニ流通シ居ル圓銀ハ自然回收セラルヘク其回收セラレタル後ハ同國ハ復ヒ銅貨國ノ舊態ニ復サンモ知ル可ラス相場ノ變動多キ銅貨カ其國內ノ流通貨幣トナリテハ通商貿易上ニ感スル不便少カラサルヨリ仁川釜山等ニ於ケル日本人商業會議所ハ之ヲ憂慮シ日本圓銀ニ刻印シテ依然同國內ニ流通セシメ置キタシトノ意見ヲ申立テ内地銀行ヘモ同意ヲ求メ來リタリ財務顧問タリシプラオン氏ニハ左様ノ意ナキニモ非サリシ様ナレト露人アレキシーフ氏代ルニ及ンテ此ノ意見ニハ反對ヲ表セリ願フニ我圓銀ニ刻印シテ依然同國ニ流通セシメ置クコトハ我國ノ幣制ヨリ觀テモ彼國ノ體面ヨリ觀テモ頗ル考究ヲ要スル事柄ニテ其得失ハ輕々ニ決スヘキニ非レトモ兎ニ角關係多キ問題ナルニヨリ親シク實況ヲ調査シテ自分ノ意見ヲモ定メント欲スルナリ今モ述フルカ如ク朝鮮ハ固ヨリ貧弱國ナルニハ相違ナケレトモ貿易上ノ關係ニ於テハ決シテ輕視ス可ラサルモノアリ此ノ程モ一寸取調ヘ見タルニ明治二十一年ヨリ今日迄十年間ニ於テ彼我輸出入ハ八百萬圓ノ多キニ達セリ日韓貿易ノ前途ハ頗ル多望ナリト謂ハサルヲ得サルナリ歐米強國ヘノ渡航ニ

ノミ重キヲ置キ朝鮮ナトヘ赴ク者ヲハ輕ロシメルト云フ様ニテハ迎モ我通商
上ノ實益ヲ進ムル能ハスト信ス會員諸君カ特ニ自分ノ渡韓ノ爲メニ此ノ光榮
アル盛宴ヲ張ラレタル其用意ノ在ル所ヲ推想スレハ自分ハ殊ニ満足ニ堪ヘサ
ルモノアリ只恐ル自分ノ不才ナル到底諸君ノ希望ヲ完フスルニ由ナカラシ
トヲ謹テ茲ニ諸君ノ好意ヲ謝ス

朝鮮旅行中先生諸所ニ於テ歡迎ヲ受ケ席上演説アリ

仁川ニ於ケル歡迎會席上演説

今般不肖ノ渡韓ニ付キ諸君カ此ノ盛宴ヲ張テ歡迎ヲ忝フスルハ不肖ノ深ク感
謝スル所ナリ而シテ諸君ハ不肖ニ何ナリト一席ノ談話ヲ試ミヨトノ御希望ナ
レト、這回ノ行タル素ト第一銀行々務視察ノ爲メニシテ、且ツ韓國ノ地ヲ踏ムハ
今回カ始テナレハ來韓後種々ノ關係ヨリシテ當國ニ於ケル財政及經濟事情ハ
多少了知スルニ至リタリト雖モ未タ見聞モ淺ク敢テ諸君ノ清聽ヲ汚スヘキ程
ノ意見モナシ、唯最モ心ニ感シタルハ當國ニ於ケル貿易ノ事ニシテ幸ヒ諸君ト
爰ニ相見タルヲ機會トシテ貿易ノ本色ニ就キ聊カ攻究ヲ試ミ度ク思フナリ

凡ソ國家ノ生存ヲ維持シ其發達ヲ期セント欲セハ貿易ヲ隆盛ナラシメサル可
ラサルハ言フ迄モナキ事ナリト雖モ其貿易ニモ二種アルカ如シ、一ハ即チ働掛
ノ貿易ニシテ一ハ即チ受身ノ貿易ナリ、而シテ日本ノ貿易ハ二者何レニ屬スル
カト云フニ概論スレハ後者即チ受身貿易ノ状態ヲ免レスト言ハサルヲ得サル
カ如シ、顧ミレハ日本カ港ヲ開キ外國ト通商スルニ至リタルハ近ク四十年前ノ
事ニシテ當時米國ノ水師提督ベルリ氏カ我國ニ開港ヲ迫リタル目的ハ素ヨリ
通商ニアラン其他英ト云ヒ佛ト云ヒ皆來リテ我ト條約ヲ結フニ至リタルハ通
商ヲ大目的ト爲シタルニ相違ナカルヘシト雖モ我邦ノ状態ヨリ言ヘハ其開港
ハ通商ノ爲メニアラスシテ寔ニ政治ノ爲ナリシナリ、左レハ我邦ノ貿易タル常
ニ政治上ヨリ誘導サル、事實ヲ有スルモノ比々然ラサルハナシ、今二三ノ例ヲ
舉クレハ近來著シク進歩セシ紡績業ノ如キ、如何ニシテ今日ノ發達ヲ見タルカ
ト云フニ明治十二三年頃不換紙幣増發ノ爲メ非常ニ輸入超過ヲ見ルニ至リ當
時最モ多額ノ輸入ヲ見タルハ綿布類ニテアリタレハ斯ク多額ノ綿布類ヲ輸入
サレテハ國家ノ不利益ナリト心付我國ニテモ斯業ヲ獎勵シ外國品ノ輸入ヲ防

カサルヘカラストテ之ヲ獎勵スルニ至リタルカ夫カ紡績事業今日ノ發達ヲ見ルニ至リタル起因ニシテ、航海ノ事トテ亦然リ、鐵道トテモ同様ナリ、歐米諸國ニテハ航海業ハ斯ク々々ノ有様ナリ、鐵道ハ斯ク々々ノ状態ナリ、故ニ我國モ斯クセサルヘカラスト云フ調子ヨリ政府先ツ之カ獎勵ニ努メ今日ニ至リタルモノニシテ、要スルニ我國ノ通商タル常ニ政治上ノ進歩ニ後ル、コト當ニ一步ノミニアラサルナリ

以上言フ如クナレハ我國ノ貿易ナルモノハ最初ハ彼レ輸入シ來リタルニ依テ世界ニ珍奇ノ產物アルヲ知り彼レ購求シ去ルニ依リ我ノ產物ニ價值アルヲ知得セリト云フ有様ニテ是レ鎖國ノ餘弊無理ナラヌ事情ナシトセサルモ今日ニ至リテ尙ホ其餘弊ヲ蟬脱スル能ハス我レ彼ニ買ハント欲スル所ノモノハ坐シテ彼ノ來リ賣ルヲ待チ、彼レ我ニ賣ラント欲スル所ノモノハ又坐シテ彼ノ來リ買フヲ待ツ、是レ我國ノ貿易カ受身貿易ノ位置ヲ脱セサルカ爲メニシテ、居坐リ貿易ノ評アルモ寔ニ止ムヲ得サル次第ト云ハサルヘカラスト然レトモ斯クノ如キハ決シテ貿易ノ本色ニアラサルノミナラス實ニ我ノ爲メ深ク遺憾トセサル

ヲ得サルナリ、苟モ外國ト通商ヲ爲シ之ヲ以テ國運ノ進歩ヲ計ラント欲セハ是非トモ受身貿易ノ陋態ヲ脱シテ、働掛貿易ノ位置ニ進マサル可カラスト即チ進取的貿易ノ位置ニ進マサルヘカラスト然ルニ今韓國ニ到リテ其貿易ノ情況ヲ觀察スルニ韓國ニ對シテハ我ハ實ニ働掛ノ位置ニ立テリ、是レ實ニ吾人ノ意ヲ強スル所ニシテ國家ノ爲メ大ニ悦フヘキ事ナリトス

韓國ニ對スル日本ノ貿易ハ右言フカ如ク全ク働掛ニシテ貿易ノ本色ニ適フタルモノナルニ願ミテ一般カ韓國ニ對スル意向ヲ察スレハ頗ル解シ難キモノナクンハアラス現ニ英國ニ旅行スルトカ佛蘭西ニ渡航スルトカ言ヘハ其旅行渡航ハ實業ノ爲メナラスシテ觀風遊覽ノ慰ミ旅行タルニ拘ハラス行ク當人モ誇リ顔ニ吹聴シ知己ノ人々ハ盛宴ヲ張テ其行ヲ壯ニスル有様ナレト韓國ニ渡航スト云ヘハ國家ノ實益ヲ計ル旅行ナルモ世間ニ對シテ高言モ出來サルカ如ク思惟シ之ヲ聞ケル知己モ一般ニ輕視シ去ルノ風アリ是レ畢竟スルニ韓國ヲ蔑如スルノ致ス所ナリト雖モ實ニ誤解ノ甚シキモノト言ハサルヲ得サルナリ蓋シ日韓ノ國交ハ實ニ久シキ歴史ヲ有セリ然レトモ兩國ノ發達ヲ見ルニ至リ

タルハ近ク明治九年以來ノ事ニ屬ス而モ爾來兩國ノ交際ニハ屢波瀾アリ屢消長アリタリト雖モ其貿易ハ漸次發達シ殊ニ二十七年以後ニ於テ著シク進歩ヲ呈スルニ至リタリ尤モ二十七年以後ニ於テモ國際的關係ハ尙ホ數回ノ變遷ヲ免レサリシト雖モ竊ニ察スルニ今ヤ兩國ノ關係ハ漸ク順ニ復シタルカ如シ抑モ我國實業家ノ位置卑ク其勢力ノ微弱ナルハ予ノ平素最モ遺憾トスル所ニシテ實業家ノ位置ヲ高メ其勢力ヲ伸張スルノ必要ニ就テハ毎ニ咽喉ヲ枯ラシ舌頭ヲ爛ラスヲ知ラスシテ世人ノ注意ヲ喚起シタリ何トナレハ我國ニ於ケル實業ト政治トノ關係ハ實ニ前述スル所ノ如クニシテ斯ル狀態ニ安ニスルハ國家ノ實益ヲ進ムル所以ニアラサレハナリ斯ク言ヘハトテ予ハ政治ト實業トヲ全ク隔絶セヨト希望スル者ニアラス實業ノ發達ニモ政治ノ保護ヲ必要トスルハ勿論ナリ唯實業家ノ位置勢力能ク政治家ヲ動スニ至ルニ非サレハ眞ノ發達ハ期スヘカラサル者ニシテ希望スル所ハ此ノ點ニアリ彼ノ英國ノ國交ヲ看ルニ實業家ノ企圖先ツ進ミ政府ハ其利益ヲ保護スルヲ以テ外交ノ主眼トスルカ如ク實業家ノ勢力モ爰ニ進マサレハ不可ナリ即チ政治ノ保護ヲ後楯トシテ進ム

ヘキニ進ムト政治家ノ誘導ニ依リテ始メテ其業ヲ進ムルトハ大ニ趣ヲ異ニスル者ニシテ日韓ノ貿易モ從來ニ於テハ政治的國際ノ消長ニ依リテ然ル後實業家ハ進退ヲ決スト云フ狀態ナキニアラサリシカ如シ然レトモ今ヤ日韓ノ關係ハ政府モ實業家ノ後楯トナリテ其利益ヲ保護シ且ツ之ヲ獎勵スルヲ以テ主眼トスルニ至リタルカ如ク予カ其國際漸ク順ニ復シタルカ如シト云フハ即チ然リ果シテ然ラハ諸君ハ此ノ機ニ乘シテ益其貿易ヲ進メ國富ヲ倍增スルコトニ努メサルヘカラス而モ尙ホ爰ニ一言ヲ加ヘサルヲ得サルハ日韓貿易上我々ハ韓人ニ對シ誘導啓發ノ必要ヲ常ニ紀念トシテ尙モ之ヲ忘ル可ラサル事是ナリ殊更言フ迄モナケレト凡ソ未開國ニ對スル貿易ハ我々ノ利益ヲ收ムルト共ニ彼ノ利源ヲ啓發シ其進歩ヲ誘導セサルヘカラサルモノニシテ英國々民カ貿易上大成効ノ國民トシテ稱讚サル、ハ一ニ後進國ニ對シテ誘導啓發スルノ要ヲ忘レサリシニアリ然ルニ彼レノ利害如何ハ我ノ關スル所ニアラス彼ニ大損アルモ我ニ大利アラハ可ナリト斯クノ如キハ決シテ彼我ノ貿易ヲ進ムル所以ニアラスシテ日韓貿易ノ將來ニ於テ最モ心スヘキ事ナリ而シテ彼ノ利源ヲ啓

發シ其進歩ヲ誘導スルハ取りモ直サス我カ利益ヲ進ムル所以ニシテ之ニ依テ能ク成效セント欲セハ務メテ倨傲不遜ヲ避ケ親切ヲ主トシ空名ヲ尊ハスシテ事實ヲ重シシ虛榮ヲ喜ハスシテ實益ヲ探ラサルヘカラス念フニ諸君ハ夙ニ是等ノ點ニ着目セラレ而シテ今日ノ進歩ヲ致サレタルコトナンハ以上ノ如キ講義シミタルコトヲ言フハ或ハ禮ヲ失スルノ恐レアリト雖モ日韓ノ關係ハ世人ノ多數カ卑下輕視スルカ如キモノニ非サルノミナラス種々ノ方面ヨリ觀察シテ現在及ヒ將來ニ頗ル有望ナルコト是レ決シテ諸君ニ對スル御世辭ニアラス今回實見ニ依リテ愈々其感ヲ深フシタル所以ナリ故ニ斯ニ所感ノ一斑ヲ述ヘテ諸君ノ希冀ニ答ヘ併セテ今夕御歡待ノ厚意ヲ謝スト云フ

釜山ニ於ケル演說ノ大要

(前略) 私ハ外交上ノ進化ト云フ點ニ就テ卑見ノ存スル所ヲ語ラントス凡ソ外交ニハ文明的外交アリ野蠻的外交アリ其名ニシテ文野ノ別アルカ如ク文明ト野蠻トハ獨リ形ヲ同フセサルノミナラス其趣ノ上ニ於テ非常ノ差異アルモノナリ他ニ例ヲ求ムルヲ要セシ日韓ノ國交ニ就テ見レハ足レリトス抑モ我日本

カ朝鮮トノ間ニ於ケル古來ノ關係ハ奈何シ地理上ヨリスレハ萬口一聲ニ唇齒輔車ノ國柄ト云ヒ又中古ニ於テハ儒教ヲ送リテ我ノ文化ヲ資ケ或ハ佛教ヲ傳ヘ或ハ工藝技術ヲ授クルノ媒介トナリタルモノ實ニ朝鮮ナリ彼レ神功ノ征韓アリタル代リニハ奈良朝ノ時代ニ阿部比羅夫カ兵ヲ率ヒテ此ノ國ノ爲メニ戦ヒタルコトアリ彼レ豊公カ文祿ノ役アリタルトモ近年日清ノ大役アリタルカ如ク斷ツテモ斷ツヘカラサル因縁ノ相纏綿セルモノハ實ニ是レ日韓兩國ノ間柄ナリトス故ニ其本ヲ察シテ此ノ國ノ爲ニ働キ此ノ國ノ爲ニ導クハ吾人日本國民ノ責任ニアラスシテ何ソヤ殊ニ今日ハ形勢我ニ可ナルノ時運ニ際セルノ日ニ於テオヤ宜シク此ノ國ノ爲ニ力ヲ貸スヘキノ秋ナリ(中略)人智漸ク開ケ外交ノ術漸ク進ムニ從テ往時ニ行レタル侵略ハ變シテ通商ト成リ攻撃ハ化シテ殖民トナリタルカ如キ是レ今日ニ行ハル世界文明的外交ノ一斑ナリトス幸ニ我國ノ朝鮮ニ對スル現狀ヲ察スルニ正ニ是レ野ヨリ文ニ入リツ、アリ否ナ殆ント將ニ其極度ト云フ迄ニハ至ラサレモ相當ノ場合ニ進ミ居ルナリ然ルニ我々御互ノ働作ハ如何ト願ルニ果シテ時勢相當ノ働作ヲ爲シツ、アルカ殘

念ナカラ獨立獨歩我ハ我トシテ通商貿易ノ務メニ從事シ能ハサルカノ如キ恨アラサルナキカ唯夫レ攻略侵襲ニ代リテ吾人ノ使用スヘキ外交上ノ最利益タル通商ト貿易トハ如今奈何ニ應用セラレ將タ奈何ナル効果ヲ收メツ、アルカ、斯處ニ列席セラル、武官並ニ外交ノ御方々ハ畢竟スルニ我々實業者ノ先鋒ニアラスシテ實ニ我等ノ爲ニハ後背ニ在リテ援護ノ勞ヲ採ラル、ニ過キサルモノナリ而ルニ却テ武官ヤ外交官カ主トナリ我々實業者ハ後方ヨリ附託シテ漸ク自家頭上ノ經營爲スカ如キハ我モ人モ共ニ甚タ遺憾ノ極ナラスヤ然リ而シテ日韓ノ外交位置カ前陳ノ如ク粗ホ文明的ノ程度ニ進ミツ、アルニモ拘ハス大ニ此ノ位置ヲ利用シテ爲スヘキノ責任ヲ有スル我々實業者カ働作ノ上ニ現レツ、アル効果ハ果シテ圓滿ナルカ否ナ文明ニ而モ完全ニ其通商貿易カ現今ノ位置現今ノ境遇ト相匹敵シ相併進シツ、アルカト云フニ恐クハ然ラサルモノニ似タリ唯夫レ朝鮮ト云ハス我々實業界現時ノ情態ハ實ニ然リ決シテ諸君ヲノミ斯ク言フニアラス私モ亦其圈内ニアルカ故ニ一層ノ奮勵ヲ以テ厥フヘキ奮奮ヲ脱セントノ意志轉切ナルモノアルヲ以テ斯ク申シタル譯ナリ

(中略) 扱テ日韓外交上ニ於ケル今日ノ場合ハ我々實業家カ一飛躍ヲ試ムヘキ時ニシテ我々カ奉シテ立ツヘキ商工業カ發動セントスルノ端緒ナリト去レハトテ輕舉急進ハ餘リ宜シカラサル次第ナルカ一體御當地ハ開港ノ歴史カ久遠ナル爲メカ將タ社會ノ組織カ尤モ日本のニ整頓シ居ル爲メカ仁川京城等ニ比較スレハ至極平穩ニシテ物ニ競争セサルノ風アリ實ニ實業者ノ第一義トシテ尊崇スヘキ沈着ノ趣キアリ然レトモ是モ少シク中庸ヲ失スレハ稍守舊的ニ偏スルノ嫌ヒアリ進取ノ氣象ニ乏シキノ憾ミアリ故ニ沈着實實ナル地方ヲ占メテ其目的ニ向テ進行スルハ素ヨリ惡シカラサレトモ或ル場合ニ遭遇スレハ感天動地ノ一大活劇ヲ爲スヘキ事モアルヘキナリ加フルニ世界ノ大勢ハ滔々トシテ地ヲ縮メ民ヲ壓シツ、アルナリ強ハ弱ヲ制シ優者ハ遠慮ナク劣者ヲ倒シジ、アルナリ苟モ此ノ大勢ニシテ一朝侵入シ來ランカ江河ノ決スルト一般得テ防クヘクモアラサルナリ宜シク世界ノ機運ニ察シ宇内ノ大勢ニ鑒ミテ相後レサルノ工夫ナカルヘカラス斯ル釜山ノ風景氣候及ヒ釜山今日ノ情況ヲ何處迄モ現在ノ儘ニ維持シテ永久諸君ノ獨占ニ委シ他人ノ斯睡ヲ容レサラシメン